

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三種郵便物認可
平成五年六月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七九三号



日川協加盟

No. 793

六月号

第45回 西日本川柳大会

とき 9月5日(日)

ところ 岡山県久米郡久米南町中央公民館

第一部(事前投句・6月30日締切)

「幻」仲川たけし・斎藤 大雄・大森風来子

「幸」山田 良行・田口 麦彦・小林由多香

「岸」橘高 薫風・尾藤 三柳・濱野 奇童

投句料 1000円(発表誌呈)

◇各題ごと別紙(15×20cm)に2句ずつと氏名(雅号)を表面に書き、封筒に「大会投句」と明記すること。

投句先 岡山県久米郡久米南町下弓削

弓削川柳社

第二部(大会当日受付・各題2句)

「休 日」 安 藤 富久男 選

「伝 統」 磯 野 いさむ 選

「期 待」 小松原 爽介 選

「トンネル」 寺 尾 俊 平 選

「弾 む」 西 田 柳宏子 選

「舞 う」 八 木 千代 選

特別課題 当日発表(1句)

参加費 2000円(昼食・記念品呈)

主催 久米南町・同教育委員会

弓削川柳社

国民文化祭(川柳)

事前投句の課題と選者(各題2句)

「未来」磯野いさむ「風土」今野 空白

「流れ」猿田 寒坊「美」志水 剣人

「心」仲川たけし「一番」永石 珠子

「大地」西村 在我「鼓動」藤沢 岳豊

応募受付期間 4月1日～6月30日

応募料 1000円「郵便振替口座」利用

実行委員会作成の応募用紙に記入し、郵便局で受け取った受領書または写しを添え、封筒に「川柳作品」と朱書、

大会・吟行・懇親会参加の有無を明記

〒020 盛岡市内丸10-1 係

応募先

残暑見舞広告

本誌八月号に掲載する残暑見舞広告を募集いたします。よろしくお願ひ申し上げます。

★個人 一口二、〇〇〇円

(氏名・住所・電話番号など掲載)

★団体 次の四種といたします。

①1/3頁六、〇〇〇円 ③2/3頁二、〇〇〇円

②半頁九、〇〇〇円 ④一頁一八、〇〇〇円

▼原稿締切 6月25日

〒545 大阪市阿倍野区三好町二一〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社

百代過客

西尾 栄

昭和五十五年五月十一日、皆々様の御
浄財で八尾市太子堂、西国一番の札所將
軍寺の門前に、私の

一歩出すれば我れ旅人となる心

という句碑が建立された。当時、いや今
も、「これ川柳ですか」という質問を受け
るのだが、我ながら川俳のけじめのつか
ぬ句で、すまなく思っている。当時私は
八尾ライオンズクラブの俳壇「笹鳴」で
木菟という号で俳句を作っていたから鶴
のよつな句が出来たのであろう。句の意
味は芭蕉の『おくのほそみち』の

「月日は百代の過客にして行きかふ年
も又旅人也」云々という立派な書き出し
の一文に惚れこんで、何とか句にしてみ
たかったからである。ところが、この頃、
或る本を読んで、この一文は芭蕉翁が初
めて書いたものでなく、李白の

「夫れ天地は万物の逆旅、光陰は百代
の過客にして浮世は夢の如し歎を為すこ
と幾何ぞや。古人燭をとつて夜遊ぶも、
まことに所以也」からきている。

また、井原西鶴の『日本永代蔵』の巻
一にも見られ、一部は『新可笑記』にも
ひかれている。一方、大淀三千風の『日
本行脚文集』巻之三にも見ることが出来
る。又矢土氏如流子の詞として「されば
万物順逆旅の間丸として、百代の過客の
送り荷物を漏らさず、時の相場に見合せ、
上中下のけぢめなく、仕切帖を出し給う」
云々などあって、この如流子も明らか

に、李白の序を踏まえている。

当時さかんに読まれたものである以上、
誰が先、誰が後ということにあまりこだ
わらないでいるようなのだが、西鶴の『日
本永代蔵』は貞享五年刊で、元禄二年の
芭蕉の旅より明らかに先であるから、西
鶴が芭蕉の書いたものを読んでいるはず
はない。当時大いに読まれていたものを
土台としているのだから大した問題では
ないが、芭蕉が一番後だったことは間違
いない。

島崎藤村の『夜明け前』の序の章にし
ても「木曾路はすべて山の中である。あ
るところは唄づたいに行く崖の道である。
あるところは数十間の深さに臨む木曾川
の岸である」云々の書き出しも、曾ての
木曾路を紹介する旅の案内の冒頭に外な
らない。文章の書き出しの序の章のむす
かしきをつくづく知る。

座右の句

張り替えた障子の中に母います

(栞)

私の句

どの国の母にもつらい銃の音

丸山 よし津

川柳塔 六月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 百代過客

メモ魔のメモ帖から

川柳塔 (同人吟)

自選集

川柳の群像 阿達義雄

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (十七丁)

水煙抄

秀句鑑賞

「同人吟」
水煙抄

路郎賞・川柳塔賞中間発表

大空のころろ

銀河系

西尾 栞 … (1)

野村太茂津 … (2)

西尾 栞選 … (4)

東野 大八 … (44)

黒川紫香選 … (50)

八木千代 … (48)

林野甦光 … (73)

橘高 薫風 … (98)

河内天笑選 … (74)

メモ魔のメモ帖から

野村太茂津



「文芸というものは」
常にいつでも、新境地を
拓いてゆく心構えで立ち向
かわねば、芸術性というも
のの価値は無に等しいもの
になると思わねばならぬ。

選稿していて、この句は、いつかどこかで
お目にかかったような気がすることがある。
こんな句は戴かない。

文芸というものの命は、昔も今も新しさに
あるのではないか、と思える。

芭蕉も古い句の姿は、花のない古ぼけた木
立を見るようだ、と言っている。

「文は人なり」――正しくはラテン語で、
「文体は人なり」だという。

「人さまに迷惑をかけない文章の書き方」
句読点や字数など、基本的な技術を身につけ
よ。他人の真似をするな。

自分の考えたことを書け。だが独り言にな
るな。素直に、短く、シンプル(簡素・素朴)
に書け。

茴香の花

「秘境」

一路集「番組」

「養う」

初歩教室「生きる」

■句集紹介 土居ひでの『母娘草』

各地柳壇（佳句地十選／黒田真砂）

■句会だより 久世川柳クラブ

■エッセイ 万句合漫步

五月本社句会

柳界展望

六月各地句会案内

■編集後記

小出智子選……(78)

小玉満江選……(80)

江口明光選……(80)

渡部さと美選……(81)

吉岡美房……(82)

田中正坊……(47)

二宗吟平……(97)

田中薫……(106)

……(100)

……(104)

……(107)

……(108)

座右の句

立話長うて犬も坐り換え

私の句

駄目だとは思えど白寿へ意識する

(薫風)

工藤吟笑

そして、できることなら、パンチとひねりを効かせよ。細かい切り込みで、調子をつけろ。

文章の好みは、人それぞれだから、善し悪しの問題ではない。

しかし、べとべと冗慢な文章は、やりきれない。

◆ 私の年間賞選考の基準 ◆

① 一年間欠稿なく、質感のある作品

② 休まないことが第一、しかも作品に活気が漲ることを対象

③ その月によって息切れを感じる句がある。

そんなとき、残念ながら戴かない。

ことさらな破調・安易な繰り返し、類型する表現法、

不安定な助詞の遣い方、ETC

◆ 披講も「芸」なり ◆

① 選者たる人は、句会を盛り上げるために、もつと心して、聞く側（参加・出席者）と

熱っぽく対峙した披講姿勢を望みたい。

② 単に大きな声だけでは、聞く人の耳に、快い韻律となつて響いてこない。

③ 句の内容をよく咀嚼し、抑揚・呼吸・リズムを踏まえて、情感のある披講が必要である。



西尾 葉選

羽曳野市

吉川 寿美

らつきょうの齒ざわり夏は至近距離
景気低迷キャベツ畑の情死行

春うららほんに見事にもの忘れ

見知らぬ人の腰手ぬぐいが亡父に似て

口直し少し噂の輪にまじり

涅槃西風ともだち一人旅立たず

倉吉市

奥谷 弘朗

どう見ても半端者しか見てくれず

頭目がそんな弱気どうなさる

耐えるより利口に回った方が勝ち

文化人らしく見せたい半端者

陽光をまともに受けてうそがない

女房の方がはるかに出来ている

米子市

林 瑞枝

ふる里の夕陽わたしと肌が合う

太陽を見過ぎた向日葵の黄色

棧橋で迷う言葉は呑み込んだ

森に入ると嘘もつけない威張れない

生きて来た私に点を付けている

蝶の舞うみやこわすれを墓守りに

松原市

小池 しげお

土地の値を聞いてびっくりした土筆

テレビ電話ついたら髭を生やします

さつきまで主人が居った道具箱

差引きを0にするから疑われ

お手紙を読んだら内気には見えず

愁傷へ赤い椿が落ちている

唐津市

久保 正敏

繰り返す不安の中で老いて行く

瞑想は句想のためと限らない

自叙伝をやらせで少し飾っとく

炎えつきた人魚のヒレが動かない

おもいきりレモンを絞る思慕がある

シェルターの中で育てる不義の恋

熊本市

永田俊子

君死に給うなかれと送るPKO

レモンという自負に距離をおくみかん

近くて遠い父だった冬帽子

接待の魚ごころに添う水ごころ

退くことを知ってた母の処方箋

その日まで少しは残す朱の絵の具

広島県

藤解静風

木暮実千代のホクロの位置を覚えてる

好きだなあ京塚昌子の二重あご

愛しさは太地喜和子の完熟度

笠智衆の枯淡の芸に酔うていた

島倉千代子のサインはいまも宝物

美空ひばりの悲しい酒にもらい泣き

西宮市

奥田みつ子

スイートピーお仏壇にも春が来る

茶漬サラサラ競い合うこと何もなし

錯覚も楽しからずやと 浮き世

水銀灯 ポストを守るように立つ

美しい錯覚でよし 男と女

転居先不明 桜が咲いているばかり

米子市

林荒介

芹なずな春をさらりと茹でこぼす

スぺアインクのある万年筆のゆとり

実印に躊躇うことはさせられぬ

押し返す風にも揺らぐ芒たち

どうしても自分を攻めることになる

念いとは別のところで縄を断つ

大阪市

西出楓楽

振返るたび忘れたことが増え

亭主関白 自立の出来ぬだけのこと

人畜無害 男のにおい抜けている

ときどきはスーブ押売りして同居

話のわかる人でストレス溜めている

無理をして使った敬語からボロが

藤井寺市

吉岡美房

もつれつつ彼岸へ消えた双つ蝶

豌豆の花と契って蝶は死ぬ

葉桜や妻に出逢いし頃のこと

春の鬱前歯一本抜けたまま

正眼の構え崩せぬまま五月

月が出ていつそ別れがつかくなる

奈良県

田中紀美代

たんぼの綿毛も乗ったお引越

生涯を薬味のままでいる私

先まわり呆けているのが浪速っ子

居心地が良いのかジョーク冴えている

橋ひとつ渡ると噂否定され

恋になるきっかけくれた青りんご

松原市 玉置重人

ちぐはぐな絵をあたためている夫婦
不況風 神も仏も忙しい

整頓をされた机で落ちつかぬ

古希の坂 命の値ぶみしています

河内弁俺もお前も泳ぎ下手

堺市 板尾岳人

雨がよく降るので妻とよく喋る

初恋の人と暮して三十年

駅前に住んで六月傘がない

六月の雨よお前も淋しいか

六月のてるてる坊主お人好し

今治市 矢野佳雲

金持って死ぬねが無いと哀れなり

見ぬようで見番の役どころ

油さす場所が年毎ふえてくる

柔らかな目隠しをする好きな人

2DKながら息子も城を持ち

名古屋市 越村枯梢

長患い黄門髻が伸びました

自分史を書くとはんとの馬鹿と笑われる

実生五年はじめて咲いた桃の花

次の世に吉凶賭けて世紀末

どん底で見上げる空は碧くない

下関市 石川侃流洞

年金で蓄財私の葬儀代

気のせいとか老いの日脚が早すぎる

梅干が旨い汗した野良の昼

老眼鏡勿体ないものばかり見る

お隣と低い垣根の風通し

笠岡市 松本忠三

猫舌は猫だけでない人間も

近頃の犬のしつけも孫に似て

女房の二言目には知りません

風呂場から婆さんの声もう出ます

わたしから聞いたとだけは言わないで

京都市 都倉求芽

春の使者梯子かけたりはずしたり

地下道にくしやみ轟く花粉症

やわらかい月へふくらむ蕾たち

運不運 事件前後の週刊誌

全自動故障 半自動にもならぬ

奈良市 宮口笛生

禁酒禁煙何の楽しみあつて生き

歳聞いて見てもどうにもならぬ女

息子もう三十越して嫁がない

筍も露も木の芽も家で取れ

餅を搗く時だけ使うかまどある

高槻市 川島 諷云児

大阪市 津守 柳伸

辛いといふ一日だった煙草の輪
笑うこと少なくなつてきた余生

不合格神のミスだと諦める

ナツメロの記憶の底に岡晴夫

恋人が出来たか猫が戻らない

鳥取県 土橋 螢

友情は案外嫉妬させるもの

血統書づきの柴犬産むらしい

愛人に種まきをしたことがない

牛乳を飲んで乳房がふくらんだ

わがいのち供養たのしむ菊芽挿す

鳥取県 新家 完司

反撃の合図さくらはまだつぼみ

湯豆腐がうまい海鳴り聞きながら

遠くから見ても菜の花だとわかる

仕送り完了これから僕が遊ぶ番

酒かビールか風呂へ入って考える

八尾市 宮西 弥生

手も足も動くまでは手を抜かぬ

送られて送りがえする臘月

俄雨やむまで名もなき猫という

人間に疲れてペット家出する

すこしずつ白髪に馴れて女坂

細腕も拾う神あり捨てる神

すんなりと行く借金は恐ろしい

ポシエットに入り切れない改造費

それなりのリズムに明日の糧がある

裾分けをする宅配の初かつお

寝屋川市 稲葉 冬葉

花冷えの若初Vを貰い泣き

大卒に遠い春だよ仮通知

台本になかった若さ取り戻す

三年前の誤字を見つけた日記帳

究極の愛男女を産み分ける

西条市 片上 明水

般若経唱えながらも騙される

まだ辛いことがあるから死ぬまへん

さかすきを両手で受ける日は酔えず

脱いだ靴夫婦ではない並べかた

ライバルができほんとうに好きになり

奈良市 天正 千梢

蓄財の構図徹夜でねっている

ここ掘れワンワン債券わいて出る

閻魔さまの手みやげ債券持つて行き

錆びる事の美しさを感じかけ

自画像を描いて自分を確認し

高知県 赤川 菊野

満たされぬ心抱いて桜の下
病んでから急に再婚考える
人が好き人が嫌いで一人旅
歳月が飢えた昔を風化する
淋しくて亡夫に電話しています

富山市 舟渡 杏花

狂えたらもつときれいに咲けたろに
神のるす財布開いた振りを
愛日や朝からキリキリ舞うて暮れ
珍味で釣ったあなたへ苦勞しています
櫛箱の中で目覚めた相聞歌

尼崎市 春城 武庫坊

悟り浅くてほんとの馬鹿になりきれず
桜散る運動帽を買い替える
緞帳が下りて現世の風に遭う
合点はするが話がうますぎる
玄人好みの声が洩れてる京の路地

尼崎市 春城 年代

雪解けの水のはげしさ山笑う
寺町界限涅槃の風が光り合う
吹きまくる春の風の花狂い
眼を病んでなにも欲しいと思わない
足し算になりかけ算になり散る桜

堺市 楊井 二南

賽銭の割には多い願い事
先頭は選り取り見取りすれば良い
謙遜の裏に自信を潜ませる
謎めいた言葉が妻の武器らしい
年波が白内障を拒めない

島根県 堀江 正朗

盃に夢ふくらまず日の歓喜
文明の音に惚けては居られない
戦盲の僕が動くとき妻うごく
戦盲もしょせんメクラの涙のむ
記憶もう点滅五十余年の闇

島根県 堀江 芳子

盲人の妻にまだまだなりきれぬ
じいちゃんを自慢の日記ほろりさす
パントマイムに秘めた涙を自嘲する
上弦も下弦の月もあたたかい
妻だから虫のいどころぶつけられ

東大阪府 森下 愛論

空白の時間もあつて我を悟る
小金貯め少し気になる世間様
晴飲雨飲ますます我が強くなり
ホステスに逢う昼間の法善寺
カン高い声に送られ縄のれん

豊中市 田中正坊

日本の父さようなら 笠智衆
ゆたかさは朝から開く新刊書
男に夢 女に愛があるかぎり
春うらら女ざかりの美人アナ
しなつくる観音もあり春の寺

豊中市 安藤寿美子

やつと春 喪服の出番多かった
タイムスリップ出来る天王寺さん裏
飽食の野良猫ゆっくりふり返る
健康を回復 意地悪も回復
国会中継やつてるコーヒー屋のテレビ

堺市 高橋千万子

ほめられてバラは命を断つ鉢
偶然という切っ掛けを探す鬼
お互いのためとんだめる攻め言葉
ささやきに酔うて理性が崩れかけ
誰彼と噂 内心欲しい椅子

美禰市 安平次 弘道

ときめきが欲しいある日のスペアキー
悲劇から喜劇へ毬が弾みすぎ
敗者には敗者の美学泣くもよし
現実論 吟遊詩人にはなれぬ
消去法 消される痛み消す痛み

廿日市市 林野甦光

倒れかけていても一応自我通す
こだわりを捨てると眼鏡ずれてくる
エンジョイを薦めてくれたのはあなた
奇跡まつ女ひとりの窓あかり
眼鏡屋で掛けて外してまた来ます

寝屋川市 江口度

風見鶏も南向きたい花だより
動物園で花見もすます大家族
ビル街の地図に等高線がない
風船を飛ばし手応え待っている
我が家のリストラ妻が電気を消し回る

寝屋川市 柴田英壬子

ハンドルよご覧ことしの花が散る
エンジンの懸りが遅い独り言
老いらくのデートに似合う通り抜け
萼紫陽花の藍に心を射抜かれて
贅肉へヨガの心境真似てみる

羽曳野市 榎本吐来

よそ行きの顔で提げてる花見酒
夕桜 ちかん特別警戒中
馥郁の花に明日をたしかめる
お隣の旦那がもっている夕餉
またオレが出たなと思う夜のとき

島根県 小砂白汀

はつと醒めればさんばつ屋のイスの上

陽の恵み毒草までも花をつけ

北風に哭いた日もある花の芯

大輪を見事咲かせたこぼれ種

密談のメモをうっかりロシア語で

京都市 松川芳子

自分だけいい気になっている鏡

もつれ糸ようやく解けた終い風呂

スタンドの美人見付けたカメラアイ

この人も患者 マニキュア イヤリング

ラストダンス リードは妻と決めている

松江市 柳楽鶴丸

ハウスで咲く花の涙をご存知か

チューリップの首をチョン切るアルバイト

危ないわヨ文部大臣の始球式

こんなにもおいしい涙があったとは

生きている時は売れなかったゴッホの絵

松江市 舟木与根一

前評判良いと阪神危なそう

空地にもバブルはじけて露のとう

飲むだけの男と花見して帰り

お祓いが終ったらもう飲む話

戒名を褒め慰めているつもり

宇部市 平田実男

波風を立てに小姑帰って来

一円の尊さを知る手内職

スキップへ戸惑っている万歩計

ハネムーンと違ふときめきフルムーン

言うことは強気背中泣いている

柳井市 弘津柳慶

故郷へ帰って来たぞ灯台の灯

発展家だった極淋しく見送って

遺言へ安楽死をと書いて置く

五十回忌 五男の私と甥と姪

退職をしてから妻が強くなり

米子市 小西雄々

途中から蜜に群がり墜ちてゆく

雅子さんスタイル真似て娘が出掛け

冗談が今日は言えない靴を履く

惜しまれて勇退表面だけのこと

金惜しむ弱い人間同士住む

米子市 石垣花子

万札一枚隠しおおせる自信無し

新築の家に灰皿置いてない

雛祭り戦は知らぬ桃の花

やんわりと古い傷口たぐられる

修学旅行カメラで京の春拾う

米子市 田中 亜弥

とつときの笑顔を一つ持っている
絵解きしてスゴロク一つまた上がる
畳の下にいつも万札隠してる
ネクタイできりっとしまる男の面
寝たきりの父へやさしい風送る

米子市 菅井 とも子

病院の桜花も見ました車椅子
お見舞の孫の便りが効いてきた
出張のついでに病父に顔見せに
この先は神に考えゆだねよう
響き合いながら二人で生きて来た

米子市 野坂 なみ

この春の絵に花束を二つおく(孫就職・進学)
夕陽には今日の砂絵を見てもらう
揚羽蝶心の中を覗かせぬ
かけすぎた気合いどんでん返しくる(腰椎故障入院)
人間は考えごとが多すぎる

米子市 青戸 田鶴

桜満開しばらく何も考えぬ
月が出て山が笑顔になってきた
逢えばまた別れを惜しむ春の雪
毀れそうな壺をしっかりと抱いている
落椿踏むまいとして山のだ

米子市 寺沢 みどり

梅描いて紅葉におわる絵筆持つ
さよならへ無理な笑顔をおいてくる
舗装路とひびき合ってる朝の鼓動
日溜りへ移してからの花の数
瞳を入れて達磨のいのち蘇る

米子市 政岡 日枝子

ストレスはまだ溜まらない春の靴
薔薇は時々我を通すから嫌い
強運を持っててみなに疎まれる
戦いに行くかのような波頭
危ない話だ眠ったふりをしているよう

米子市 澤田 千春

船底の疵をつくらう月の浜
浄土まであかるい笑顔つれてゆく
ときめいた彩が炎えてる絵の具皿
どん底の色は決して忘れまい
杭を打つ音が響いて眠られぬ

米子市 新正子

おめでとうビールの泡が力コブ
いつのまに妻に染まっていた私
ふるさとの母に似ているお月さま
母病んで夜の電話が恐くなる
につこりと癌ではないと言っておく

米子市 光井玲子

保護色でしっかり包み船出する
ロシアとの風トルストイ読み直す
太陽に心ひらかぬかたつむり
下駄箱を開けると捨てるものばかり
バラ色を少うし足そう北の部屋

米子市 金山夕子

とりあえずラーメン食べて考える
薬草茶 人參茶 呑むまた遊ぶ
この笑顔 小野小町でいるつもり
居るだけで絵になる人のそばにいる
遠くに響く鐘にやさしくなっている

米子市 白根ふみ

漢方がじんわり効いて余命表
ミッキーと遊びあかりの輪の中に
たましいを操りながら明日よ来い
人許すことを覚えて風の旅
太陽のリズムにのって歯をみがく

和歌山市 堀端三男

やすらぎを亡妻の文机から貰う
塩送る余裕を持って二度の職
追い抜いた時から孤独深くなる
波被る覚悟がついて酒にする
花冷えを嗤う星座は春である

和歌山市 牛尾緑良

群青の中で痛みを消されてる
過労死よ虹をつかんでいたつもり
しりとりこのころあたりが別れどき
花咲いて散ってと過去を消したがる
花の下 別れ話は後まわし

和歌山市 福本英子

サイタサイタ昭和生れも遠くなる
内定取り消し呑気な甥が一人居る
生きすぎているのか亡夫の忌を重ね
絵の具箱行きつ戻りつ花の冷え
花冷えもどこ吹く風のランドセル

和歌山市 西山幸

とりあえず満願日まで待つことに
従いてくる影も自省は知っている
いつ見ても鏡の中は喜劇だな
自己暗示かからぬ朝の靴を履く
人形の涙もあたたまって春

和歌山市 垂井千寿子

見え過ぎる眼鏡で孤独な椅子に座す
でのひらに一杯温い陽を受ける
お米通帳の頃は銘柄など言わず
一生を運命線にあずけてる
花冷えのその真ん中に居て孤独

和歌山市 福井桂香

牡丹のふくらみ具合と春の雲
ジェラシーの訳をあなたは御存知か
影ぼうしついてこなくていいんだよ
ふらんすパンなんてお固い方でしょう
素うどんと読めぬ若者ふえてくる

和歌山市 木本朱夏

こだわってしまふ冬苺の赤さ
新しいわたしのためにくるみ割る
どくだみの白に裁かれてはならぬ
吊り橋の真ん中で待つおとこの手
この坂を上ると過去の絵に出会う

和歌山市 桜井千秀

指の隙間をこぼれて落ちてゆくチャンス
一瞬の差で攫われた油揚げ
二足の草鞋履けぬ裸足が丁度よい
短距離のタクシーゴマをすりながら
返り血が怖く鯉口封をする

和歌山市 内田結実

さくら満開 仏像の目は無情
花冷えはさくら桜の命乞い
ボケベルを捨てる わたしでいたいから
遮断機が降りる かなぐり捨てた恋
句作りが生き甲斐の日と重荷の日

和歌山市 宮口克子

気の狂いそうな線路だ真直ぐだ
魚心みえてこちらも水心
シヨッキンク ピンクも大屋政子なら
趣味の輪にもあった人脈いう垣根
人は皆ないものねだりばかりして

和歌山市 細川稚代

春の宵多彩な噂風に乗る
乳色にけむる岬へ立つ二人
さりげない言葉につつま下心
ジーパンで軽い話がよく似合う
あんパンが好きで私も戦中派

海南市 三宅保州

踊るときだけは背筋が伸びる老母
密室のおんなが魅力的すぎる
核心に触れて火傷を負いました
忙しいことが男の免罪符
酒を飲む父とは男同士なり

和歌山市 内芝登志代

雅子さん立ち居振る舞いままならず
花見する好きな服着て腕組んで
クラス会長い月日の浮き沈み
座りだこ私自慢の勲章だ
手さぐりで摺んだ縁に満ちる日々

和歌山市 山田 高夫

葉隠の美学でさくら散りました

肯定も否定もしない保身術

姿見の虚像に女自惚れる

一生を通行人として無冠

母と娘の女大学ずれたまま

有田市 松井 かなめ

内科 外科 眼科に行つて午後三時

人知れず悩みがあつて桜散る

妥協せず燃えた若さが今はない

家と長男括りつけてるこの絆

年間かれ三十八と去年今年

和歌山県 小倉 アサ

楽しんでみよう姑と寝る夜は

その彩を出さぬ自分をほめてやる

雑草を時には踏んで越える節

またしても憎まれ役になる出番

つまらない話おんなを太らせる

弘前市 村田 善保

渦潮は修羅と問答繰り返す

一期一会 人の流れを温める

一握の砂に自問を繰り返す

指切りの指が次第に重くなる

自然淘汰やはり悲しい掟です

弘前市 真喜内 實

綿入れを脱いで万歳りんごの芽

風そよぎ樹の親心芽に語る

風上で暖かい風無理に切る

北というだけで詩になる北の人

遊んでも頑張つても日は暮れる

弘前市 小寺 花峯

しがらみを断ち切り愛を切り離す

妻の声に合わせて響く鳩時計

繰り返す涙が若さもて余す

粗大ゴミ置一枚の日曜日

コンバクト閉じてためらいまだ続く

青森県 田中 叶

人事異動 紙幣で指が切れていた

中年にトイレの水の快感よ

なにごともしなかつたようにアスファルト

二階から父を見ていることがある

階段で娘を呼ぶ父は虫に似る

弘前市 肥後 和香子

読み終えぬ本も男も手放せぬ

危険度はペンキ塗りたてそんなヤツ

ししゃもです丸ごとご賞味と書く二行

息子と離れ四月の母は只の母

津軽にもかの子と太郎おる平成

弘前市 佐治 千加子

半跏思惟 万人の眼がすがりつく

藥壺の中味を少し賜ひ給え

塔高く銅鐸が鳴る花吹雪

星もあなたもまばたきぐせが治らない

定休日貧乏ゆすりをさあどうぞ

黒石市 相馬 一花

呼鈴が鳴る度起こる不整脈

夫には大きい面で素顔見せ

酒止めて蔵が建つなら止めましょう

『ごゆっくり』肚とは違う言葉かけ

ときめきを求めて通う舞踏会

黒石市 千葉 風樹

子を想うギターは五指を焚火する

三百六十五弦のギターへ挑戦状

故郷恋うこけしが弾いたギターの音

どう弾いてもコロツケの唄になるピアノ

北緯四十五度から痩せてくピアノ線

十和田市 斉藤 効

流水も互いに磨き磨かれて

けの汁を吸り産声聞いている

また一人出稼ぎ霊柩車で帰り

どの目にも春光のあり寒立馬

誕生は死の始まりか雄の雛

十和田市 阿部 進

豊かさにどっぷり浸る三代目

負け込んでやることなすことみな裏目

昇進の部長が孤独噛みしめる

商売の下手な主人の頭が高い

果作りの下手な女が翔んでいる

八尾市 鶴声庵 覚然坊

お守りの中身を傷の手で開き

たまに来る孫娘は掃除をして帰り

社を築く汗と油の作業服

縁結び出来て王子は落ち着けず

やるせない思い机の向きを変え

八尾市 宮崎 シマ子

満開の桜に行く手ふさがれる

隣の子の恋の行方はどのような

仲違いの隣の猫が愛想する

藤の花匂うベンチで何もせず

花の下 主義主張など二の次に

八尾市 鷺見 章

桜散る男独りの缶ビール

リハビリへ市場帰りの雛あられ

麻痺の足包んで妻の手の温し

絵雪洞灯ともし頃の間のありて

車椅子 花の堤でハイチーズ

八尾市 山下 美津留

五郎舟舁筋から招かれる
第一線引いて爪切るゆとり出来
腎臓に居ついた石が出て行かぬ
摩訶般若苦惱をいやす糧にする
色褪せた服で味方に馳せ参じ

八尾市 高杉 千歩

野に降りる作務衣に馴染み青嵐
禅問答終りを知らず若葉雨
仲のよい二人へラッシュ眼の遣り場
手の届くところへ置いて知らん顔
冬彦さん真似て連休 狐雨

八尾市 吉村 一風

ほめられて夫は今日もフル回転
感じいい会釈もらうと気が火照る
もう咲くか咲くかへなんと戻り寒
不器用な夫のねじはこつで捲く
ゆで卵妻の教えの砂時計

大阪府 榎山 隆

共白髪愛の律動狂わない
やさしさを煮詰め合う日のおとし蓋
奈落まで舞いおちる花びらも花
灯台の下に似ている母の膝
天に向け十指の軍手干しておく

八尾市 片上 英一

テニヲハを抜くと字足らず舌たらず
姥桜つどう花蓼蘆花の下
宗教と鳩がベンチへ寄ってくる
黄昏になるとピカピカきたみなみ
叱られて夕焼け小焼け亡母の声

大和高田市 岸本 豊平次

通勤の窓が日の出に明けてくる
ランドセル札儀作法から教えられ
家並が同じで付合やすい路地
量よりも質でグルメの老いの旅
旧姓で話す電話に弾む妻

西宮市 門谷 たず子

古希すぎて出直す赤い靴を履く
懸命に生きて余生と言わぬ父
いつかは切れる糸に祈りの灯をともし
美辞麗句の中でわたしを見失う
ぬくいぬくい輪にいてたまに偏頭痛

姫路市 人見 翠記

クラス会体不調ばかりでおじやんになり
逢えばまた愚痴の聞き役遠い足
乱気流永田町界隈吹き荒れる
名人芸方向音痴で通ります
師の形見じつと私を見守って

箕面市 坪田紅葉

箸紙に老舗の誇り息づいて

まじないのお箸にすぐくよるこばれ(手術前)

迷っても行く道ひとつ老いの坂

頂点を信じて生きて来た命

予定した事次々片づくよき日かな

高石市 浅野房子

当てにせぬつもりが当てにした不覚

計算に弱い弱いと金を貯め

引力の法則通り恋に落ち

刃こばれは人には見せぬ意地がある

いつまでも変らぬつもり影法師

寝屋川市 岸野あやめ

一年生ようこそ桜満開に

入院の留守へ時計が止まってる

思ってる事が言えない医師の前

ドクターの指の温い日 冷たい日

退院へ親孝行の甲斐があり(同室者退院)

宝塚市 丸山よし津

自分史の恩人の数十指越す

駅開発ビルの隙間の地蔵尊

新緑に土曜休日慣れてくる

三叉路に立って答を迫られる

シグナルの赤の間に思案する

岸和田市 福浦勝晴

竹やりとバケツ漫画にもならず(第二次大戦回顧)

長廊下めおと慕情の車イス

清張のポケット版と旅を行く

ビスケットと言えば女の歳が知れ

タコ焼きを焼く間待つ間の動く指

岸和田市 芳地狸村

初鷺の出迎えうける峠道(倉敷ツデーマチ)

隊列を乱して困る車事故

葛切りが滅法うまい粹な店(阿知の街)

女房の自信なにかがあるらしい

人生の節目で男ジャンプする

岸和田市 高須賀金太

追い風に乗り損ねてるへそ曲り

浴槽で歌うわたしは美声だぞ

タニマチも不況懸賞金が減り

納豆の粘り見習いたく思う

アメリカの花とは知らなんだ花水木

岸和田市 島崎富志子

孫と摘むツクシン坊の暖かさ

ひなたぼこ泣いて笑って又あした

簡単に答出すのは他人様

わびしきは最後の一本抜歯する

自己主張せず雑音に身をまかせ

岸和田市 古野 ひで

三寒四温 何時まで続く花便り

こだわりがあるのでいけずしたくなり

内科から眼科歯科へと老いの闇

いさかいの果て折れて出るのは夫

言わでものひと言があう向い風

岸和田市 原 さよ子

勉強が苦手私の血筋かも

娘らと来て月冴え返る露天風呂

タレントのサインの色紙飾る宿

それだけの人と思うておく受話器

デザインのここが気に入る春を着る

呉市 横田 英詩

嗚呼この世欲と懺悔を繰り返し

草むしり老後のことに触れながら

昼の月ムードがないと言われても

息吸うて止めて下さいレントゲン

愛せない人が小股でついてくる

竹原市 時 広 一 路

細やかな心も生きて京料理

生命知る花のお喋り楽しもう

このままで眠ってみたい風呂加減

可能性信じて靴を履いている

ノー以外言わぬぞ口は負けそうだ

竹原市 森井 菁居

平静を装う父のモーニング

白無垢に妻との記憶しかとある

息抜きは出来ない二女もお年頃

とんと無沙汰俸せでいる証かも

縁結びの神を信じていない恋

竹原市 岡本 清水

法事法賛集まる人の老年化

水ぬるむ小川に鮒は夢となり

締切りがあるからファイト湧く暮し

怒つても泣くも笑うも寿命ぎり

ご近所があるから正しく生きている

竹原市 岩本 笑子

少しずつ嘘を重ねて子を育て

言葉尻本音の言えぬもどかしさ

税務署の桜も春も通りすぎ

おもい切り子を抱く手だな温い手だ

歩いても歩いても枷はずれない

鳥取市 両川 洋々

ロボットに白旗上げてなるものか

人生の冬をつかんだ手が疼く

酒タバコやめても君よ生きたいか

政界の小骨はきつと俺が抜く

この胸にウロチヨロ憎い人が棲む

鳥取県 松下 たつみ

鳥取県 江原 とみお

すばらしき出会い女系の鯉のぼり
改めて言えば納得してくれず
怒鳴るときどなる男が頼られる
カングりはやめて下さい色眼鏡
花を買う女の肩がみな丸い

鳥取県 林 露 杖

天に薦 裏に驚聞く目覚め
花菜漬春を惜しみてひとり酌む
人生とはふと考える夜半の床
消費税慣れを一円貨が嗤う
PKO初の犠牲にポランティア

鳥取県 土 橋 はるお

朝市に女の響く声を買う
嬉しめでたの色に赤飯炊きあがる
からっぽになった頭で考える
太陽に笑顔の種を授かった
回覧板もって来たのに犬吠える

鳥取県 森 山 盛 桜

月冴えて自伝が少しずつ曲がる
艀が軋むかぎり彼岸を目指すのみ
花の散る下で口述なども良し
起きて恩寝で思みんな有難い
大都会不協和音と言いい切れぬ

元氣のでる薬の酌をしてもらう
その城の搦手門が開いている
怖けづくとも火の見櫓が高くなる
彩れば本音醜くなるばかり
マスコミ除けのスプレーを売っていた

鳥取県 羽津川 公 乃

少年の夢に赤信号は無い
六十五歳覚悟のようなもの湧く
響き合う出会い求めてまだ独り
開眼のダルマ居眠りばかりする
ブロッコリーの緑に期待かけ過ぎる

鳥取市 西 原 艶 子

愛は丸くて転んだり弾んだり
引力が生まれる策を考える
遠花火響く逢いたくなってくる
子の声は底まで響く母の皿
軽い男だ赤いネクタイ締めている

鳥取県 さえき や え

笑う日がやっと来ました花の下
ストレス解放 わらびぜんまいタラにうど
見ざる言わざる聞くとろだけあけておく
貧乏のおかげ明るい子らである
三途の川わたりそこねて花を見る

箕面市 中 嶋 田実子

子を生ますモデルルームのような部屋
早まって言わずに済んだ話中

ポチ袋妻の演じる影芝居

招待状わたしの位置がよく分かり

残り布亡母も私も地味好み

鳥取市 岩 原 喬 水

病棟に連休は無いうめき声

医者が首ひねれば不安増すばかり

初心者の無欲ベテラン負かされる

食べぬのにコロコロ転ぶほど太り

自信喪失ブレーキ効かず老化する

鳥取県 乾 隆 風

棺桶と一番風呂は急がれぬ

初恋の鼓動をたどるクラス会

捨て石になる男の骨は美しい

美しい仮面をかぶり話さく

火の鳥は雑木林の中に住む

鳥取県 幸 家 單 車

過去を知る鏡こわくて見られない

行動は隠しカメラが知っていた

他人から見ればみにくい血の絆

手鏡で私の恥部を覗いてる

青年の主張に老いの血も炎える

鳥取市 春 木 圭一郎
さわやかな笑顔が俺の履歴書だ

君と会い人生急に弾み出す

不器用な人生だから味がある

池に蛇それでも蛙とび込んだ

今日の罪日記だけには教えとく

鳥根県 西 村 早 苗

あどけない顔だがぞっとする睨み

それなりの顔だがうまく撮ってくれ

そうしよう天ぶらうどん食べにゆく

夜が明けて森のフクロウの眼が閉じる

逢いにゆく駅はやさしい昼の雨

鳥根県 榊 原 秀 子

傷口がまたいたみ出す春の雪

健康法いくつも聞いてやってない

嫌われる仕事こそそそやっておく

日蔭には日陰が好きな花が咲き

草取りをしただけ伸びてゆく野菜

鳥根県 松 本 文 子

再会も出来ずに今日が来てしまう

桜が咲いて二番煎じをやっている

何ほどの事ぞ咲くとて散ったとて

穴掘って犬にも秘密ありそうな

春眠す光陰の矢を折りながら

島根県 高野 律子

演技など要らぬ親子の日曜日

新しい命宿した春の水

宝石はないが情けは持つてゐる

花道を飾る日毎の汗を積む

良い天気明るい声が隣から

島根県 加本 義良

そんなこと放っておけよと桜咲く

父と子の晩酌男対男

軽い嘘ついて本音へ迫る罫

愚かにも乗って仕舞った泥の舟

投句終え解放感に満たされる

島根県 槻谷 一葉

花咲けば前頭葉も目をさます

健康な日日キッチンが光り出す

五目飯煮える香りが二階まで

仲良しの集い主婦の座を忘れ

貰い物多く仏も手がだるい

出雲市 金村 青湖

花の宴少し離れて老夫婦箸

まだ君をよくは知らない花が散る

メモほどの日記五月もまだ続き

葉桜へ日記はいいことばかり書く

葉桜へ吾が子育ての詩がある

出雲市 尼 れいじ

大根の花が似合いの村に住む

何んに疲れたのか妻の大騒

それぞれの暮らし知ってる猫が居る

偲ぶ人ビデオの中で生かされる

広がって行く夢がある今日生きる

出雲市 吉岡 きみえ

五月の暦も私太多忙

春日和多くのぞまぬ果報者

花も賞でダンゴも食うて平和なり

遠いとおいいあの日も同じ花の下

唐辛子負けない気性赤くなる

出雲市 園山 多賀子

無防備に翔んで叱咤の風に逢う

輾転反側 壁越えられぬ春の鬱

黄水仙自己陶醉もほどほどに

聞く耳を大事に綿棒買ってくる

愛と憎積木崩れる音がする

出雲市 坂垣 草丘

日御碕 船で参った日の鳥居

土産屋が帰り待ってる貸し草履

モンシロとツバメを初見した日記

花が散りワケギの腰が弱る頃

先人の苦汁を偲ぶ古代食

出雲市 伊藤 寿美

肩の力抜けばと壁に教えられ
お前には過ぎた婿だと老父が言う
一周忌 亡姑のいいとこだけが見え
清貧を守り続けた老父の歟
先祖の名を刻む地蔵と春の坂

出雲市 石倉 芙佐子

泣き虫のくせにカラカラ風車
笛の音も舞も泡沫夏の夜
神様も時には味なことなざる
太陽を月もわたしも追うている
今はもう言うこともなし別れ霜

出雲市 久谷 まこと

発車ベル未練の言葉くり返す
親と子で金の単位がくい違う
慈悲の手をじゃけんに払うやせ我慢
本当の味方は一人五十年
助走路が長すぎるからのびやむ

出雲市 島 祥庵

強い声ばかり聞こえる穴がある
きれいごとだけで渡れぬ丸木橋
常連の計報が届く赤提灯
初デート少し構えている鏡
関東の一本締め好きな妻

出雲市 小玉 満江

子や孫と靖国神社の大鳥居
出雲発東京行に知った顔
さくら咲く向いの席の手話はすむ
機嫌良く洗濯物が踊ってる
老春と言うしあわせも有るんだね

出雲市 岸 桂子

ストレスがかすかに溶けてゆく手紙
旅に出て私の台本書きかえる
雀二羽大事な話があるらしい
川柳の話ばかりをして見舞う
母と二人で約束の海に来る

香川県 松村 迷観子

木彫大師飾るものにて尊ばず
壇上は浅学非才の顔並ぶ
安心と不安が同居する一家
良心にそむく言葉が出てしまい
学舎を母校と書く字が美しい

香川県 木村 明人

トキメキはないがやっぱ髭は剃る
一息を入れよと遮断機下りてくる
狂人はヒョツと自分かも知れぬ
応待に笑顔三割得をする
賞味期限切れても女誘われる

香川県 成重放任

転んでもただで起きない奴もいる
一杯の水が心を落ち着かせ
花便りそろそろ春も動き出し
自慢顔 孫に学んだ横文字
太陽に顔を揃える水仙花

香川県 川崎 ひかり

ライバルも今頃多い物忘れ
仏様も私も好きな桜餅
今日もまた婦唱夫随の独楽が舞う
熱燗で飲みたい愛が見えない日
自問する甘い自答に流される

香川県 池内 かおり

母の顔 女にかわる時間帯
亭主にはバーゲン漁り見せられぬ
二三年前の写真もある釣書
雨戸躁る隣の音に起こされる
スリ減った男の靴が捨てられぬ

香川県 永峰 伽名子

ふる里に佇てば水得た魚になる
あんたもつとお洒落おしなと八十童女
ひたひたと女を歌う艶やかに（石川さゆりさん）
肩落し思い切りお哭きなさいませ
道づれは子のこと孫のことはや着いた

香川県 新川 マサエ

味付けに笑い袋がきいてくる
結論は貴方まかせの舟に乗る
洋裁を習うアヒルの赤い服
卒業の挨拶に来る標準語
朝露に結球キャベツの私語を聞く

唐津市 田口 虹汀

寄せ書きでいっぱいになる僕の部屋
のんびりと今友情に濡れている
川柳の大部屋にいて部屋頭
花祭り象の背中を打つ霞
釈尊の裸へ霞心せよ

唐津市 仁部 四郎

生意気な台詞で生徒助走する
結婚の祝辞恩師の甘い点
私が恩師ですとはキナ臭い
出世した生徒にあった幼な顔
出世した生徒に嫉妬の酒を酌ぎ

唐津市 筒井 朴竜

不退転決意で出馬町議選
無念にぞ憶う鬼子嶽怨霊達
七山の観音滝で開眼す
古戦場 千人塚の迷い仏
陶工の秘窯赤松薪燃す

唐津市 浜本義美

背振山しとしと烟る菜種梅雨

酸性雨 虹の松原蝕い始め

一揆の碑 虹の松原地の叫び

子へ残す年金ぐらし粗衣粗食

哀しみの彩がとれない咳と痰

唐津市 浜本ちよ

コマーシャル目に休憩をやる時間

来年も着物着れるやらと毎年思い

板ばさみに幾度浮世なるこの世

雑草のしたたか腰が痛み出し

鈍行は弁当の楽しみ身も弾む

岡山市 川端柳子

花の春 慕情豊かな人になる

よろこびの声オクターブ上げてくる

涙袋そうそう見せてなるものか

人情を紙にたとえるうつの日よ

気楽さをたたえこたつの子守唄

岡山市 嘉数兆代賀

的すこし外すおとこの友情よ

あやとりの糸がもつれたままに雨季

ヒント得て貨車を一面ずつ放す

逆転の風とは知らず帆をあげる

過去語る人皆逝きて雲流る

岡山市 二宗吟平

高瀬舟空缶で組み偲はせる

病院で逢えば腰痛かいな痛

自転車倒して逃げた春嵐

十字架の便りを聞けばユダばかり

隣組の美徳いつしか罪作る

岡山市 小林妻子

身辺に薬袋が目立ち出し

取り換えも利かない脛の蝶番

ご先祖に勿体ないが田が荒れる

迷うては居らぬが夢は安楽死

金婚よ長い旅路の果てならん

岡山市 矢内寿恵子

花冷えに感情線が纏れだす

昭和史に二転三転我がドラマ

迎春花一氣に萌えてきた陽気

ライバルと一緒に年を取っている

賽の目の六つそれぞれ自己主張

岡山市 井上柳五郎

粉飾も叩けばほこり身の錆も

禁酒の身悪酔いさせた花の下

咲きはこる桜花怯えも抱いており

細くても頼みの綱に妻の腕

人が人裁き死刑へ是非の論

岡山県 萩野 鮫虎狼

冠婚葬祭興味示して他人様
年金の後押しをする春の風
酒の味こんなに美味い落ちこぼれ
姑が夫婦喧嘩の火を点ける
極楽へ行く空席が見当らず

岡山県 池田 半仙

春の陽は一枚脱がす暖かさ
借り知恵は急所のところが締らない
音痴でも手拍子だけは合って居り
鯉幟の未来は二十一世紀
ゲートボール ダブルタツチで来るチャンス

岡山県 岩道 博友

耳鳴りが今日敗北の夜になる
寄付の要る催しテントを張って待つ
失念を揺さ振りに来て決意さす
欲のない平行線で人を見る
墓洗う世は平和です続けたい

岡山県 花田 たけ志

手作りの旬によろこぶ共白髪
ふれあいで生きる弾みがつく余生
追われない方が淋しい芸の道
つつましく言う身勝手に逆らえず
夫婦別姓あなたは誰の妻かしら

岡山県 山本 玉恵

かなしみを捨てよ捨てよと髪を梳く
魂の沸点を吞むのはポスト
他人には知られたくない地図を持つ
肩書きに呆けはじまりと書きましょか
出来もせぬ逆立ち女ほのめかせ

大阪市 河井 庸佑

運命の出会いとなった縄のれん
現状に満足進歩の足止まる
横着の報い思わぬ所から
約款のこんな所に落とし穴
子離れの出来ない親を不安がる

大阪市 藤田 頂留子

甘いなと疑心暗鬼がそそのかせ
人生は各駅停車に決めました
通り抜けを寝坊にさせた寒気団
信じたいけれど広がる黒い雲
御婚儀のあれこれ見せているテレビ

大阪市 北 勝美

逆上がり泳ぎも出来ず来た八十路
聞き直しまだ叱られる遠い耳
花冷えに花の長もち花の慈悲
もん白蝶付和雷同のねぎ坊主
八十路生き只ひたすらに起請文

大阪市 上田 柳 影

思い出の亡父は真直ぐしか知らぬ

好きらしいなと母親の勤が読む

自民党は嫌いと言見一致する

比翼塚影を一つにして夕陽

結局は損でも賭が止められず

大阪市 本間 満津子

お風呂やは昔の友に会えそうな

切った爪へお役目どうもご苦労さん

ドキドキやハラハラくらしのスパイスで

延命措置と聞いて見舞いによう行かず

挿木にも若葉五月の風さやか

大阪市 神夏磯 典子

春の雪 神の狡さは許される

いいことがあれば痛みはもう忘れ

心配事なくて夫婦で太鼓焼

犬の方が愛されている余生です

日々の祈り自分を確かめる

大阪市 井上 白 峰

着飾っているのに誰も振り向かぬ

輪の中で自分の影が見え隠れ

虚と実のはざままで決心揺れている

何時までも時効にならぬ脛の疵

招かざる客が血圧あげに来る

大阪市 板東 倫子

出番もう来ぬかも知れぬ裾模様

性悪でロマンチストになり切れぬ

領空を侵し黄砂がやって来る

識見は無いが是々非々わきまえる

嫌煙権の尻に敷かれる喫煙権

大阪市 梶本 路 児

千手仏 数珠持つお手と武器持つ手

職安を出て図書館で時すごす

雪の日を妻は湿布の匂させ

銀行へアサヒグラフを読みに行く

農村歌舞伎白粉のらぬ顔もある

大阪市 中西 兼治郎

困いしてあると覗いてみたくなり

サングラス取って青い空をみよ

猫だけが今姑の味方なり

換気扇嫌な匂と良い匂

門限を切ったデートを母案じ

姫路市 大原 葉 香

今日の一步百歳までの第一歩

修羅いくつ越え勲章にある重み

一本の吊橋にあるいい出会い

紙コップほどの男で肩こらぬ

百万弗の夜景の底に喘ぐ街

姫路市 丁坪 サワ子

僧の頭上桜花の吹雪花まつり
菜の花のおひたし膳に春を食べ
PKO実が成りました現地の恋
正直の頭上居心地悪い神
余る生と寂しいことは言うまいぞ

姫路市 中塚遊峰

荒波を独りで越えて来た余生
息子と二人併せ煮える片手鍋
戦いの爪跡抱いて五十年
茶柱を信じて磨く今朝の靴
亡父の年齢迎えししみ知る情け

今治市 越智一水

みかんむきながらロマンを考える
初雛へもう嫁入りのことを言う
一生懸命老いまいとする汗をかき
四角四面なあいさつを抜き世を忘れ
金を追う女は過去を語らない

広島県 田村新造

柵切って出れば待つてた修羅の道(興安嶺逃亡記)
脱走へ癒えぬ体が気にかかる
月欠ける夜を決行のときと決め
十二時を息をひそめて待つ長さ
手榴弾合図に柵を切って出る

神戸市 山口美穂

性善説信じています野のすみれ
主亡き家の桜が咲き誇る
静止画像知らぬ存ぜぬで時がすぎ
趣味楽し肩書きもライバルもない余生
ちよっとだけ無駄遣いしてうれしがり

京都市 山海友熙

雛の侍女みなうるわしくつつましき
情もろく生きて六十路の初鏡
酔うようにつれ添う二人糸ざくら
牡丹の芽はぐれはぐれる昨日今日
春泥にわざと踏み込む孫の靴

阪南市 坂口公子

陶酔は両手で受ける花吹雪
見る限りみな善人の花の下
大原女の包んだ中のきれいな目
打ち直し効かぬ太鼓は高らかに
砂山のたかがひと足されどひと足

大田市 藤田軒太楼

資金繰り世間話に実が入らず
あの時の仕草気になる惚れたかな
内幕を知られ弁解やめにする
頑老もふとした情に脆いもの
見え透いた嘘と知って騙される

高知市 北川 竹 萌
何方にも言うなと妻は目の手術
枢打つ音の身にしむ戻り寒

エプロンが似合い料理がうまくなる
下げ振りを吊し中心確かめる
流行風邪気になる父の咳払い

町田市 竹 内 紫 鏑

グラビアに片目をつぶる技師の番
老学者チタンフレームいまだ掛け
積もる話に代えて句集を受け取らせ
定年でカップ麺とは縁が切れ
出せぬ人を理想の老後とか

吹田市 山 本 希 久 子

春の土から雨の匂と陽の匂
入れ歯からはじまる老後設計図
叱られているのにポチが嬉しそう
人物はぼかしてあるが実話です
逢うて別れて五月の風に樹は揺れる

和泉市 岡 井 や す お

政治屋の終着駅に金の山
ご自分に行かぬが行けとカンボジア
マージャンとゴルフで営業課へ採られ
目を皿に足棒にして美術館
肖ってジューンブライドが花盛り

羽曳野市 田 中 透 太
俺よりも妻が強いと言いにくい
桜満開笑ってばかりいられない
結び目が少しゆるんできた絆
持ち点を残し終着駅につく
火がつくと思いつつも出す手紙

尼崎市 田 中 薫

石は寡黙で風は春になつて
バリウムにきのこのうの嘘が映される
海の広さが笑うばかりのかなしみ
判官鼻肩貧しきものの血が流れ
いざ吞まん暫しさくらになりきつて

今治市 野 村 京 子

ハイヒールも春の仏もよく弾む
大人にも童話がほしい花まつり
花の午後女時間を止めている
歳時記に母のくり言溜めてある
花遍路札所は温い絵を残し

富士宮市 渥 美 弧 秀

霧雨が沁みてゆたかな詩心
争いを囁く富士視る老い二人
楽音に祈り求めてアベ・マリア
鍵盤に移ると十指聖なり
黙想に夜明けの軒安堵感

静岡県 蘭田 獭 杵

蜜よりもお酒が好きな夜の蝶

稜線は真つ白里は花盛り

風邪で寝たその間に解決した事件

寝静まり雛のお喋り聞えそう

七十億国税局が掘り出した

東大阪市 崎山 美子

上品な客へあわてる大阪弁

二代目になって客筋若返る

たずね犬のピラ破れてる春の雨

高飛車な客に損など言うといれず

バーゲンの時しか来ない客も客

川西市 松本 ただし

満足の目盛りを変えてゆく自戒

あと戻り出来ない地図が溜りすぎ

指切りの小指に残る血の温み

札束が方向音痴の指示を出す

幻想の森で地軸の声を聞く

西宮市 秋元 てる

平成に昭和の疲れどつと出る

喜びの針小棒大許されよ

再会は此処と決めてた橋が消え

この女 自家薬籠中の読み

じいちゃんの真似お魚の目がうまい

西宮市 西口 いわゑ

ミモザ咲くあの再会の日のように
ぽっかりと浮かんだ雲よ春ですな

むずかしい計算はせぬ母の味

新緑へいやな記憶を脱いで来る

テレビから皇室絵巻見えています

和泉市 西岡 洛 酔

老骨を少し伸ばした初夏の風

職安へネクタイの赤似合い兼ね

花生けて老妻律気に日を生きる

母と娘の揉め事女偏の意地

年金族昔話の時進む

豊中市 吉田 あずき

後悔の数限りなき手を洗う

一本の斜線で人を消せたなら

短くていいの一言欲しかった

勘忍袋内緒で穴をあけている

宮詣り氏神様へインブツト

奈良県 長谷川 春 蘭

残寒に耐える八十路の膝がしら

掃除機を停めよう驚らしければ

さりげなく過ぎる晩年日脚伸ぶ

余生とは四方のつながり芽ぶく春

雪解水太り太りて海に入る

静岡市 安本晃授

大正の仮面鎧つく自己嫌悪
塞がれた出口で拾う慕情の灯
饒舌の父を出し抜く早とちり
乾杯のグラスが笑う受賞式
平成の蚊も若い血潮に飢えている

倉吉市 淡路ゆり子

古里にわたしに馴染む水がある
一病を大事に暮らしさくら待つ
風呂敷に包んであった亡母の考え
白い足袋汚れ覚悟の向い風
念仏のさ中も天気氣にかかる

茨木市 井上森生

さくらさくら円高不況パツと散る
バブル崩壊ころのふるさとよみがえる
ハイテクに狂ったニセの札が出る
いたわりが過ぎてそここ肩たたき
平成の維新と蛙の声くらべ

富田林市 片岡智恵子

お天道様が見ている欲を控え目に
貧しさの中で人間味の重さ
人真似をするから知恵の輪がずれる
借金の話はよそう虹が出る
ひと息をついて鳴り出す鳩時計

倉吉市 野中御前

元氣のよい嫁でお茶碗また割った
おふとんを干して百叩きの刑に
意地という元氣グスリをはってます
八起き目の首は念入りに洗う
マスコミは噂の磁石もっている

堺市 黒田真砂

おだやかな人でいつも話の外に居る
真情にふれて友情の深さ知る
冗談で軽くぼかしたプロポーズ
風吹けば回る矢車孫達者
維持って二十歳の春を嫁ぎゆく

吹田市 栗谷春子

窓越しは春とうたがいなき色に
道ばたの伊勢たくあんに人だかり
親らしく節介すれば子は背く
いきまひよか春のお誘い待ったなし
足踏みはいいから前へ進め春

箕面市 岩津ようじ

だまし討ち寒の戻りが引かす風邪
返事の返事に返事くる返事
不況不況不況とタクシー代上がり
掃除機も扱い慣れた粗大ゴミ
金丸め秘書め小沢め竹下め

鳥取県 黒田くに子

高知県 小澤幸泉

夫と酌むお酒今宵は魔女になる
陽炎の視野にじやがいも花ざかり
ころころと太っているのが娘です
落しふた亡母の生活の味になる

寝屋川市 平松かすみ

河内長野市 井上喜醉

キャラブキが好きを知ってるブレゼント
衣食住足りてポックリだけ願ひ
腹巻へ潜ったままの不況風
一行の余白の謎にある笑い

寝屋川市 堀江光子

奈良県 中原比呂志

これという用事はないが逢う日取り
チューリップ次の約束聞いている
その昔白馬の騎士を夢見たが
その昔夕餉の顔は揃うたに

松山市 谷真風

岸和田市 岩佐ダン吉

誕生日せめて病衣の衣替え
手を合わせたらありがたくなってくる
炒り豆が噛める入れ歯よありがとう
くだらない事はおぼえている頭

仙台市 川村映輝

貝塚市 行天千代

万歩計初うぐいすにしばし立つ
万歩計朝の挨拶爽やかに
クリスチャンという男に騙される
老人対策青信号を長くする

二十五回忌その分私が生きている(夫の忌 三句)
只一度二人で行った善光寺
喧嘩する相手ないから花造る
早よ帰りよ外へ出るたび言った亡母

倉敷市 田 辺 灸 六

花見酒飲める生きてる生きてる

花いっぱい咲かせ極楽だと決める

商売の踊りが舞えぬ資金難

金儲けかわりにいのち磨り減らし

堺市 柿 花 紀美女

春風は娘に寿を持って来た

ナツメロを合唱してる凡夫婦

空も街も合格の子に皆光り

一つ一つ迷いふっ切れ喜寿の春

唐津市 山 口 高 明

王様が裸で家中這い回る

地球儀の何処かで匂う血の儀式

話題にもならず百歳ひそと逝き

UFOを見たと息子が譲らない

岸和田市 清 野 こ う

春宵一刻そぞろ歩きの花の下

日本はいいな桜の花の中

優勝の監督滂沱の男泣き(上宮高優勝)

御神水背負い学文路の坂をおり(武助さんを偲ぶ)

河内長野市 植 村 喜 代

鶯が今日も来て鳴く花曇り

お水取りいつでも寒い誕生日

自分の気づかぬことも自分なの

無言電話夫は車庫に帰り着く

米子市 中 井 ゆ き

雪柳だれかかくしていませんか

ひびき合うところをつなぐ糸電話

海に出て川が再び蘇る

桜散る哀しいほどにあでやかに

宝塚市 吉 田 笑 女

言葉尻取って上司にいじめられ

まだ時をきっちり告げる古時計

生かされて朝夕拝む神仏

それからの話になると口とじる

伊丹市 梅 田 宣 司

大正を昔むかしと言っておく

同窓会名刺きらしたことにする

ガン検診他の病名を持ち帰り

賽銭のわりに大きな財布出し

伊丹市 山 崎 君 子

ペラングに花びら舞ってこども春

春うらら墓地で誰かが歌ってる

花便り今日はピンクのブラウスで

春の雪花を上手に引き止める

羽咋市 三 宅 ろ 亭

先制の球は主人の得意技

チャンネルを一人で換える無聊ぶり

八十を過ぎると時代錯誤も敢てする

いろり火へ猫の座は猫が決め

福岡県 横地正好

安かったのよと簞笥の中が増え
放送の介護まさかが来た家庭
稼ぎ過ぎなどと日本の背骨抜く
やる気より逃げる気壇上答弁書

茨木市 堀良江

春光を散らしパトカー急行す
控え目な光らない宝石だから好き
天の助けまたもらったと思う日々
実物を知ればとつてい食べられぬ

奈良市 米田恭昌

母が捨て拾うてくるのはお父さん
火遊びの代償高い有名税
文珠菩薩の香煙今更浴びたとて
幹事にも女将とさして飲む余禄

大阪府 寺井東雲

禁猟の池にのどかな水鳥が
入院に茶粥食べたくなって来た
わかってない一寸褒められ有頂天
汗流し今日の結果を明日生かす

大阪府 坂本仙吉郎

水若酢遠流の島の一の宮(隠岐観光 3句)

廃仏毀釈生き残ったる国分寺

学説で黒木の御所も二つあり

親だものかじって欲しい太い脛

大阪府 町田達子

木蓮の花に思い出計が走る
ジェラシーの匂うお世辞に品がない
ユニークな挿話女神の自立聞く(赤留姫命)
悠久の美女に対面美術館(楼蘭の美女)

大阪府 稲本凡子

今で言うなら過労死をした夫
したたかに生きねばならぬ児が二人
散歩コースの桜楽しい万歩計
呆けたかな思い出すのにヒマがいり

大阪府 神保拓生

風邪引きの隣に座る指定席
立つ人と歳くらべてる善意席
調子に乗るなど遠い亡父の声
あれそれで分かる妻いて便利です

大阪府 松尾柳右子

痴話げんか上弦の月も笑ってる
丰满な肢体が一病かかえてる
親ゆずり豊かな髪に感謝する
レストラン茶の香うれしい清水港

大阪府 渡部さと美

春しばしスキー情報花情報
ほろ酔いでのもりましたな春の月
人ゆるしわたしをゆるし陽が沈む
うしろ来る靴に競走してしまふ

大阪市 岡田ふみ

旅の宿友はぼつりと秘話語る

フルムーンの娘のみやげ世帯じみ

酔っぱらった夫の本音聞き涙

無位無冠の夫に似合う妻で良し

大阪市 大野武太

気どらずに八方破れに生きてます

六月の暦に私事の多いこと

自営業サービス残業つきまとい

信心をしてから老化すすみだし

吹田市 茂見よ志子

雲切れて薄日さすよな快復期

足腰の癒えくる春のたしかなり

お代りをよろこぶ妻の飯茶碗

忘れ物ちぐはぐ履いて客を追う

吹田市 井上照子

これはドラマ ハッピーエンドにきまつてる

高貴業一服欲しい恋をした

画廊から出ると絵に似た雲流る

カルシウム補足友より釘煮くる

和歌山市 田中輝子

生きざまの一つ方向音痴なり

泣き虫の友とお酒の好きな友

サングラス 人の縁とはもろいもの

組立てて崩して刻という流れ

和歌山市 玉井豊太

母だけの通帳にある内緒ごと

ほっといてくれと両方怒ってる

酒もたばこも僕に監視はもう要らぬ

終電で吞み屋のつけを整理する

和歌山市 青枝鉄治

なんとまあ時間のかかる民主主義

酒の席札に始まり後は乱

主催者のつごうで読んだ鯖の数

待ち切れず背負って見せるランドセル

和歌山県 西口忠雄

ぎりぎりのとこまで見せる潮干狩り

暇すぎて余計なことに気がまわり

肩書きがつくと蛆虫湧いてくる

平和から水筒も飯盒も別世帯

和歌山県 岩崎瑞穂

今はもうすべてを許す老い二人

名目は顧問という飾り物

何よりの好物と言う軽い嘘

雰囲気を変えたる芸妓の今晩は

和歌山市 北山好笑

甲子園人買い船がつかむ夏

風の噂みんな素直に騙される

めぐり逢う明日という字が好きになる

消しゴムと月日で丸くなる机

鳥取県 山根 八重

絶対に本音を吐かぬうそもある
うそなのにどうして白い目でみるの
何回も泣いて未練を断ち切った
人前でうきうきしてる二人です

鳥取県 石尾 かつ乃

桜咲く人のところを知るように
孫の守り一日の幸の絵が動く
水門を開けて始まる米作り
ふる里に帰るやっぱり土が好き

鳥取県 津村 八重子

内証ないしょそれが大きな渦を巻き
いい色にぬります姑の一言は
上品な姿は失せぬ紙人形
岬から海女の磯笛風にのり

鳥取県 乾 喜与志

本当に疲れた顔で眠っている
味噌汁も今朝良い天気になった
昨夜からひよこつと腰が立たぬ齡
デーサービスまだ甦るものがある

鳥取市 武田 帆雀

こぶし咲く峠の茶屋に京の客
甲子園伝令役で土を踏む
百坪の邸で別居してなさる
威張りたいのを威張らせて花の宴

鳥取県 鈴木 公弘

愛ひとつ音叉の響きあうように
絵日傘の中で霞になるふたり
妬くことを知ったコンビの糸電話
落ち込んだ時には海を見にゆこう

鳥取市 西村 黙光

自販機に雇われている自営業
酔漢の記憶装置はすぐ錆びる
男と女 釣りも撒き餌が物を言い
薬草を探して回る万歩計

鳥取県 西浦 小鹿

その時は頭に角が生える妻
玄関に白足袋脱いだままである
口下手な男の腕がよく動く
老人は岬で潮を読んでる

箕面市 椎江 清芳

飲み込んだ嘘が寝言になって出る
左遷地へ噂を先に運ぶ風
蔵の扉を開けて先祖のロマン見る
息切れも幾度かあった夫婦坂

岡山県 松本 元江

痛む身に不義理の数を問うてみる
さそい上手な靴がはけない気のあせり
六時間無事に務めた割烹着
人さまざま花さまざまの春の夢

米子市 茂理高代

子離れをしたら私よみがえる
未来図は赤い絵の具でかき上げる
神様と響き合う手を百も打つ
貢ぐものないから笑顔で送りたい

堺市 一瀬福一

拝むのも踏むのも同じ石の運
春風に童話を乗せたちぎれ雲
本音なら力貸します金も貸す
屁理屈と理屈笑ってすむ夫婦

藤井寺市 福元みのる

還暦に若いんだねと傘寿言い
ポリュームをあげて軍歌が走り去る
無農薬野菜証明者が居ない
百歳まで生きねばニュースにはならぬ

島根県 藤原鈴江

ちよつとだけ気取ってみようか春の服
潔くさよならなんて出来ないね
酌み交わす楽しさそのうち酔うてきた
月冴えて晴れる心を抱いて寝る

西宮市 瀬尾六郎太

今もなお南船北馬生き続け
あるがまま味わい深い笠智衆
啓蟄やはるかバルカン春いすこ
權に棹 保津川開き四百年

出雲市 竹治ちかし

欠点が見えない距離で保つ仲
鬼よりも悪いことして仏顔
好きでない奴にだんだん顔が似る
補聴器の調子は悪いことにする

豊中市 辻川慶子

ジューンブライド姪はひとときわ輝けり
合格へ家中調子づいている
かくれんぼ春の花野で眠くなる
さくら咲く昔の事は忘れよう

鳥取県 上田俊路

古傷を辿れば若き日の驕り
引き返す道に初心を落してた
自画像に虚飾を捨てて血が通う
左遷地のみどりに息を吹き返す

鳥取県 石谷美恵子

励ましの言葉をもらういい出会い
飼いだの手術へ健保でも欲しい
ライバルが一人デマには乗らんんだ
金借りる時の笑顔はもうできぬ

鳥取県 西川和子

考える事もおんなじ二人です
その前を歩けば自動ドアが開く
だから今 女が強くないと
恩は着せるものではない着るものだ

豊中市 滝北博史

プリンスにあやかりたいとあせる父母
白浜の雨は明後日お湯になる

見おぼえないハンカチがポケットに
マージャンはみおつくしまで明日ゴルフ

豊中市 三宅つえ子

寝たきりの視野にぼっかり春の雲

まだ残る杏の香り母の袖

南風ハイビスカスも店先に

桜咲く人声うらら春うらら

島根県 佐々木鳳笙

摩天涯小舟に揺れる隠岐訛

ソプラノの高さで夫責められる

自動ドアわたしの両手あいてます

玉砂利を踏む音 神が近くなる

島根県 石飛水煙

競演を花の命が演じきり

燃えつきてはかない命にされている

黄砂降る軍靴で汚した砂なるか

煩惱のかたまりドンが持っていた

香川県 工藤吟笑

温かい支援に甘えている余生

近づきになったはスキーに行つてから

穏やかになってダンダン老けてくる

温もりが逃げそうになる挫折感

大和郡山市 坊農柳弘

菜の花に群がる蝶の夏はそこ

山開き緑の風に逢いたくて

札幌へ梅雨を逃がれてフルムーン

網走で初夏の足音遠くきく

倉吉市 野口節子

温い風欲しくて胸を開きます

福の神素通り出来ぬ笑い声

病む視野にピント合わせるのも情け

さんま焼くこんな幸せだつてある

倉吉市 米田幸子

忘れた頃に怖い礫は飛んでくる

神様の技術夕日を赤く染め

ロボットが人間様を振り回す

うちの嫁 米のなる木を未だ知らぬ

枚方市 小森正晴

威張らせておけばかわいい男ども

喧嘩には負けて女は元を取る

肝心のひとりやっぱり敵になり

女には悩まされたと言うておく

岸和田市 三輪通彦

鳶の子に期待の重い親の夢

残業減って痛し痒しとなる家計

喫煙も肩身の狭い駅ホーム

老いだけがふえ気がかりな未来像

富山市 酒井 輝

スリッパを脱ぐに育ちの差を見られ
程ほどの笑顔で気付かれぬ狡さ

梅雨晴れの夢にベエゴマうまい奴
やり直し効かぬは脅しだと思ふ

枚方市 海老池 洋

隕石が味方となった町おこし
うまうまと味方しかかるだまし舟

塾靴そんなに期待されたとて
血統書ポチにはあつてないわが家

芦屋市 黒田 能子

一心同体別々の夢を見る
初めての子の誕生はドラマだな

夢一つUターンして持ち帰る
ルール違反目立ち始めた子の自立

出雲市 板垣 夢酔

夜待てずキラリ一番星光る
我が身には羊かん太く切るも欲

青き海幼時に返すなぎさ波
人食いサメ来そうな夏の風が吹く

出雲市 小白金 房子

耕して天地の恵み種を蒔く
花も香も添えて豊かな無人市
灯を消せば眼裏遠き亡母の顔
年号を重ねかさねて姑も逝く

池田市 岡本 吉太郎

法要も金はずめばしびれ切れ

永田町恩知らずにはあきれ果て
太古より袖の下にて世は動く

藤井寺市 中島 志洋

上役の十八番を先に歌う部下
あじさいの色に動かぬ蛇の目傘

有り余る世相を語るごみの山
大阪府 清水 利武

就職はしたが入社は秋という
折角の桜狂わす春寒波

差向い夕べの事をネタに飲む
出雲市 富田 蘭水

年わすれ花に浮かれた祝い酒
砂風呂にきょうのしあわせたしかめる

にぎやかな町でひろった良いうわさ
守口市 結城 君子

街の風 黄砂の色に染め変える
満月の夜ざくら寒し美しき(四月七日)

花冷えの誘い行こうかいこまいか
守口市 森川 まさお

一本道で轍のあとが消えている
寺の道笑わぬ人の連れになり

ぬかるみを優しく思う足の裏

倉吉市 最上 和枝

紙人形裾の乱れに目を伏せる

描いても描いてもバラの吐息が荒れている

居酒屋へ来ると外せる肩パット

吹田市 瀬戸 まさよ

魚屋は料理のコツもともに売り

水と湯が自由この上何望む

あるところまでは皆いい人ばかり

茨木市 藤井 正雄

美人への採点カライ女の子

リラックスしているようで熟慮中

もともとのダンディー祖父のベレー帽

鳥取市 前田 一枝

はき慣れた頃には靴も穴があき

大声で呼んでこだまを引きよせる

良い笑顔頬に愛らし片えくぼ

岸和田市 田中 文時

難民のような競輪帰り客

酒呑みに仕え肝臓フル操業

朝酒はうしろめたくも楽しけり

豊中市 井上 直次

欠け皿をつなぐと見える縄文期

嫁の靴揃えただけで睨まれる

さよならのあと延えんと女客

宝塚市 中田 純次

古名刺声も笑顔もよみがえる

いい夢をみたあとネジが緩み出し

羽田 小淵 同床異夢の離婚劇

第17回 全日本川柳愛媛大会

《川柳大会》

日時 6月13日(日) 午前10時開場

会場 愛媛県民文化会館真珠の間

参加費 3000円

宿題 第1部(事前投句)

「澄む」 愛媛 塩見 草 映選

「秘話」 青森 波多野 五楽庵選

「少年」 熊本 吉岡 龍城選

同 第2部(当日出句)

「雲」 栃木 桜井 豊 泉選

「線」 大阪 住田 英比古選

「海」 広島 石原 伯峯選

「全」 神奈川 大木 俊秀選

《前夜祭》(式典・祝宴)

日時 6月12日(土) 午後7時~同8時半

会場 松山全日空ホテル

参加費 8500円

自選集

松川杜的

本田恵二朗

病むベッドいっち効くのは妻の顔
弥生の日記一頁が未だ余り

それとなく気付く人生の曲り角
四月馬鹿であればと願う床のバラ
札状も書けず見舞状溜まるのみ

藤井明朗

岩本雀踊子

自然は人間を試す花見へ雪が舞う
名残り惜しそう北国へ渡り鳥
おんな癖ですねと妻に笑われる
辛抱を大事に苦勞をみせぬ母
さくら百選ふる里の過疎生き返る

辻白溪子

遠山可住

もう迷わないふところに持つ辞表
流石京詩情を添えた雨期の庭
交替の投手期待に応えない
看護婦に歩かされてる試歩の杖
ご機嫌の悪さを替心知っている

同期生風の便りも絶えそめる
さんざんにしほり取られて目がさめた
天下泰平酒の肴にしあう仲
風流の逆もまた佳し千鳥足
影がある俺もお前も生きている
追伸に母の弱音がもれて来る
やせ我慢している笑いにふと気付く
どん臭い男になつた冷や奴
人騙す人間がいる尻尾
父の樹に登ると見えた道しるべ
おおきにで済ませてくれぬ貰いもの
たくあんがカリカリ噛めていい余生
美しく乱れてみたい春の花
老衰と書く二字 母の日記閉ず（母九十九歳で逝く）
来世も母 母であれ身籠らん

月原宵明

有働芳仙

納采に日本のさくら咲き競う
栄転に左遷さくらの知らぬこと
花はみなお酒を友に梅 桜
晩酌の追加句想が湧いてくる
花咲いて株が上がってGセブン

野村太茂津

小林由多香

全て容して私の位置を見失う
熊野古道へロマンを辿る夢ばかり
螢舞う古里の池音がない
亡父の日課の真似になってた墨を磨る
亡妻の五十回忌は派手になる

久家代仕男

金井文秋

人間がいびつになると目も濁る
老木に圧倒されてお辞儀する
花粉症 鳥の仲間が見て笑う
喧嘩した頃の歯形がまだ残り
胃カメラを済ませ煙草の旨いこと

大矢十郎

恒松町紅

待合いで風邪もろて来た花粉症
あの時に売れば買えばを繰り返し
六法は曰く因縁など知らず
お日さまに味を委せて塩干魚
宅配で返送したい孫を連れ

養老院夢も希望もすてた顔
さくらさくら螺旋階段舞い降りる
蓮華草故郷へ続く青い空
孫の手に明日の日本の血の温み
回転椅子回るが首が回らない
母さんの笑顔に励ましをもらう
出まかせの嘘でつくろう負けいくさ
つまずいた石へ初心がよみがえる
白い杖無理な横断などしない
洗車する少年の目は生きている
健康をいつも試してみる速歩
まだ八十二だと達者だから言える
身辺整理そない慌てることもない
ひ孫までわざわざ見せに来てくれぬ
忘れてもよい値で傘を売っている
子離れが脱皮出来ない紙風船
留守をいい事に愚妻の長電話
酔うて寝てあしたの予定ない無職
午前さまに付きあわされた古希の足
年下の女房にいつも叱られる

金丸の中型 小型 永田町

工藤 甲吉

花に酔い酒にも酔った膝枕

野田 素身郎

自動ドア家宅搜索とは知らず

原告の中で遺影もバンザイし

レントゲン冗談でないものがあり

ベットからベットへ移る生欠伸

谷 垣 史 好

仕事から離れ頭はいま臍

まんじゅうをモグモグかくて老いゆくか

フクロウに会いたし出口のない迷路

死に急ぐことはないが誰かが呼んでいる

寝転んで読む金融恐慌史

八 木 千 代

佗助の白を汚してゆく径路

足もとに紅散らばせて椿の木

藪椿 恋もあくまで藪の中

葉隠れに椿は風を産んでいる

無彩色だけで椿を描いている

植 村 客 遊 子

頼られた代打見事に三振し

自信ある試験のあとで点を読み

正直に話せば俺が不利になり

あの頃によく逃げた道家が建ち

お隣と分けて植えてる茄子の苗

水 粉 千 翁

妃を迎え一系の皇子莞爾たり

一系の微笑に皇太子妃あらせ

妃と並ぶ皇子に万世ゆるぎなし

妃の宮の笑顔に皇子の凜々として

万世へ晴れがましくも皇太子妃

兄 島 与 呂 志

久しぶりどきまぎしている祝い膳

紫陽花の別れが気になる屋台酒

止り木のままで人間不信酔う

カバ―する妻ありつつがない夜明け

一日が終り明日の夢に寝る

波 多 野 五 楽 庵

紫陽忌逢いたい人が一人いる

深爪の理由を聞かぬ雨の傘

かたばみがはじける程の安楽死

ごめんなさい足が熱くて眠れない

思いちがいばかりしている鏡です

正本水客

塩漬けの桜がひらく春ちやわん
山の湯の桜なみきに雪のこる
しだれざくら枝から春がこぼれおち
紅しだれ春をもくもく抱いている
花ふぶき流れる水がうけとめる

高杉鬼遊

さくら咲くこんなよい日におとむらい
カップラーめん妻は朝から留守にする
よそののを他所者と見るよその人
損だ得だと裸で生れ来しものを
栗の花おんなに想うこと多し

藤村女

細い雨紫陽花坂は亡母思う
紺紺亡母の匂を着て偲び
花菖蒲小雨に濡れる女といる
女系家族一言ずつが多過ぎる
露天風呂月が星つれ覗き込む

小出智子

富士山にまだ雪があり上京す
君たちはまだ若いなと言う恩師
八十八の妹が居るうちの母
ひとり言母は陽気な生まれつき
春というのにニコリともせぬ電話

黒川紫香

探しものしていると猫がつきまとう
咲き終えた花びら疎水雨にする
きらめいてシヨを交じえた老スター
残高のない通帳を持ち歩く
約束を果して帰る星月夜

西田柳宏子

ある予感今日はよいことありそうだ
制服に自由と個性閉じ込める
深追いをしたなと思う四面楚歌
胡蝶蘭豪華な演出してくれる
今になり亡父の忠告効いてくる

河内天笑

自慢することがだんだん減ってくる
ヴァイキングゆっくり食べたことがない
おとぼけのうまいお方で呆けはらず
もてたことないのでもてた話する
お薬を出すのが好きなお医者さん

阿萬萬的

証人喚問突っ込む方もちと粗末
肺癌の不安をよそに喫う煙草
路の臺描いて民宿から帰り
小野の小町の文塚若葉の陰の中
養殖の螢で過疎の村おこし

川柳太平記 (181)

川柳の群像

阿達義雄

東野大八

古川柳研究の大先達・岡田三面子と西原柳雨の衣鉢を継承し、真摯明察のこの道の難路をハイウエー化したのは、山路閑古と阿達義雄の二人を挙げねばなるまい。

阿達義雄は明治38年11月1日新潟県新津生れで、東北帝国大学法文学部卒業後、しばらく北海道で旧制中学校の教鞭をとり、このあと郷里新潟に戻り、村上高女教諭を経て、新潟第一師範について新潟大学教育学部教授で活躍した。

この頃、『川柳しなの』『川柳雑誌』『武玉川』等の全国柳誌数多に、旺盛な古川柳研究の論稿を発表し続けた。殊に注目すべきは、川柳不毛の地と言われた新潟県から大野風柳の呼びかけにより新潟川柳社を創設し、機関誌『柳都』を発刊したのは昭和24年1月であ

った。また、昭和24年11月には、地元の下村梵主宰の『武玉川』が創刊されるや、同誌に毎号健筆を揮っている。

「私の方針（古句研究）」として、ある事項について句を集める時には、佳句にせよ駄句にせよ、自分の解釈力の及ぶ限り、柳多留中の悉くの句を拾うことにしている。そうでない、その時代の句の傾向の真相が知られないからである。作者を主として扱う場合にも多少の非難があらうとも、この態度が学問的に大切だと思っている（『庶民と江戸川柳』）

「川柳研究の歴史をざっと眺めてみると、川柳の研究らしい著書の出たのは、明治三十三年の梅本鐘太郎著『川柳難句評釈』からであり、三十五年に鶯亭金升の『狂句の葉』、三十六年には阪井久良岐の『川柳梗概』が出

ているにすぎない。（中略）

明治時代に川柳が一般の人々の関心をひくようになったのは、明治三十八年以降であろう。明治三十八年五月、久良岐によって川柳誌『五月鯉』が、更にその十一月に井上剣花坊によって『川柳』が創刊されている。（中略）また、この年には花岡百樹の『川柳類纂』四十年には幸堂得知の『略解時代狂句選』が出されており、三十九年から四十年にかけて花岡百樹・渡辺虹衣・今井卯木などが相前後して大阪に移っているから、右のような古句研究の道が拓けたと思っている。加えて四十二年には『葉桜』『矢車』『獅子頭』『青柳』『柳行李』などが出されており、すべて古川柳研究の紹介にこれとめていた。

西原柳雨は、明治一十年から古川柳に着目し、岡山県立高梁中学校に十八年間勤続中、彼は『川柳吉原志』『川柳難句類解』『川柳膝栗毛』の高著を発表し、古川柳研究グループに対し、正に彗星のごとき存在力を示した（『西原柳雨の古川柳研究』阿達義雄・『武玉川』第三集）

阿達がこの柳雨に傾倒し、ひたすら古川柳研究にその生涯を賭けての研究一途は、柳雨五カ年間にわたる大労作『柳多留拾遺論礎稿』が極め付けとなった。

阿達教授が新潟大学を退官された記念として、最終講義が昭和46年6月20日、教育学部講堂で行われた。翌日の新潟日報に掲載された記事を要約するところである。

ことし三月末をもって新潟大学を六十五歳の定年で退官した教育学部名誉教授阿達義雄博士は「川柳をまじえての最終講義は、脱線しながらも淡々と……」というのが見出しであった。長年親しんだ新大教育学部四一講堂の聴講生は約三百人であった。

阿達さんは「教授」の肩書よりも「夜潮音」という川柳の雅号で親しまれている人で、昭和23年から本紙「ニュース川柳」の選者、43年には博士論文「江戸川柳の史的研究」で庶民文学川柳の地位高揚に貢献があり、第21回新潟日報文化賞を受賞している。

講義は「シンデレラ三態」と題し、仏・独・日それぞれのシンデレラを比較検討して民族性を引き出すというもの。

「語り継がれた民話や童話には、その民族の特色や欠陥がそのまま出ている。文豪といわれる人の作品は、理想の追求の姿勢がありこれは「建て前」である。民族の本音、庶民の本音の詰まっている民話や川柳にも現代文学以上のものがあるのではないか」

淡々とした語り口のこれが阿達教授最後の

名講義であった。

「三十八年度は『論文研究』として、九鬼周造著の『いきの構造』を取り上げられた。久しく絶版になった本書の昭和五年版を教材用として印刷されて学生に配られたのである。九鬼周造は、『いき』の構造は『媚態』と『意気地』と『諦め』との三契機を示している、とした上で

いきとは、わが国の文化を特色づけている道徳的理想主義と、宗教的非現実性との形相因によって、資料因たる媚態が、自己の存在実現を完成したものであるということができ、と述べている。先生は難解な本書を分かりやすく説明して下さい。たとえば歌謡曲の『お富さん』をとりあげ、

いきな黒堀 見越しの松に
あだな姿の 洗い髪

死んだはずだよ お富さん
と節をつけて、春日八郎ばりの美声で、おもしろおかしく説明して下さい。

また、ところどころで江戸川柳の人情本、歌舞伎の内容を引用された。そのひとつひとつは忘れてしまったが、女性の声色をまねたり、しぐさをみせたりして、しばらくは笑いが止まらなかった」（『川柳しなの』五九七号

阿達義雄先生の思い出 浅岡修稿要約）

「阿達夜潮音先生がなくなられた。それを知ったのは平成四年五月二十八日だった。新潟日報の学芸部からの電話であった。

昭和二十三年の十月ごろである。私は未知の先生宅へ電話を入れた。そのころ、『夕刊にいがた』の日曜川柳の選を担当しておられた。私もときどき投句をしてお名前だけを存じあげていたからであった。

用件はなんとしても新潟県から川柳雑誌を出したいからである。新潟は川柳不毛の地と言われ、一冊の雑誌すらなかった。四、五年前から川柳を書いていた私にとって川柳誌発行は『夢のまた夢』でもあった。

先生は『すぐきなさい。私も考えていた』と言って下さった。奇しくも同じ新津市に住んでいられたのも、一つの縁であった。そして二十四年一月に『柳都』という柳誌が誕生したのである。正に阿達先生は『柳都』の生みの親であった。当時先生は四十三歳。私は二十歳であった。（中略）やがて『柳都』が現代川柳誌として姿を変えていったため、先生は別に『川柳文学学会』を創設、ここで多くの川柳愛好者を育てられた」（『柳都』522号「阿達夜潮音先生を悼む」大野風柳）

▼次号は「後藤 梅志」

柳籠裏三篇研究 (十七丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

296 竹の印籠をてうちん持ハさげ

佐藤 提灯持が、スベアの蠟燭を入れる竹筒を腰に提げているのを、印籠を提げているのに見立てた句であらう。

西原 竹の印籠は即ち提灯のことであらう。

小田原提灯ならん。

青木 礎簀。「竹の印籠」の用例見当たりませんが、礎稿の如くスベアの蠟燭入れのようには思われます。

鈴木 「竹の印籠」は不明。佐藤兄説は一解としていただきます。

岡田 「竹の印籠」、予備のロウソク入も一解。異説を唱えれば、提灯持をお供に従えているくらいの人ならば、その提灯は紋所入り。

その辺りが句解のポイントか。

297 又も此世に忒人リ無ひうつくしき

八木 不明。文句取りらしいが、元の文句が分からない。小野小町・在原業平等が考えられるが、詳しい事は分からない。

岩田 先行吟に、

美しさ又も此世にないきりやう 傍五18

とあるが、よく分からぬ。八木氏のおっしゃるように、文句取りのような気もする。

巻頭の祝儀の句であるから、富士山を詠んだのではあるまいか。人に見立てて「不二」で「二人無い」となる。

紀内 成程、岩田氏のように富士山のことか。

西原 又(股)も無い、二人とない美女は小野小町。なお、文句取りかと愚考して、謡曲にあたったが、見当たらず。

青木 小野小町説に賛。「穴のない股」にも掛っている句いもする。

鈴木 本句の表現から特定の人物を想像することは無理である。小生は岩田氏の説に賛成する。「巻頭祝儀」の句であり、「五月二十八日 角力会」とある五月二十八日は、翌二十九日が晦日であるから「晦日 今日より所々に富士参群集す、六月朔日のところにくはし」(東都歳事記)夏の部とあり。これをふまえて木花咲耶姫をまつる富士を詠める句としたい。

岡田 鈴木氏の言われるように、特定の人物の決定は困難。小町も考えられ、「この世にない」だからカグヤ姫も考えられる。

また、「五月二十八日開」に着目された鈴木氏の説も重要。五月二十八日は富士裾野の曾我仇討の日である。それと富士山との観念が結ばれる。というわけで、富士の美容：説が一番妥当かと思う。

298 目にミへて富る所は日本也

八木 本句もよく分からない。日本橋に人通

りが多く、賑っていることを詠んだ句か。
七久保〓日に千両のお金が落ちたと言われる
魚河岸を指しているのではなからうか。

岩田〓これも祝儀の句として「富士」ではな
いか。「目にみえて」と「富める」である。

とめるさむらいハするがに立て居る

一八六

それと当時の流行語「日本だ」(すばらしい
という意)を取り入れたようにも思ふ。従つ
て、富士が美しくそびえて見えるのは、すば
らしいとの意を詠んだもの。

西原〓日本橋だと思ふ。その賑い、魚河岸の
日に千両、近くの駿河町は越後屋、不二の
景、それをふくめたお江戸賛美句。

青木〓同。当時の日本橋界隈の股賑な様を言
っているのであろう。

鈴木〓西原+岩田説。富士もよく見える日本
橋辺の股賑ぶり、お江戸賛美句で良いでしょ
う。

岡田〓富士が橋上から眺められる日本橋の繁
華ぶり礼賛句。

299 亀ハはなされるが鶴ハはなされず

八木〓亀は江の島、金亀山の称による。鶴は
鶴岡八幡宮。引き潮になると江の島は陸地か

ら離れるが、八幡宮の方はそうはいかない。
というようなことか。

岩田〓礎稿賛。

つるかめを道草にして湯へは入 一六八

それを「はなす」という言葉を使って放生
会めかして仕立てた謎句であらう。

紀内〓岩田氏とは逆に考えていた。句の対象
はあくまでも放生会。「鶴亀は常に対になっ
ているにもかかわらず……」というのであろう。
そして、その裏に礎稿の説をきかせている。

はなし亀元は鶴から思いつき 七四

佐藤〓同右。しかし、鶴岡もいくぶん入って
いよう。あれ以後、放生会に鶴を放したこと
を聞かぬという気持が。

鈴木〓紀内氏説でよいと思います。亀とか鳩
などは放生会ではませんが、鶴だけは放されな
い。

岡田〓八幡宮の放生会。もつとハッキリ説明
すると、放し亀は売っているから放せるが、頼
朝のように千羽鶴でなくとも鶴は放されぬ。
もちろんめたい鶴亀の取り合わせ。

川柳塔用箋(一冊二〇〇円)

送料 一冊二五〇円 二―三冊三六〇円

※数量がまとまれば「ゆうパック」で

■句集紹介

土居ひでの『母娘草』

大原川柳社の土居ひでのさんが還暦を記念
して句集を出された。朱色の表紙に若苗色の
見返し、クリーム色の扉という百ページのす
っきりした本。題して『母娘草』。

母ひとり娘ひとり繋ぐ郵便車

の巻頭句から採られたものだが、あとがきに
よれば、ひでのさんには米子に九十四歳にな
るお母さんが居られ、「私に出来る孝行の最
後のチャンスかも知れない」と刊行を思い立
たれたという。

釘折れの文字を辿れば母の無事

手鏡が笑うて老母と瓜二つ

母の鈴まろくなれよの音で鳴る

ふる里の母が小さく老いていく

菜の花の真ん中にある母の顔

など、母を詠んだものに佳句が多い。

思いきり眠ってみたいねむり草

の句で昭和六十三年度の川柳塔賞を受賞され
たひでのさんだが、これからも大原のまるい
里とあたたかい家族の輪の中で、マイペース
の作句を続けていたきたい。

(正)

秀句鑑賞

同人吟 八木千代

— 5月号から

女三人 沈黙ごっこなど如何

西山 幸

長いあいだ川柳に関わっている生活のうち、若かった頃には考えもつかなかった思考や不思議な感触が、横隔膜のあたりに実在として芽生え出したことを感じています。

四季の移り変わり、天体の運行はもとより、ごく日常の些細な事柄も私の病氣も、身内の心配ごととみんなみな私の心の底に樹木の種子が運ばれるみたいに息づくのです。実は忘れた種も拒みたい種だってありますのに、当然とばかりに根づいてしまつのです。

その場所には種を育む土壌があり、どうもそこらあたりの地主さんは川柳さんのようです。今は苦の種だと思えても、必ずあとになつて私の心を救ってくれる有難さ。知らず知らずのうちに優しく、したたかに育つてくれていて生きてゆく私の姿勢をかたちづくるための、樹の種であつたかと。そう気がついたからは、ならぬながらも根気よく耕し続けて、大切なこの土の中に、静かに根をおろして生きたいと願わずにはいられません。

何か重苦しい空気が濃んでいる場面が見えそうです。三人の女たちの表情もその裏側の心理の動きまで感じられて、私も三人の渦の中に引きこまれそうで何とかしなくては何か明るい糸口を出せないだろうかと焦りが出てきます。幸さんの句のなかのトリックにやすやすと捕えられたわけです。

ところがこの句にはもう一つの部屋が用意されています。そんなに深刻に考えないで、と作者の聲が聞こえるのです。もつとぐ解決するから、三人とも良い会話を持ちたいから時間の問題ですから。そこで大安心して幕となった次第です。

鐘の音あの世この世の中ほどで

新家 完司

抵抗感が全然なく読み口がいいのは、私の世界と似通っているからでしょうか。自分の願ひ事のために鳴らす鐘の音でさえ途中からあの世ともこの世ともつかなくなる私です。

この場合は遠寺の谷を渡り風に溶けこんで鐘の音でしようからなおさらに訴えるのでしょうか。作者の孤影も沈みゆく鐘の中です。敵の敵に塩を送ってみたくなる

舟渡 杏花

さすが謙信公のお膝もと、故事を踏まえてそれをまた逆手にとつて。男性の句のようにすかつとした切り口、読みながら思わず手を叩いてしまふ。こんな川柳が大好きです。当面の敵は手ごわくてこのままでは勝てない。自己防衛のために何とかと目を据えて大きく見回してみてもの妙案、ただしこれは策などと言えません。「送ってみたくなる」の揺れに見える哀しさ、切羽づまつた不安が伝わって声援を送りたくくなります。

睨まれたような気もする望遠鏡

三宅 不朽

このような経験は、どんなにもあるでしょう。被写体をみつめているうちに逆に観察されているような気持ちになってドギマギ。自分の場合には恥ずかしくなるけれど、他人さまの時には大笑い。それもこんなにあつさりと言告白されると爽やかで楽しく「実は私にもね」と言わでもの事まで言いたくなつて、面白くて罪悪感も消え、嬉しい覗き見の共犯者になつてしまいました。

一つだけ納まり切れぬ玩具箱

石垣 花子

ありふれた家庭内の風景を難しい言葉など使わないで詠んであるだけですが、どうしてどうして。年輪の眼はもっと鋭く深く見通しているのです。始めにきっちり納まっていた玩具箱はちやうど世の中の制約とか不自由な狭い世界にいたわけですから、いったん外へ出て広い空気に触れてしまつたら窮屈な箱に疑いを持ってきた玩具が一つや二つあるのはごく当然の理でしょう。すらすら書いてあるように花子さんの視点は組織や社会の隅からの主張をも拾つという大きさがあります。

宿明けの時によく遭う霊柩車

田中 叶

宿直の帰りでしょうか。時間と道程を反対側から歩いていると、自分の存在を考え直してみる思考が胸の中に首をもたげるのも人間だから。そんな朝に限って悲しみの霊柩車に出遭つという事は有縁というのか不思議なこの世のドラマです。通過してしまつ揺れの瞬間が鮮烈で、暗い情感が漂います。

来る所へ来たたと牛の白い息

田口 虹汀

その先の牛の運命を知らながら手放さねばならない嘆きの詩はよくあるけれど、売られ

てゆく当事者の牛の句は少ないように記憶しています。白い息の写実が下五に重く置かれ言いよのない哀れがひしひしと迫ります。人生を深く突き詰めて牛に寄せられた実感は心で書かれていると思うのです。

元教師だとすぐ分かる元教師

岩津 ようじ

もう一つの顔は誰にもあるものでしょうか、どうしてなのか先生という職業には長い間の責任や指導の立場だったからか、教師らしい体臭が身についた人が多いのは事実です。勿論例外もありますが、自分の負の部分だと思ひこんでいらつしやる。そんな悩みを持つ方も多いようです。一瞥しただけで元教師と判つて、一面ではほつとしながらも抵抗感で発が先に立つてしまふ。つらいでしょうね。

ポチの名義でポチの食費を預金する

金山 夕子

夕子さんはきやらばくの有力なメンバーです。所謂みうちを褒めるのは気がひけるのですが、避けて通れないほどの魅力を持つ川柳なので立ち止まってしまいました。ポチの名義とは斬新ではありませんか。ポチからは計り知れない心を貰っている。ポチの食費くらい私が働く。誰にも文句は言わせない。遠慮させはしないと、きっぱり言い切る女主人で

す。毅然とした姿に愛がいっぱいに籠もっているのが嬉しいですね。わたくしも椿名義で川柳さんの食費を積むことにしましょうか。言うともなしに去年とおなじ花の下

田中 輝子

美しい桜の下で、誰もがもつ思いながらも古いとは言い切れない情感がひたひた溢れくる句です。年々歳々人同じからず、爛漫の花の下に引きこまれて、花の心にまで入つてしまつて、出口がみつからなくなりました。句やかな桜の絵のはずなのに絵の裏にはじつと据わっている醒めた眼があつて、私を放してくれそうにありません。

鏡から受ける訓えは手きびしい

栗谷 春子

かくれんぼしたい時は鏡に向かって紅筆を持ちます。現実を見極めたい刻は洗つた顔を鏡に見てもらいます。遠い日に帰りたいときはいつまでも鏡がなみだで曇るまで見ています。鏡は折々の私の相手にはなってくれませんが、明日の保証は絶対にはくれません。ただ真実を晒してくれるだけなのです。今を直視せよと訓えつづけている鏡と一対一、素直に肯定しながらも「おぬしなかなか手きびしいのう」と、真つ向から笑い返せるゆとりこそ老いの甲斐とも申せましよう。

水煙抄

黒川 紫香 選

和歌山市 岩本 美智子

宝塚市 永田 暁風

遠い記憶ある街角に立ち止まる
前向きの姿勢で生きる君が好き
今日の汚点^{しみ}抜けないままに日が暮れる
ピカピカの靴おろせず抱いて寝る
卒業へ師の大船に乗せられて

静岡市 浅子 まつゑ

自分史の終章飾る小さい夢
好きですと言えず封筒ピンク色
義理果たし駅の階段軽く降り
精一杯咲いて悔いなき落椿
愛の輪をころがしながらボランティア

岡山県 国米 さくゑ

連れ舞いの蝶驚かす春一番
音のする方に傾くヤジロベー
三年先読んでゆとりの煙草の輪
切り札を秘めてゆとりの靴をはく
返し縫い女の意地がまだ迷う

夕焼けも消えて浮き出るわが墓標
追いつめられたところに梯子はあるものだ
米粒が明治生れに流れるよ
賢い人のそばに座らぬことにする
どこまで伸ばせば亡妻の手が握れるか

熊本市 宇野 照代

ダイナミックにカレーが煮えるキャンプ場
父と子が酌み交わしてる花の下
王子様との恋を夢見た日の日記
柱時計ゆがんだまんま夫の留守
温室の花は知らない風の歌

富山県 高畠 五月

逆縁の柩に傘をさしかける
窓際でジョークと皮肉ふり分ける
〇と×世の中うまく割り切れぬ
桜散る電気仕掛けのように散る
老兵が単身赴任にする訓示

今治市 越智青園

輪ゴム飛んで逝った子供を思い出し
口べたで両方が話題探してる
手を合わすあなたの嘘にひっかかり
絵ごろろへふと立止まる花菖蒲
完熟果ほんとの味で喉を越す

名古屋市 藤井高子

雨止んで帰路新緑をほしいまま
情熱を秘めて沈むか水中花
この人もドラマが見える荷を担い
藤の房平和が好きで長く垂れ
現代のテンポ爪噛む暇もない

広島市 流奈美子

お人柄にじむのですね丸い声
ふと友に便り書こうと回復期
書き終えた右手に湿布貼っている
突き詰めて見れば他愛もない誤算
思いまた堂々巡りして無為に

広島市 森田文

ふる里はだいにしたい物ばかり
億の字にすっかり慣れたわたしです
ラブレター励みにならぬ事もあり
枯れ草の中の蓬が萌えている
切り替えていい一日と感謝する

富田林市 池森子

あの日から夢が膨らむ花明り
受け皿に沈むやっぱり理由がある
大きめの皿いっぱい夢飾り
残り火がやっぱり愛を主張する
出直すと決めて女の春帽子

砂川市 大橋政良

長い祈りが終ると眠くなってくる
春の椅子 噂の渦の中にある
声一つかかって来ない指定席
はじめての役は通行人でした
旅先の句 宅急便で来る

熊本県 大川幸子

刹那刹那に命を賭けている青春
やさしさが自然に出来ぬわだかまり
エゴイスト自分の掌汚さない
今だに蛙 柳へ挑戦したくなる
買う方が安くついている修理代

富山市 島ひかる

荒波に揺られ上手なユリカモメ
三月の雑草にある心意気
旅支度亡母の指輪を身につけて
赤い糸切りそこねてる糸切り歯
青嵐にのって花粉の続く旅

尼崎市 児玉歌子

ねちねちと敵が盲点突いてくる
ひとり旅詮ない鬼を飼うている
人生の旅サイコロは妻が振る
発言の代行オウム飼うている
住み慣れた土地にさよなら言えずいる

尼崎市の場 十四郎

出歩いて春の鼓動のなかにいる
旅ごとに友が土産をさげてる
指切りで島の椿がまた落ちる
根気よく出稼ぎ守る束ね髪
ちぐはぐな好みで回る夫婦独楽

静岡市 沢田 さん

風邪で臥す花も一しよにうなだれる
さくら餅うっかり秘密口に出し
天国の星は平和に光ってる
美しく年相応のおしゃれする
スカーフへおんな心を覗かせる

久留米市 鶴久 百万両

傷ついた小鳥を癒やすノラがいる
顔のない男の意見なら聞かぬ
旧姓に戻る羽化ならやめ給え
舞踏会へところが揺れる魔女の恋
禁猟区で猟犬 暇をもてあます

摂津市 木下道子

つい滑る口を許した自己嫌悪
飄々と手を振る別れ笠智衆
回り道見事な花に巡り会う
温室は知らずたんぽぽれんげ草

尼崎市 野瀬 昌子

海外の家族に送る週刊誌
友達の輪が大好きなメダカ達
居眠りをしながら聞いている妻の愚痴
男と女指切りばかり繰返す

尼崎市 長浜 澄子

ドミノ倒しの中で生きてる父の靴
大皿に見栄も一緒に盛ってあり
腕を取り今宵名残りの通り抜け
ライバルの視線居眠りして外す

和歌山市 玉置 当代

スキップの足軽やかに春を舞う
欲望も人間だから制御する
遠ざかる足音離別だと思ふ
花霞のたりのたりの飛行船

和歌山県 杉山 精子

沈丁花匂う独りのティータイム
身の丈の夢に相槌くれる夫
夢はるか十指の透き間にある血潮
手鏡に嫌な自分を閉じ込める

松山市 丹下美津子

ハウステンボス二度ない孫や子連れ
のんびりと風車も澄んだ風をくれ
誘われたら一緒にいたい花遍路
タラの芽の天ぶらがのる里の膳

藤井寺市 高田美代子

翼のある街のネオンが美しい
時効寸前口すべらせた日の悪夢
父がいたら母がいたらと豆ごはん
アルバムもだんだん歳をとってくる

尾崎市 尾宮弘治

梅林が見事左遷の地が温い
シクラメン咲いて玄関狭くする
叱りつつ母が補う娘の家計
良い夢が見たく下着を替えて寝る

和歌山市 辻翠子

嫌い抜く事が出来れば楽だろう
未完の絵ばかりへ落ちる砂時計
演じきって一気に水を飲んでいる
叱られてみたくてわざと虚勢張る

西宮市 亀岡哲子

新卒の僧侶が参る桜の忌
再会のストローすこしかじる癖
幼稚園絵地図に丸いあひる池
吊皮にやっと届いた春休み

鳥取県 土橋睦子

嬉しい時も悲しい時も花を買う
母方は美人じゃないが腹がよい
輪の中に絵になるひとがひとりいる
いち日の行動書いたメモ渡す

熊本県 岩切康子

腹の立つことを押えて丸く住む
後ろ髪引かれ日曜カルチャーへ
花吹雪その後は広場駆けめぐる
肥後椿 来客の度剪られてる

熊本市 黒田緑

身軽でも単身赴任味気なし
空の色白木蓮の香に溶ける
本心をこころ澄ませて受けとめる
沖はるか歴史かなしい島の影

鳴門市 八木芳水

遺言へ書く追伸が多過ぎる
寒椿悲しい話にポトリ落ち
翔べないと分かっても鶴を折る
乗り継いできた鈍行の旅までも

和歌山県 岡本睦美

はじけたい心が赤い花を買う
鶯の声で目覚める幸がある
譲れない椅子ひとつだけとってある
ときどきは戻って探す道標

西宮市 古谷 ひろ子

生きていてよかった花の露天風呂
まだ母が送ってくれる蓬餅
待っていると聞けば今年も釘煮たく
許されて許して花の下に居る

大阪市 亀井 円 女

東京からの電話は娘のお説教
長電話わたしあくびをしますの
老夫婦犬と猫にはよう喋る
男の浪漫に時々負けたなと思う

今治市 渡辺 南 奉

母の手に返すと甘え癖が出る
心より金が大事なときがある
野も山も他人の顔をする異郷
一番高い樹はライバルに登らせる

米子市 足立 由美子

考えをからりと変えて折り返す
児の笑顔わたし陽気にしてくれる
若者の船出促してる風だ
太陽に両手抜けて向かい合う

旭川市 朝倉 大 柏

魔女だった頃を鏡に呼びおこす
雑学の一つが余生ふくらます
見てるほど見えてはいない名画展
退院を見送る淋しい眼に出会い

松山市 白石 春 嶺

人間としては駄目だが金を貯め
打ち損じがポテンヒットになる苦笑
地球儀のここが燃えてる飢えている
決心がついた庭師の石の位置

今治市 白石 サダ子

春うらら埃やたらと目立ちだし
花冷えに行こか止めよか迷う靴
紅ひいて今日のスマイル決めて出る
腹立ちが減って年功腹が出る

静岡市 永倉 柳 華

新薬を飲んで一病試される
昼寝した頬に畳の目を描く
笑わせる友が来てから輪がなごみ
窓開けて春の匂をほしいます

羽曳野市 芦田 絢 子

どう見ても私に不利な風の向き
カルチャーの話題も老いを見る話
たんぼぼがかじかんでいるもどり寒
齒科予約半端な刻を持て余す

堺市 桜井 莊 次

うっふんのはけ場を探している手酌
口下手にしては話が旨過ぎる
大正のあねさんかぶりがよく似合う
お節介な奴ほど恩を売りがる

西宮市 菊池 トミエ

植木市植える場所なし立ち見する
一人では花見する気になりきれず
再会はお国訛りがとんで出る
立読みの本屋で会った定退者

西宮市 牧 渕 富喜子

お受けします画面見る眼が母になる
ふるい友何を言っても怒らない
仮通夜の家の門灯消えている
引越した家に二階があるんだよ

福岡市 井 崎 ミサ子

物言わぬ夫が覚悟を話す夜半
こだわった大した事でない言葉
慣れたならつい出て来ます自分流
朗々と和歌を吟じる運転手

岐阜市 渡 辺 杏 村

低打率にドラフト一位あせりだす
一年生合羽を早く着てみたい
そんなはずないと見直す試着室
太っついて健康ならと妻自慢

鳥取市 大 坪 天 涯

苦しくてはがきになって傍に行く
定刻にバスが着かないので飲んだ
赤飯を分けてあげたい人が居る
頭下げ続けて母は老いてきた

酒田市 永 澤 裕 子

どの孫に老後を託すおこづかい
言い逃れ最後の藁がつかまれず
忙中閑下手な詩吟を聞かされる
真夜中の電話無言で切る怖さ

尼崎市 中 澤 向 西

ささやかな野心が覗く可愛い娘
税金が影絵のようについてくる
親切へちよつと戸惑う正義感
父さんに指切りしても頼りない

西宮市 山 本 義 子

こだわりをすてて自分の色を着る
色鉛筆 使いきれないまだ六十路
太りだし胎内くぐり四苦八苦
うら悲し唐人お吉寺落ち椿（伊豆にて）

西宮市 岡 本 道 子

半分は思いちがいのまま春へ
問われても問うてもおぼろ月の中
花明かりさよならすこしあとにする
靴下を脱いだ冷たさ人の計の

八尾市 秦 正 子

言い返して胸のつかえが倍になり
なり振りもかまわず走るバーゲンへ
真面目過ぎる貴方が少し物足らず
ドラマ見て貰い泣きしている平和

松江市 松浦登志子

地方紙の川柳欄で名を知られ
雨に風 邪魔が多くて万歩計
下宿決め合格の報待っている
留守電の息子に敬語使う母

熊本市 北川一進

記憶する積りのメモが見当らず
包装も上手になったアルバイト
丸一つ増えたらノルマ追っかける
ガイド嬢城を大きくほめて行く

河内長野市 大西文次

とんでもないことを祈っている夫
来てみればやっぱり金のいる話
コーヒーとケーキ不況の入社式
一円玉の音は神さん聞きわけ

尼崎市 吉永伊三郎

書き初めに書いた禁酒が風に舞う
年金日また一枚の夢を買う
よく喋る女が播いた嘘の種
スタートの顔は皆強そうに見え

兵庫県 岡増純子

倅せな友会う度に若返り
気まぐれな風に出会った一人旅
発表会 我が子ばかりを追うカメラ
賑やかな通りは避けた万歩計

島根県 小林延子

哲学が好きでひとには嫌われる
おこるよりだまってる妻がなおこわい
恋をした日から誤算が始まった

尼崎市 湊修水

京に病み武庫の桜夢にみる
句碑前に花をつけたか花水木
病院の花見今日だけですよ缶ビール

八尾市 平川幸枝

寄せ集め切手が並ぶ娘の手紙
好奇心 心の傷に触れたがる
道たずね迷うて蝶に似た気分

和歌山市 堀畑靖子

事務的な返事ポストに入れた悔い
もう一度座りなおしてみる迷い
戻り寒呼びつけられて叱られる

貝塚市 池田寿美子

転職に急流きびし權さばき
わたしだけ気ままにあける小引出し
ランドセルに刻まれた傷大切に

東京都 山口新子

次発までの五分を垣間読む柳誌
飛行雲西へにしへと思慕の糸
雪解けはいつ来る春の回送車

兵庫縣 森 脇 和 子

一服へ届いた柳誌に友の声
五分五分の勝負味方へ息を呑む
似たような昔ばなしで老いを知る

京都市 小 林 英 子

人目ばかり気にしてシャボン玉消える
蒼い炎燃やして透けている命
怒つてると一目で判る女文字

今治市 村 上 久 美 子

はすかいいに見れば世間はみな喜劇
正直な人で直球ばかり投げ
腹立てた時母さんはよく動く

大阪市 勢 理 客 トミ子

メモ帳が放せぬ春の物忘れ
複雑な思い夫の杖を買う
政治家の常識越えた隠し金

岡山市 中 嶋 千 恵 子

裏話知ってる背へ風の私語
表裏つづり合せてああ夫婦
生きるとはこんな日もある仲間割れ

出雲市 園 山 かおる

見くびっているらし戦争の裏表
子煩悩だけでは子等にみくびられ
雨だれが一途に石を掘る力

鳥取県 奥 谷 彩 子

里の野辺春がぼこぼこ湧いてくる
千手観音縫るどの手も温かい
人間不信かごめかごめの輪で溶ける

兵庫縣 倉 垣 恵 美

置換えてみると慣れとは恐いもの
あの人はええ人やった虞美人草
手毬うた十から弾んでいったきり

高槻市 守 先 伸 子

職退きし夫と夕日を見るゆとり
花愛でるみんなまああるい顔をして
菜の花に埋もれて黄色い夢を見る

静岡市 片 平 静 代

良縁と他人が決めるお節介
うたた寝を覗く窓辺の昼の月
週休二日 月給取りはいい身分

高知市 桑 名 智 加 子

単身の電話楽しい酒らしい
ツーカーの仲には愛が足りません
帰省の子台風のよう舞い戻り

熊本縣 高 野 宵 草

無花果へほんのり甘き亡母の顔
証明の手続き役場はもう土曜
水をやるだけなのに鉢咲いてくれ

岡山県 土居 ひでの

還暦の駅鈍行に乗りかえる

北風に小走りだった母の下駄

お陰様などと娘の嫁ぐ宵

岡山県 大石 あすなろ

屋台までポケットベルが追っかける

幸せらしい短いけれど娘の便り

美辞ひとつ玄関先で言えました

神戸市 木村 貴代子

旅帰りいつもの町が新しい

ばったりと出会う会いたくない人と

茶柱が立ったと入試へ送り出す

寝屋川市 宮崎 菜月

おお見事千原^{ちばら}桜に紫桜

出発はゾロ目時間のゾロ目席

愛郷の地名に牛の首馬の首

熊本市 遠山 夏生

三分咲きもう手折りたい人がいる

神様に仏様にも桜上げ

老いぬれば口癖になるお念仏

佐賀市 古川 かずのり

袴を脱ぐと構図が描けてくる

CMに乗るとカタログ肩を張る

駅長の帽子に時刻が詰めてある

兵庫県 酒井 靖子

ときどきは覗いて見たい新世帯

思い出の峠に残る案内図

はころびが縫えず本音をさらけ出す

富山市 鍋谷 富士子

盲導犬の目と出合う交差点

子と同じ高さで話す若い母

捨てられた目覚し真面目に動いてる

寝屋川市 瀧本 八十八

子をおもう胸打つ母の仮名の文

あの人が着ると流行さまになる

散る花の余韻なつかし片思い

鹿児島県 大山 舞鳥影

人生の青写真まで親まかせ

汚れた手政治改革こねまわす

日の丸も桜も利用されやすい

広島市 中村 要

心にもない挨拶にいたみいり

削っても削っても芯のない男

気の合った靴で稼いだ棒グラフ

相生市 中塚 礎石

新聞で顔かくしてる仕掛人

店屋物そこそこにして愛に飢え

変化球それで縁切り寺へ飛び

静岡市 中西 雅

あてのない旅を夢見る時刻表

古い辞書赤線しのぶ亡夫の汗

花冷えに戸まどう冬着のあとしまつ

和歌山市 田 中 み ね

さて用事しようとすれば電話ベル

とっておきの笑顔で臨むデートの日

嘘八百ばれてもまるで他人事

鳥取県 伊 吹 富 恵

天下御免の覗き見なんて興味ない

お陽さまと話が弾む野良仕事

澄んだ目に私の野心崩される

鳥取県 山 本 正 光

カンボジアへ命捧げた若い鳩

オイ飯と言える家内がいとおいしい

着ぶくれた話やっぱりボロ着てた

綾部市 藤 田 芳 郎

理想には遠い男が優しすぎ

鉄砲玉に言うことだけは言っている

絶景を聞いている高所恐怖症

東大阪府 指 宿 千 枝 子

はいはいと明治の母に逆らわず

敵もなし味方もなしで哲学者

時たまに飲めば薬もよく効いて

大阪市 川 原 章 久

相生橋待っても来ない四月馬鹿

空港に春の空から降りたりエ

単身赴任まるでみの虫ワンルーム

川西市 田 中 喜 俊

いい友と一服の茶で長話

夜桜にカイロ持参で行きました

一人でも大声あげれる甲子園

和歌山県 吉 田 武 治

八分目で止めて余生にゆとり出来

一言の重さに夜がねつかれず

風みどり白い帽子の似合う妻

新潟県 高 野 不 二

駅弁で旅を楽しむ一日目

建前で防ぐつもりがつい本音

寝て起きて年金の来る有難さ

枚方市 森 本 節 子

菜の花のつづく風景鈍行の旅

つくばいに身だしなみよく落椿(法然院にて)

芽吹きそめた糺(アザミ)の森の息づかい

寝屋川市 井 上 す み れ

川柳塔巻頭言から先ず学び

うれしいことあつて字が大きくなる

財布より大事な鍵が入っている

寢屋川市 後 藤 黎之助

熟年のパワーは一杯飲んでから

ひとまり大きくなった孫の靴

祈っても何か不安な夕茜

寢屋川市 土 井 英 明

六法を開いています怖い顔

問われても答えられない家の良さ

お許しにそろそろ歩く長廊下

寢屋川市 北 岡 波留吉

旅の目玉に消えるチンチン電車入れ

病床へ孫が嬉しい千羽鶴

人柄が良いので狭くなる客間

和歌山市 森 茜

母の手をはるかに越えた燕尾服

いもぼうを出るといつせいの花吹雪

下着売場で出会いたこ焼き食べに行く

和歌山市 山 口 三千子

見送ったようにわたしをのんでくる

この齡で今更別の道行けず

小旅行誘う相手が見当らず

藤井寺市 楠 昭 子

幸せの価値を変えると愚痴が止み

つまらない自慢こんなにゴミが出たことを

ピチピチのジーパン若さが見えている

高槻市 執行 稲 子

ダイエツト中ためらいながら蟹を食う

スキー帽 電話の声もよく滑る

両替機までも振り回された偽の札

吹田市 馬 渕 光 子

東の間にヒョイとパー出すもみじの葉

おかげさまこの一言で話が和む

転職に自分の老後計ってる

鳥取県 権 代 康 女

むだ話向う三軒仲が好い

さよならと言えば涙があふれ出る

安心をしてから急に腹がへり

鳥取県 小 西 五十鈴

流し雛罪も不幸も着せられる

花言葉一つが散って独り言

ボランテアに出掛け楽しさ噛みしめる

芦屋市 根 来 敬

食べ歩く事には飽かぬのに困る

粉飾の上手な方が多すぎる

泥かぶるつもりの朝が晴れている

唐津市 福 島 紀 一

古店ののれんが揺れる三代目

隠しても顔に出ている好い話

屋台の灯味と心で売っている

岡山県 山磨行子

梅の香に誘われ歩く夫婦づれ
花落ちる音に不吉な予感する
それぞれの夢がふくらむランドセル

静岡県 小木久子

通じ合う心 言葉は不要です
追うなんてヤボはしないと強気見せ
寒さまだ引きずっている彼岸入り

静岡県 三浦つね

美しく老いたい夢を追いつづけ
肩の凝る人と別れた謝恩会
銀行の隣に住んで貧乏す

東大阪市 安永暁子

午前様母の手紙も効き目ない
星空の点と線での夢の国
どうでつかまあまだんな言う愛想

兵庫県 北川とみ子

遠ざかる足音さよならがまだ言えず
おみくじは大吉だった風の神
市場かご年金らしい幸を入れ

明石市 小川酔月

居酒屋の酒で天下をとっている
孫たちにリンゴの唄を聞かせてる
スーパ―の米をかついで街に行く

奈良市 米田芳子

旧姓の響きうれしいクラス会 小学校クラス会 三句
かくしゃくと恩師は喜寿をひっさげて
ここち良き疲れて帰るクラス会

島根県 三代朝子

野も山もみどりが招く行楽日
患者より先に掛け軸見るお医者
追想のひとつとき外は雨の音

岡山県 牧野秀香

使うほど役立つ人の知恵と愛
出て見れば春は私を包んでる
ご婚儀に備えテレビを買い替える

大阪市 尾崎黄紅

井の中の蛙は金を貯めている
相討ちにする相談の決を採り
根くされに似て甘い水やりすぎた

豊中市 田中道胤

寝過して手櫛水髪朝抜きで
バイオリズム変えてあなたに会いに行く
金屏風背にして今宵娘が嫁ぐ

尼崎市 向井末貞一

親切も誤解受けては軋みだし
晩に聞く鶏鳴の懐かしさ
啓蟄に皆浮かれだし花が咲く

吹田市 西岡 豊

止まり木でママの笑顔の味を添え
目立ちやのピエロも齢か息切れる
自分史の最後の花は舞扇

福岡県 本田 忠 男

役得はりボンを付けることくらい
土地売って税金払う遺産分け
発言は酒の力を借りている

大阪市 今 西 静 子

通勤の頃なつかしいラッシュアワー
白いチューリップが覗いてるしゃべりたい
巣箱のぞけば雛がいる温い部屋

今治市 渡 邊 伊津志

プライドが傷つけられている我慢
明日の海信じて今日は網を干す
石投げて波紋の深さ考える

島根県 菅 田 かつ子

子育てを任せてもらい目がまわり
すやすやと跡取り背中で寝てしま
いおしゃべりなあひると話すねこやなぎ

羽曳野市 徳 山 みつこ

春うららコーヒーカップ動き出す
知ってるが何事もない母の顔

本あけるまでは知らずに済んだこと

羽曳野市 酒 井 一 壺

河川敷子供の声のみよくきこえ
再会を願って記念切手はる
金ばかり食う虫だけ自分の子

岡山県 富 坂 志 重

味を小皿にうらから過疎のおつき合い
ボンボリが付いて開花をせかせられ
後方からつかれを笑う声がする

香川県 田 中 スミエ

洗いざらい話のできる友がいる
落書をする鉛筆をけずっとく
ほころびからついもれただけ何億円

鳥取市 近 藤 秋 星

桜はどうだったと父は家で飲み
いい話寝たはずの父起きて来る
あの男とは別れたらしい髪を切り

宇部市 中 村 三 良

あらぬ噂が引きずり回す風の街
安楽椅子で揺れているのは影法師
風は気まぐれ昨日の嘘を道連れに

十和田市 阿 部 喜久江

似顔絵に陰膳供え無事祈る
返品はおことわりだと嫁がせる
衣替え古希の心が弾んでる

弘前市 岡 本 花 匠
子をみんな育てた母は趣味に生き

墨壺の真つ正直を買う大工
野仏の笑顔が絶えぬ花吹雪

香川県 田 中 ふ み
好い天気何処か行きたい顔洗う

ハネムーン学割で行く結婚式
健康を守る減量すぐ忘れ

静岡県 増 田 扶 美
水透けて鮎の泳ぎに声走る

幸せは旅で出会った人の情
辞書まめに引いて明日へ背を伸ばす

広島県 森 川 拔 智
つぎつぎと料理出されて二万円

頭からビール俺なら口へ入れ
アツと言うまに大学だ餓鬼大将

枚方市 濱 田 良 知
適量を百薬と決めひとり酒

不況風留年したくなってくる
息抜きに来いよと花が呼んでいる

熊本県 増 田 一 乗
むこ殿が定年校長の職を引く

春風に胸ふくらませバイク飛ぶ
他人の金ひがな数えて肩が凝り

青森県 荒 川 つ る
七色に咲いては消えるシャボン玉

コップ割るだけでよかった痴話ゲンカ
熱帯魚もの言いたげな泡の中

島根県 大 坂 花 子
グイヤ改正新駅名が無人駅

花見酒から少し胃袋すねてくる
時々帰って来ます孫の嫁

兵庫県 奥 野 テ ル
宅配に都度を託して母の四季

ねぎらいの一言胸に灯をともし
忘れたい遠い記憶にある名前

米子市 小 塩 智 加 恵
三十九息子も中堅役の椅子

ちゅうハイで目じりが下がる顔が好き
無口でも話聞こえる距離にいる

和歌山市 池 永 正 雄
軍艦もボートも舟に变りない

働いてゆとり程ではない遊び
良妻が居って悪女に惹かれてる

豊中市 み き わ き み
繕いもせぬ気か嫁の荷ミシンなし

役得を拡大解釈して議員
好々爺あれが曾ての鬼軍曹

海口市 谷口義男

横暴を許してしまう多数決

割切ってしまう此の世楽になる

運命に素直に生きて来た焦り

吹田市 岩鼻啓三

岩波と聞いて貰うと決めた本

ファッションに選んだ本で通勤車

コンサート見てきたという会話する

静岡市 大村正雄

瘦我慢軽いと言って持ってやり

不景気をだしに吞んでる花見酒

口止めの話とつくに知っている

天理市 飯田昇

泣き笑いのドラマを喋る回り椅子

言いすぎた心が揺れる帰り道

おだてには乗らぬ男の肚の底

唐津市 入江喜久亭

朧夜の恋路に影が付きまとい

バーゲンの期間店員笑顔みせ

お別れが言えずしかと手を握る

松江市 安食友子

ご破算で始めるとする眉間じわ

受験の子キャッシュカードとジーパンで

駄菓子屋のおばちゃんくじにすががない

松江市 浦辺静江

寒返り白いマスクが目立ち出し

知らぬ振り上手になった年でしょう

おばあちゃん頼りにされて肩が凝り

高槻市 小林紀美子

いきのいい鯛の目玉に吸い込まれ

親というつい立てはずされすきま風

JR お守り札を持って乗る

泉南市 坂根流水

頂点に立つと孤独のすき間かせ

信ずれば欠陥車輛に夢うつつ

気を抜いたあの一球で運きまり

寝屋川市 前たもつ

孫の菓子鳩にも分けて花見かな

東京も蟻はやっぱり急ぎ足

婚約の日から男もおしゃれする

兵庫県 西井つや子

コンパクト開き達者をとりもどす

仕事より休む時間の多い日日

老い先の短い虹をまだ捨てぬ

寝屋川市 太田とし子

男性化粧品ちよつと威張っている売場

きれいとはこんなに不自由尾長鶏

さりげなく焼餅おいて先に寝る

島根県 武 島 ちよえ
私まだ重宝がられて生きてます
微熱だと夫は事もなげに言う

大阪市 大 河 未佐子
箱庭のような花壇に蝶の客

封筒がはがきになって消えた恋

香川県

辻 上 よしみ

流されてどうなる当ての無い旅路
洗ってもなかなか落ちぬ垢もあり

岡山県

森 下 正 子

屋台の灯積る話に花が咲き
水ぬるむ春へ浮足立って居る

寝屋川市

籠 島 恵 子

生き方も少し変った登山靴
何かあるいちいち文句いつてくる

出雲市

西 尾 和 子

黒田節習う口もと様になり
父が逝き強気の老母も細くなり

松江市

佐野 木 み え

陽だまりに余生を楽しむ老夫婦
自分史を書こうと机に向かったが

島根県

松 本 聖 子

古里の匂懐かしローカル線
難聴に話の腰を折られたり

島根県 児 玉 幸 子
土筆摘む手に一ぱいの陽を受けて
シャボン玉孫と飛ばして春休み

米子市

鹿 島 松 子

この歳で危ない方へまだ曲る
風なくて桜は散った私に

鳥取県

橋 本 孝 由

肩幅の広さ父似で物申す
梨贈り宅配便でリング着く

唐津市

山 門 幸 夫

春が来た普賢岳にも薄緑
編隊の先頭切るはお父さん

唐津市

岩 崎 實

飄々と吹かれて風のように老い
農協の倉庫が鳩のすむところ

十和田市

小笠原 敏 夫

水仙も冷たい風で身を閉じる
人事異動何時かは春がと夢抱き

静岡市

宇佐美 寿 美

亡父の辞書辛抱の文字春を待つ
言い訳が下手で本心見透かされ

岡山県

江 口 有一朗

勤行のさなか不埒なことと思う
えらそうに言った私が呆け始め

姫路市 福島 姫女
気に入らぬ見舞客へは寝たふりし
好敵手と呑めば口数多くなる

兵庫県 中野 とよ子

若かった翔んでおくのを忘れてた
こだわりがあつて腹から笑えない

和歌山市 木村 親路

死後叙勲誰が知らせに行くのかな
足音も試行錯誤の響きする

箕面市 木村 天弘

本心を探る妙薬酒がある
交際費飲んでは蝶の機嫌とる

池田市 水木 博男

札束に物を言わせた白昼夢
思うこと全部言うのが玉に疵

羽曳野市 山本 たけし

あんな誰 老母に聞かれて出る涙
春闘に糞虫軽く風に舞う

大阪市 中井 正秀

困ります叱られますと貰つとく
作句にも妻の助言をいれてみる

大阪市 中橋 恵美子

皆急に黙って蟹をせせりだす
切る分を念を押されるズボン丈

泉佐野市 内田 倫子
何もかもひっくり返して孫帰る
制服に素肌が匂う女学生

唐津市 浜本 治幸

断つた後から未練が出て困る
プライドが高価な方を買う羽目に

唐津市 野田 旭恒

年毎に減る戦友の嗚呼無情（招魂祭にて）
亡母の手垢汚れし千人針

唐津市 山口 ふさ子

窓近く餌ついばみに来る平和
知らん顔すれど故郷手招きす

岡山县 伏見 すみれ

歓迎会こんどの校長手ごわそう
逢う事がこんなに私を力づけ

岡山县 杉本 伊久栄

辞書引いて句を練る母のびん白し
夕食のメニューに迷う市場かこ

姫路市 丸尾 はる子

妻よりも女でいたい紅を掃く
温もりを受け六年の証書抱く（老大卒業）

東大阪市 松山 隆

グラビアがみな美しくしてしまふ
捨て難い家紋の絆追ってくる

岸和田市 藪野 けい子

サインして割り勘で払う女連れ

鳥取市 谷口 百合子

倉庫に暖冬が残す毛皮コート

開くまで花の赤さが気にかかる
手作りの船で気楽な旅に出る

大阪市 小糸 昭子

鳥取県 今本 早苗

父白寿良い事だけを置いて逝き

肩こりをほぐしてくれる母の声
正直に見てる我が子に教えられ

ボス猫がゆったり窓を通り抜け

大阪市 出山 美津枝

鳥取市 植田 一京

納采の儀にお天気も晴れ渡る

子供より親が不安の入園式

大阪市 平井 露芳

和歌山市 山田 博章

水族館 魚は人間見てくらし

潮干狩獲物は撒かれた奴ばかり

羽曳野市 福田 悦子

和歌山県 藤井 春子

ピカピカの靴に初心がまだ少し

野球場あるから電車とまる駅

米子市 木村 春枝

富田林市 山原 昭水

ペテランはスパイス効いた味を持つ

旅衣みどりに染まり帰郷する

鳥取県 美浦 美代子

静岡市 青柳 金吾

縁談に子のラブレターを見せられる

一票に反省してる雑魚である

鳥取県 山内 芳江

神戸市 岩田 信義

話しても返事をしない写真抱く

横道にそれた話に花が咲き

従順な靴の踵に打った鋌
丸の数ほどの吐息であきらめる

檀原市 西本保夫

町会の役員だから怒れない

言い分へここで引きたくなくなる一線

和歌山市 榎原公子

定年後輝きだしたのは夫

嫁さんも呑気家風に輪をかける

和歌山県 上岡正直

花もよしされど飲む酒なおよしと

外は春使える小銭胸に入れ

米子市 服部朗子

幸せな児の作文に父母を見る

小さくなる老母に面会手を握る

兵庫県 玉田三重

澄みきった水面に空が落ちている

かくしたい笑みが浮かんでもならん

鳥取県 中西智恵子

満開へ母の匂が満ちてくる

年々にヒールの低い靴選び

島根県 今川三津江

年女張切り風邪を二度もひき

友がきて痛い話ばかりで去んでもた

広島市 元林光子

目度さを桜湯に秘め親心

キッチンの釘煮の香り春を告げ

吹田市 吉川涉

亡父匂う古机そつとそのままに

重症の見舞戸口で声ひそめ

藤井寺市 川端たかし

双方のメンツで出来た妥協案

面倒を見てくれた分お香典

藤井寺市 田中孝子

愛^なしみはセピアに滲む亡夫の影

味噌汁に春を刻んでうす緑

寝屋川市 坂上高栄

幕下も谷町しっかりかかえ込み

病院で何時もの顔に会うて来る

寝屋川市 豊福路子

来世も亡夫と渡れる虹のはし

お浄土の夫はこんなにすばらしい

大阪市 清水絹子

貸金庫の鍵が重たい夫の留守

散歩道近道すれば花の下

姫路市 服部一典

明日からは出直すと言う日記帳

役員会家族一同で済む会社

和歌山県 村中悦男

笑わせている中孫に笑わされ

はめられて妻の目さらに細くなり

和歌山市 森 口 恵 子

一息に水飲みこんで返事待つ
時々は耳に栓して生きている

鳥取市 田 賀 のりゆき

夢を追ひ賽の河原に小石積む
干大根元は色白美肌です

鳥取県 橋 谷 静 江

電話口親子の声をまちがえる
妻の留守強がりいっても三日まで

池田市 木 村 一 笛

別嬪やな見れば見る程ええ女子
思いやりだけが生き甲斐老夫婦

大阪府 乾 哲 静

老いらくの恋まで生んだ日向ぼこ
覚悟して嫁いだ先の好い姑

泉佐野市 大 工 静 子

スキヤキに霜をかぶった水菜の味
買物し気を付けてネは背がさく

唐津市 木 内 可 祝^(ミチ子改め)

印籠の葵の紋に顔効かせ
芽を出すも木の葉散らすも春の風

島根県 岩 田 三 和

二千年つづく牛飼い笹食わす
ごゆっくり北海道はまだつぼみ

島根県 木 村 まさ子

出発が出来ず足踏みばかりする
休日が済んで疲れがどっと出る

唐津市 江 川 青 琴

どたん場でさすがに夫禁酒する
気配りが足りず好意が仇となり

香川県 山 地 マツエ

どん底で秤に掛けている情け
ホツホツと桜咲く音風が待つ

鳥取県 丸 山 希久代

郷里の桃でデザート色どられ
子供等を叱った後で鏡見る

島根県 森 山 修 光

過疎の地も夫婦元気で苦にならず
過疎過疎と言えば言うほど過疎となる

鳥取県 谷 口 侑 里

大男の父骨箱で窮屈そっく
うそ八百並べへそくり捲きあげる

米子市 池 尾 保 子

箸にも棒にもかからぬ姉一人いる
へそくりがたまり銀行さんへ行く

◆ジュニアの部 香川県(小5) 田 中 なみ子

学校は私の一番好きな場所
幼い日の思い出こもる学生服

路郎賞

候補作品中間発表

川柳塔賞

平成五年一月号～四月号

路郎賞候補作品

阿萬萬的

自己主張しないやさしい子が増える

人並みの幸せ夫婦の海苔茶漬
三枚目演じて本心のぞかせず
人間になろうなろうと数珠を持つ
尊厳死の形で松が立ち枯れる
ある喜劇ひとりよがりかけつまずき
安平次弘道

レディーファースト女は先に嘘をつく

謎かけて来るから話噛み合わず
猿股に流行があるあほらしき
薬害がもぐら叩きのように出る
振り切った尻尾の跡がむず痒い
肝心なところでエンストおこす脳
絞くなる耳にも温み失わぬ

黒川紫香

自己主張しないやさしい子が増える

受付にゆとりをくれる花がある
やっと逢えたのに知らん振りしてしまふ
糞虫の話まである母の文
試着した下着を戻すのも勇氣
驚が見えて窓があげられぬ
ひよつとこがチューインガムを噛んでいる

グラタン熱さ女を思い出す
小細工が自分の首を締めていく
逢えそつな気がして駅へきてしまひ

ひざ枕 妻は太めの方が良い
八合目あたりの恋が面白い
式場へ入ると似合うモーニング

他人様の濡れ衣を着て風邪を引く

川島颯云児

良い人だと誰に聞いても言うている

丸山よし津
老いぬれば鬼が島でも日向ぼこ
石倉美佐子

西田 柳宏子

飽食の街でカラスと猫肥る
愛情で今が盛りの花を剪る
くつさめをしたのはたしか貧乏神
カンナくず炎となれば手におえず
森下 愛論
牛尾 緑良
渡辺菩句

縄の端握り合ってる生きている
信じてもないお守りはなせない
まだ白い頁があつて負けられぬ
葉芽花芽あつい言葉を抱いて冬
ひざ枕 妻は太目の方がよい
いつまでも妻が黒子で居てくれる
親の歳忘れたふりの親思い
家計簿をつける赤字と言つために
悪人になろうと今朝も靴を履く
つまずいた石を生涯温めたい
親父と二人男同士の話する

高橋千万子
小野 克枝
石垣花子
神夏磯典子
林 荒介
新 正子
村田善保
堀江 芳子
江口 度
山田 高夫
野坂 なみ
矢野 佳雲

野村 太茂津

退学の危機を救つた平手打ち
これでいいともこれからだとも思ふ
飛べそうて跳べない老いの水たまり
奥田みつ子

てのひらの記憶誰にも負けまいぞ
川島颯云児
堀江正朗



やさしさが過ぎて花が枯れました 細川稚代
適当に曲って屏風立っている 木村 明人
黄泉のみにこーヒー店もあるだろう

横糸をしめてゆるめて妥協せず 西山 幸
JISマークついたお方でつまらない

うわさでは蓼喰う虫になっている 西出 楓楽

気が付くと亡母とおんなじ独り言 小池しげお

樹の傍にいたいと思う掌のぬくみ 門谷たず子
振り向くと寝たきりの祖母手を合わせ 松原寿子

すらすらと君は日本語しゃべれるか 江口 度
高須賀金太

橋 高 薫 風

充電の大きな軒かいている 土橋はるお
ポケットにみかんを入れて下戸中座

水墨に浮かび上がった白椿 高橋千万里
酉の年サンズイ偏も要りますな 安藤寿美子

付けた名と大分違った目鼻立ち 岸野あやめ
生命ある音がわたしを母にする 上田 俊路

恋終るりんごに菌型つけたまま 大角 幸代
骨壺のままだは土に還れない 木本 朱夏

ブラットホームさみしい魚の顔ばかり 林 荒介
佐治千加子

父はいつも尻尾洗ってから帰る 江原とみお
シクラメン家族の顔で除夜の鐘 山崎 君子
糖尿が出て乾杯音頭とる 小森 正晴
来た道を帰ってきたか紙おしめ 乾 隆風
泣き顔になってもえくぼ二つある

川柳塔賞候補作品

高 杉 鬼 遊

伊賀九谷備前清水萩で呑む 山原 昭水
遊ぶ子に終点のない縄電車 安永 暁子
コマーシャルにまた乗りました買いました 亀井 円女

飲み候酔って候戯れ候 西岡 豊
おとなりの犬にもやっとな顔が売れ

補聴器をつけると何でもない話 井崎ミサ子
お互いに冬が越せたね路の臺 桜井 莊次

反対をしつつ手伝う子の荷物 宇野 照代
快気内祝一件落着十二月 尾宮 弘治

笑ったら損する顔もいる役所 清水 絹子
五十六 女 捨てたり拾ったり 遠山 夏生

骨壺に入るくらいに嘘にする 榎原 公子
ライバルが投げた浮輪にうろたえる 藤田 芳郎

急がねば心変わりをするノラで 古谷ひろ子
永田 暁風

夕やけ小やけ子供はみんな塾へ行く

守先 伸子

宮 口 笛 生

余生とはコース外れてみるもよし 宇野照代
元旦の計大胆に書いておく 流 奈美子
無駄な空間等はなかった子沢山 大川 幸子
それなりに映る鏡へ舞ってみる 森脇 和子

出発はおぼろ月夜と決めている 山口 新子
心もち浅めに守る二度の職 原 章峰
あせるまい一刻待てば潮満ちる 白石サタ子

慢心も妬みも知らぬ丸い鼻 秦 正子
口笛を吹いて小鳥の森へ行く 土橋 睦子

いい人と思った日から愛という 森田 文
週休二日妻の運河で漂いぬ 大峠 可動

ある決意 女が髪を切りに行く 山本 すみ
冗談だと思ひ直して米を研ぐ 古谷ひろ子

好物へ幸せの箸ボンと割る 森安夢之助
子育ても終えてパートへ若返る 的場十四郎

玉 置 重 人

いくばくを生きるに仮面はもういらぬ

苛立ちは空白のない予定表 森脇 和子
老人が老人を押す車椅子 堀畑 靖子

人並みという線引きがむつかしい 山田 博章
トゲのある花はきれいに咲きたがる 芦田絢子

しあわせな音だけ聴いていたい耳 高島 五月
杉山精子

マンガ読む机にしては立派すぎ 伏見すみれ

靴の紐しっかり結ぶ二度の職 坂上 高栄

にげ道があれば優しくなれそうで 山本義子

骨壺に入るくらいに嘘にする 藤田 芳郎

お金では時どきいじめに逢っている

木村 春枝

十字架の下で人事を組み替える 鶴久百万両

両方はだめと神様おっしゃった 岡本 道子

叱ってる父の過去にも同じ傷 高野 宵草

下心あるらし同居すると言ふ 柏本 靖子

小出 智子

余生とはコース外れてみるもよし 宇野照代

継がれきた民話のしみる吊し鍋 海老池 洋

小説のように二人の窓明り 黒田 緑

どんな絵を描こう余白がまだ少し

岩崎みさ江

ニッキ水売るおばちゃんに陽があたる

小林 延子

幸せを逃がしてならぬ障子張る 渡邊伊津志

支持率は年玉にある孫の顔 越智 青園

煩惱や鍵束へなお鈴つけて 永田 暁風

新しい暦へ夢を書き入れる 沢田 きん

ホームドラマいつも御飯を食べている 黒田 能子

野良猫にいちべつされる裏通り 山本 すみ

まだ望みあるのか医者に叱られる 吉田武治

自転車孫追う先に夕日落つ 横田 放人

借金をローンと呼んで気が軽し 内田 倫子

お寺さんが足を崩してくださらぬ 原 章峰

板尾 岳人

最後の柿がボトリと落ちた日から冬

高田美代子

姫鏡 森の深さをまだ知らぬ

流 奈美子

すらすらと言えば疵つく余り風

池 森子

二の足を踏んだ男の無精ひげ

桜井 莊次

歳月は人が数えて譜をつけて

大峠 可動

狂想曲遠くで聞いている冬野

八木 芳水

針箱に仕舞い忘れたおとこ文

島 ひかる

ある決意 女が髪を切りに行く

山本 すみ

極彩色に生きたし春の水鏡

辻 翠子

父の峰越えた風なら討たれよう

藤田 芳郎

人文字の中で人間信じよう

朝倉 大柏

向い風破れ傘にも意地がある

森安夢之助

人間が厭て一日海を見る

岩本美智子

苛立ちを隠して鶴を折っている

長浜 澄子

風吹けば風 雨降れば雨まかせ

大西 文次

川柳塔社常任理事会 (5月1日)

▽中野樗子・古市三千代さんの同人推薦承認

▽『川柳塔』800号記念川柳大会 (平成6

年1月16日)の会場について協議

▽記念川柳大会に先立って全国誌上川柳大会

を行い、800号に発表することを決定

▽白鳥町における栗・薫風句碑建立除幕式・

記念川柳大会について諷云児氏から報告

西尾 栗 橘高薫風 句碑建立

西尾栗主幹・橘高薫風理事長の句碑が

香川県大川郡白鳥町に建設されることに

なり、8月21日午後2時半から白鳥中央

公園と白鳥温泉で除幕式を挙行、同5時

から祝賀宴、翌日、左記のとおり記念句

会を開催いたします。

〈記念句会〉

とき 8月22日 (日) 午前9時から

ところ 白鳥町立白鳥公民館

兼題と選者 (各題2句)

「川」

田中 子開選

「松」

松村 迷観子選

「浜」

黒川 紫香選

賞 各題天・地・人に呈賞

会費 1500円 (昼食・発表誌呈)

主催 川柳塔社

川柳塔おっぱい吟社

水煙抄

秀句鑑賞

—5月号から

林野甦光

愛がこぼれて風に揺れてる耳飾り

池森子

愛しい人への思慕の表現が耳飾りが揺れるで必然的に美しく纏まり、いい句になった。

そうだそうだと影が大きく合点する

流奈美子

親しい友と噂話でもしているのだろうか。合点する影が大きく答えて楽しい雰囲気か醸し出され、「そうだそうだ」が心地よく響く。つくないの悔いをさくらす鉄の窓

的場十四郎

何の粉飾もなくじーんと人の心を刺す。冷たい鉄窓で犯した罪の迷いを覚まし、真理を会得させる。暗い世相を突いた句だが、この句は何かを訴えているかにも見える。せめてもの笑顔で風を除けている

辻翠子

これはうまい。ライバルか誰か嫌な人が近

づいて来た。顔をそむけると角が立つ。咄嗟の笑顔で軽く難をやり過ぐすの叙法は見事。

ステーキの薄さ言うまい我が穢き

越智青園

そうですね私と一緒にです。何か寂しい気もしないでもないが、折角の妻の愛情の料理、笑顔で頂きましょう。一本付いていると天国。見せ場などあつては困る消防車

大山舞鳥影

恰好いいなど見とれては困りますよ。消防手は必死です。荒れ狂う火の粉と戦いながら。しかし境遇はどうあれ、ユーモア的に表現された適確なる描写に成功している。

銀でよいテープを切った子に拍手

吉永伊三郎

子への愛情が溢れている。懸命に走ったその努力をほめてやる。てのひらで育てた子でも親に背いててこずらせる子も多い中で親はこの子を信頼している姿が表われている。

検温のテーマソングで朝が来る

木下道子

病院によっては朝入院患者に音楽を掛け、検温の時を知らせる所がある。折角の眠気を覚まされて不平の患者もいるだろうが、この句は楽しそう。「朝が来る」がよく効いて爽やかだ。この調子だと退院も間近でしょう。

補聴器がなくても判るいい話

小林英子

耳は勝手なもので自分に嫌な事や都合の悪い話は聞こえぬものらしいが、反面、都合のいい儲け話などは適確に聞こえるから不思議。漠然と聴いて知識を棒に振り

永倉柳華

大学教授の講演がある。兎に角いい話だろうと参加したものの何だかよく解らぬ。よそ事を考えている間に講演は終った。ごく普通の着想だが、漠然と聴いての叙法はうまい。頼り合う夫婦に小さいかくしごと

古川かずのり

愛情に育まれた仲のいい夫婦でも、人言えないかくしごとの一つや二つはあるのが普通。それが日常茶飯事か、もっと深刻な事柄かは別問題として、この句には頼り合う円満なる夫婦像が浮かんで来る。

ねぎらいが誤解を生んでからの乱

榎原公子

ねぎらいの言葉がどうして誤解を生んだのかよく解らないが、人によって特に機嫌の悪い日や虫の居所が悪い時がある。社会を諷刺した作者の心が伝わって来る感じ。毛皮着たロシアの不況ピンと来ぬ

馬淵光子

銀河系

河内天笑選

青森市 工藤 甲吉

来年の話を鬼にほめられる
能面のようでは美人とは言えず
誤字脱字ばかりを狙う赤いペン

富田林市 藤田 泰子

五分五分という責任で会っている
戻り寒 私の恋も返り咲き
泥沼を抜け出して来た蓮の花

米子市 林 荒介

途中下車ここにも乱の跡がある
遠花火ちちの夜景を駆ける馬
雷が落ちてひとときの静謐

藤井寺市 高田 美代子

隙間風大事なものを吹きとばす
ジャンケンに負けて焼芋買いに出る
猫好きの友がだんだん猫に似る

倉敷市 田辺 灸六

どの花も笑ってくれる春ですね
働いた証 神経痛が出る
ほろほろになって都会を捨てました

岡山県 小林 妻子

都合など聞かぬ悪友から電話
均等法男の風化はじまりぬ
模索する盃ばかり傾けて

香川県 山地 マツエ

口紅はうす目に恋はゆつくりと
肩の荷をおろしてからの転びぐせ

鳥取県 江原 とみお

夜ざくから無事に帰ったことがない
雪洞にスナックの名がかいてある

西宮市 西口 いわゑ

独立をした子がいやに偉く見え
春風とゆつくりめくる新刊書

静岡市 小木 久子

リズム少し変えてみようか春だから
前置きが長い 断わるつもりだな

岸和田市 三輪 通彦

花見時野暮なマスクの花粉症
天下りされて変った社の序列

広島市 中村 要

夜遊びは言えない過労症候群
力瘤だけでは建たぬマイホーム

鳥取県 土橋 はるお

椿の色がボトルに挿してから変わり
脱衣場の鏡がニヤリ笑ったな

枚方市 海老池 洋

お日様がのぼる味方の顔をして
命名に迷い姓名学に凝り

米子市 澤田 千春

かけひきの裏で人形あやつられ
旅最中縄なうことを忘れまい

藤井寺市 川端 たかし

俺に目と歩く自由をくれた犬
耳栓を七十五日して暮らす

茨城市 堀 良江

胸のうち見抜かれそうで目を伏せる
味方から先ず牽制をしてかかり

唐津市 浜本 治幸

忘れっぽくなったが古希の坂のぼる
悪友の誘いすんなり受け入れる

吹田市 山本 希久子

神様へ幸せですと行いく
シンブルが一番春のニユールック

鳥取県 土橋 螢

魂の音がするまで月を見る
あなたの好きな色男とは誰だ

兵庫県 遠山 可住

不景気な風へ地球もほっとする
鉛筆が削れぬままに父となり

和歌山市 福本 英子

親離れまだ出来かねる五月病
兄嫁を見て磨りガラスの向う

栗面市 岩津 ようじ

久しぶりKOシーン見た余韻
わが運命をひん曲げた元上司逝く

西宮市 奥田 みつ子

再会の友は今でもお茶目さん

家中をまんまと嵌めた四月馬鹿

香川県 川崎 ひかり

学ぶこと一杯老母の知恵袋

奥様とセールスマンが呼んでくれ

大阪府 板東 倫子

株動くまたなまぐさくなるだろう

豆腐さえあれば文句を言わぬ酒

岡山県 矢内 寿恵子

野心満々男が炎える胸のバラ

血と汗で敷いたレールが錆びてきた

海南市 三宅 保州

押し売りのように薬をくれる医者

金があるだけの男はこわくない

豊中市 安藤 寿美子

おふくろがツボを押すからとび上がる

エプロンの似合う男が増えている

大阪府 渡部 さと美

やけ食いの出来るお腹で立ち直り

大阪府 本間 満津子

札幌の引力 てっぺんから墜ちる

米子市 金山 夕子

くだらない絵を真剣に描いている

米子市 八木 千代

花いちもんめ一人残して陽が翳る

兵庫県 倉垣 恵美

このチャンスとにかく歩きだすことに

岸和田市 清野 こう

背のびした拍子にぼろり歯が落ちた

和歌山県 藤井 春子

美しく咲いてなやみの中にいる

堺市 高橋 千万里

往復ハガキに大きな夢をかけている

黒石市 相馬 一花

スタミナがあるから嘘がまだつける

鳥取市 大坪 天涯

転がるに手ごうな坂が前にある

寝屋川市 前 たもつ

ブライドが邪魔して神を愛せない

寝屋川市 堀江 光子

道理だが君の話に情がない

宇部市 中村 三良

惚けたふりが好きでとうとう本惚けに

綾部市 藤田 芳郎

ピカピカに磨いた靴で娘を盗りに

大阪市 中川 楓

腹の立つ事は一日置いてから

鳥取市 春木 圭一郎

新人に初心にかえるコツ貰う

鳥取市 前田 一枝

脱いだとしてこんな体は絵にならぬ

米子市 光井 玲子

少しでもピント外れて憎めない

守口市 結城 君子

トイレだけお借りするのに自動ドア

鳥取市 武田 帆雀

脱皮して蝶が熟女になって舞う

鳥取県 西川 和子

花群れのお伽の国へさそわれる

倉吉市 野中 御前

幕が開き七十歳のおてもやん

米子市 石垣 花子

罪深い言葉と知らず口に出す

大阪府 榎本 路児

ユトリロの絵に見つめられてる情事

鳥取市 田賀のりゆき

大方の子想裏切り出世する

有田市 松井 かなめ

脱税の話うんざり桜見る

大阪市 神夏磯 典子

先輩を追いつく時の鬼の面

鳥取県 新家 完司

ほめてもらえる結婚式と死んだ時

米子市 林 瑞枝

ジュンブライドの一人が乗ったほうき星

香川県 池内 かおり

番組に合わせてぬるい湯に入る

大阪府 尾崎 黄紅

再生紙ですと断り要るものか

和歌山市 細川 稚代

こだわりはよそう真ッ赤な夕焼けだ

尼崎市 春城 武庫坊

原色をうまく着こなしよく喋る

和歌山市

宮口 克子

大切な現場の意見踏み潰し

倉吉市

野口 節子

若い若いと影に暗示をかけている

倉吉市

奥谷 弘朗

人ひとり救う見上げた嘘をつく

米子市

木村 春枝

一期一会 花見のうたげ盛り上がる

岸和田市

田中文 時

円高の波 孫請けが先ず被り

和歌山市

田中 みね

会えば愚痴ほかに言うことおまへんか

倉吉市

最上 和枝

主婦の手が安い卵にのびてゆく

鳥取県

石谷 美恵子

素晴らしい方の意外な私生活

今治市

渡邊 伊津志

出どころを見届けたくてついて行く

西条市

片上 明水

嫌われる癖を易者はほめてくれ

今治市

矢野 佳雲

公社への義理でタバコを吸うてます

和歌山市

山田 高夫

清貧を鼻にかけてる甲斐性なし

和歌山市

青枝 鉄治

献金が賭金に化けていた誤算

倉吉市

米田 幸子

神技が男と女産み分ける

鳥取市

西村 黙光

庭の木の巣箱へ小鳥来てくれる

和歌山市

堀畑 靖子

反射鏡君のハートにあててみる

和歌山市

村中 悦男

試着室妻がなかなか出て来ない

兵庫県

奥野 テル

うれしい日の日記は音をたてて閉じ

出雲市

板垣 夢醉

式もなし旅行もなしで来た夫婦

大阪府

津守 柳伸

借金は魔除け彼除け病除け

吹田市

西岡 豊

マイク手に単細胞が気張ってる

大阪府

藤田 頂留子

すべり込みセーフにホッとする司会

弘前市

真喜内 實

桜前線奥羽線から鈍行で

岸和田市

島崎 富志子

目や耳がうとくなくても母は母

倉吉市

淡路 ゆり子

石投げて川の深さを確かめる

川西市

松本 ただし

政治家も鍛えにやならぬ心技体

唐津市

久保 正敏

公開の資産を越える保釈金

大阪府

亀井 円女

パティページをしんみりと聴く雨の夜

十和田市

斉藤 島

善玉にも鬼が一匹住んでいた

和歌山市

山口 三千子

壺坂寺歯車合わせぬ妻を連れ

鳥取市

岩原 喬水

一合は医者が許してくれました

静岡市

青柳 金吾

五十回忌仏の知らぬ顔もあり

寝屋川市

後藤 黎之助

みそ汁の味も薄めの二人旅

吹田市

栗谷 春子

かこいしてその上鍵をかけて住み

岡山県

江口 有一朗

山頂の靈氣に命透き通り

香川県

新川 マサエ

人の波働き蜂が渦を巻く

大阪府

中西 兼治郎

叱られたように我が子を叱ってる

西宮市

亀岡 哲子

仏様に花を絶やさぬ花づくり

米子市

中井 ゆき

痛めつけて蘇れとはなあ地球

鳥取市

谷口 百合子

絵本よりビデオ買つてという子供

福岡県

本田 忠男

パソコンに筆のこころを加えたい

唐津市

野田 旭恒

前世はどうあろうとも我が道を

岡山県 土居 ひでの
持ち駒の一つがこけて皆狂い

奈良市 米田 恭昌
精進あげ小皿たたいとは行かず

富士宮市 渥美 弧秀
饒舌を止める夕焼け雲の富士

唐津市 山門 幸夫
放たれた矢鴨よ弾丸に当たるなよ

出雲市 竹治 ちかし
幸せな動物無人島に住み

松原市 小池 しげお
缶ビール飲ませただけで来た地酒

八尾市 山下 美津留
空港でまごまごしてる旅艸

和歌山市 玉置 当代
萎縮した頭に春の風を入れ

島根県 木村 まさ子
いやだなあ並んだレジの無愛想

大阪市 松尾 柳右子
子と同じ高さで遊ぶ友達者

和歌山市 内芝 登志代
娘の服をもらって少し派手にする

鳥取県 さえき やえ
じつとがまん おかげで花が咲きました

岸和田市 古野 ひで
握手したぬくもり今も手に残り

大阪市 井上 白峰
テフテフもドゼウも居てた古日記

宝塚市 丸山 よし津
パチンコ屋やけに明るい不況風

唐津市 山口 ふさ子
若さと美失うまいと励む日々

羽曳野市 芦田 絢子
均等法ペアのエプロン買ってくる

熊本県 遠山 夏生
内定の取消しが来て花狂う

和歌山県 杉山 精子
弱点は突かぬ男の自尊心

唐津市 仁部 四郎
ぐらついた自信素顔がこぼれ出す

東大阪市 今岡 貞人
坂いくつ越えて男の顔になる

岡山県 富坂 志重
強がり過ぎると友の数が減る

今治市 渡辺 南奉
砂時計破目はずしたい春うらら

寝屋川市 坂上 高栄
快眠の枕にひびく我が鼓動

旭川市 朝倉 大柏
円満になって名前も忘れられ

唐津市 浜本 義美
老醜の顔若返るみかん風呂

弘前市 肥後 和香子
訳ありの女をつくるホテルバー

唐津市 木内 可祝
残された命に夢を賭けて生き

大阪市 今西 静子
愛のはじまり貴方の好きなものが好き

米子市 小西 雄々
雅子さんの好きな色ならみんな好き

広島県 田村 新造
白秋のふるさとで乗るどんこ舟

唐津市 浜本 ちよ
今日もまた老いの喜劇をくり返す

広島市 流 奈美子
申告の初日スターが競い合い

今治市 月原 宵明
わたくしの花見おかきとワンカップ

岡山市 井上 柳五郎
祝日がふえても国旗忘れられ

羽曳野市 福田 悦子
トレードが吉と出ましたタイガース

和歌山市 岩本 美智子
桜花爛漫 納采の儀のお振袖

大阪府 榎山 隆
時どきは狸寝入りの薄目あけ

岡山市 松本 元江
花冷えに桜は散らぬ意地を見せ

米子市 新 正子
初恋が自転車に乗りやって来る

大阪市 大福 留吉
厚着して夜桜を見る共稼ぎ

阪南市 深日 白光子
接戦の九回コーヒ冷めたまま

尚香のむ

小出智子選

世の事はしきたり通り致しおり
母になった娘と深い話する

役にたつ内はみんなが手をたたく
インスタントの方が美味しいなどと言う

不況にも響かぬかまど据えている

また父の轍にはまる土ふまず

深刻な話は花が散ってから

忘れて困り忘れようとなお困り

一事が万事それも絆の掛け違い

ハードルの高さを常に言いきかす

机上には昨日と明日が横んであり

家の灯に絶えて久しい子守歌

早寝早起き猫も健康管理する

ぬかるみで見た夕焼けは忘れない

春愁や恋の毒消しいらんかね

君が代をあつからんと聞いている

生きてゆく猫まで声も使い分け

笑われていてもまっすぐ歩きます

スケジュールみどりの風を笑わせて

吹田市 栗谷 春子
和歌山市 森 茜

米子市 茂理 高代

大阪市 西出 楓楽

米子市 寺沢みどり

名古屋 藤井 高子

八尾市 宮西 弥生

寝屋川市 井上すみれ

和歌山市 宮口 克子

藤井寺市 高田美代子

和歌山市 西山 幸

西宮市 奥田みつ子

米子市 政岡日枝子

堺市 桜沢あかり

今治市 野村 京子

和歌山市 古久保和子

岡山県 富坂 志重

兵庫県 中野とよ子

貝塚市 池田寿美子

身勝手なひとり住いの電話だな

青写真また引き直し引き直し

生活の知恵を持ち寄る吹き溜り

散り始む素顔の恥を恥として

やっかいなものよ女に春のうつ

産声にメリーゴーランド回り出す

振りむけば日向日陰を通り抜け

桜散るよろめくほどの激しさに

百花繚乱桜にまざる花はなし

一歩出て二歩下がること多くなる

一プラス一が二だったのはきのう

実直な父からの血を持て余す

幸せなことに毎日日曜日

シーソーの上がりつばなしの日が続く

微熱まだとれず遠くで電話鳴る

尻尾だけわざと隠した挑戦状

結論は出たと対岸には言おう

こんには赤ちゃん新芽そつと触れ

磨き込む鏡に明日の空模様

子育ての鎖が重い日もあった

伴せに気付かぬ莫迦をまた演じ

まだ姉が打てば響いてくれている

どちら様もお留守花の日曜日

いつまでも母のパワーを信じきり

さびしさは春を忘れた足のうら

尼崎 春城 年代

鳥取 奥谷 彩子

兵庫 森脇 和子

大阪 北川 弘子

和歌山 木本 朱夏

芦屋 黒田 能子

米子 石垣 花子

寝屋川 堀江 光子

大阪 渡部さと美

大阪 板東 倫子

米子 新 正子

鳥取 羽津川公乃

富田 藤田 泰子

堺 神原 文

島根 松本 文子

伊丹 前田しゅう子

和歌山 田中 輝子

大阪 本間満津子

和歌山 桜井 千秀

和歌山 堀畑 靖子

米子 林 瑞枝

米子 光井 玲子

西宮 西口いわゑ

寝屋川 平松かすみ

大阪 上江洲勝子

諸々のドラマを残してさくら散る
 むすび草嫁に行くのは何時のこと
 何時の間にか嘘が上手になっている
 古い絵の中にわたしが住んでいる
 看病の合間を桜勇気づけ
 レモンティー肩の力を抜いている
 引き寄せるものがあり石ひとつ拾う
 室内の花は無風にいらだつて
 荷車の詩が落ちてる坂の道
 心とは別な言葉を選ぶあせり
 うれしくて踏みはずしたる向う脛
 父母の坂一つ越し二つ越し
 親はなれ子離れ四月の風の音
 沈丁の香りを残し家移る
 鴉にはカラスの事情街に住む
 公園の百羽の鳩の百のかお
 春雨に濡れて記憶がよみがえる
 マスカット一粒だって意地がある
 成り行きに任せるだけの枯れ落葉
 焦るまい老いねば咲かぬ花もあり
 プライドが老いの素肌を輝かせ
 また人が好きになるまで戸は開けぬ
 生と死の狭間にありて食うまし
 あんなこんなの昔の夢を編み直す
 鐘が鳴る人は仏心とり戻す

八尾市	高橋	夕花
出雲市	石倉英佐子	
堺市	小西	小雪
富田林市	片岡智恵子	
松江市	松浦登志子	
大阪市	稲本	凡子
倉吉市	淡路ゆり子	
和歌山市	榎原	公子
大阪市	日阪	秋子
堺市	高橋	千万子
姫路市	福島	姫女
寝屋川市	坂上	高栄
岡山県	山本	玉恵
茨木市	堀	良江
鳥取市	植田	一京
堺市	近藤	豊子
出雲市	園山	多賀子
豊中市	辻川	慶子
大阪市	津守	柳伸
寝屋川市	宮崎	菜月
和歌山市	内芝登志代	
米子市	金山	夕子
岩沼市	福士	トキ
大阪市	鈴木	節子
唐津市	浜本	ちよ

手落ちなく旅の支度をして迷う
 見る角度変えて子供と向い合い
 山ほどの思いを持って嫁迎え
 少しずつわかりはじめた海のいろ
 ナツメロを唄うと風邪が軽くなる
 使い古しの鍋には亡母の顔がある
 少し色付けて眺める癖がある
 ロングミニ拘わるほどのことでない
 助手席に座ってからの風当たり
 減量に挑んで小皺増えただけ
 だまし舟にすぐ乗りたがるお人好し
 胸の内たまに覗いて欲しいもの
 スマートになれよと初夏の風が吹く

ゴシックの一句目―何がどうあれ、私はこうして生きていま
 すと言いつつ隙がない。人生経験そしてお人柄がこの句によ
 く表現されている。正攻法の句の力を見せて頂いた。二句目―
 母親になって始めて母の気持が理解出来るようになる。娘をも
 った幸をつくづくと感じられたことであろう。三句目―「手を
 たたく」は如何様にもとれるが、笛吹けば踊ってもやろうにの
 心が窺えて、作者の存在がある。四句目―主婦にとって喜んで
 よいのか悲しんでよいのか。ありきたりなことを少し角度を変
 えてみるだけで個性をもつ。五句目―土間にどっかと据えられ
 た大きなかまどを思い出す。何事が起きようともビックともしな
 い頼り甲斐のあるかまどに納得させられる。

和歌山市 松崎 幸子
 松江市 佐野木みえ
 兵庫県 北川とみ子
 島根県 小林 延子
 寝屋川市 柴田英壬子
 鳥取県 小西五十鈴
 鳥取市 西原 艶子
 和歌山県 小倉 アサ
 和歌山市 玉置 当代
 八尾市 秦 正子
 大阪府 亀井 円女
 香川県 辻上よしみ
 鳥取県 権代 康女

秘 境

小玉満江選



霧雨の秘境に詩人ひとそと付ち
開発に秘境の風が哭いている
ご先祖をみな落人にする秘境
桃の咲く秘境の里はタムの底
日本にも秘境はあったアイヌ村
一生を秘境で終る花もある
秘境に行けば戦死の兄に会えるかも
二度三度道に迷って着く秘境
蛇も蝶も秘境のおきて知っている
秘境地でのびのび遊ぶ大蜥蜴
少年の胸に秘境の二つ三つ
み仏の占した途に行く秘境
腐臭芬芬秘境に住んでみたくなり
兵卒の骨を秘境は覚えてる
象亀の歳は問うまいガラバゴス
稗搦きの唄が聞こえてくる秘境
すかずかとテレビ秘境に入り込む
秘境ではきつと命が洗われる
落ちこぼれ人生秘境の花を摘む
山の名をいくつも持っている秘境
フルムーン手足をのばす秘境の湯
秘境から一滴の水河となる

愛論 多雲 佳雲 高夫 ちよ 京子 恭昌 明水 雄々 康子 ちかし 三重 枯梢 四郎 正敏 新造 露児 美智子 きみえ しげお 静子 富喜子

秘境から湧き出る水は妙薬だ
伴せな頃を秘境として残す
ほんとうの秘境は地図に載ってない
法螺の音が秘境にひびく行者道
修験者と出合った秘境の滝の音
亀の背で海の秘境を見た太郎
炭焼いて人間嫌いが住む秘境
猿もきて浸る秘境の露天風呂
落人の秘境をつなぐかずら橋
手漉紙買って秘境の五平餅
肩寄せて生きる秘境の民が好き
雪五尺秘境に父と母が住む
半世紀屍草むすニューギニア
秘境から涼しい霧が流れてくる
つきつきと秘境を消して行くテレビ

技智 文州 保美 勝一 時弘 俊子 通彦 鉄治 だだし 祥庵 シマ子 あやめ 正坊 武庫坊 智加恵 雀踊子 清芳 水煙 日枝子 浜本久仁於

番組に合わせて仕事かたづけ
番組がまだ終わってない生き残り
番組を見るほど余生ひまがない
孫五つマンガ番組見るおぼえ
番組の中のやらせに目が覚める
番組に遠慮をしないコマーシャル
番組はグルメ旅行と言う平和
番組の中に故郷うつってる
番組はマンガばかりの春休み
CMの長い番組 やけに癪
特別番組とても素敵なおひなさま
番組のタイトルほどでない話題
主婦連が好む番組だけ作る
番組にない人生を歩かされ
プログラムはしい夫婦の余命表
地下足袋の暮し番組要らぬ朝
俗化する番組 一億総白痴
クイズ番組タレント頭脳試される
番組を変えても心飢えている
視聴率上げて番組生き残り
番組にこっそり忍び込むやらせ
大好きな番組なのに人が来る

番 組

江口明光選



慶次 直次 三重 吉太郎 ちかし 勝美 重人 路児 しげお 正雄 新正子 あずき 公弘 ふさ子 荳寿美 だだし 枯梢 希久子 つえ子 新造 章久 倫子

路 集



死ぬまでの僕の番組模索する

妻だから見たい番組あきらめる

スポーツの番組だけは見る新聞

番組のやらせと知らず手を叩き

歌番組孫とわたしにあるギャップ

ニュース速報見たいドラマがカットされ

内の子の出番を探すプロگرام

リモコンにいつも番組牛耳られ

番組の権利は娘 妻の次

番組にない宴会の得意芸

騙されてみようかテレビショッピング

アンコールに答える番組なら見よう

番組は時代劇ですゆずれない

世の移りエイズ番組大手振る

番組の鳥合の衆に俺も居る

住 チャンネルを変えても同じ顔がいる

コマーシャルない番組も肩が凝る

お粗末と見た番組の客の入り

雑字はテレビ番組から貰う

午後三時だけ番組に用がある

人 孫の来る日は番組も総崩れ

地 明日があるから今日の番組ひっこめる

天 教養番組追って余生に彩を塗る

軸 番組をチェックしてから今日を決め

春城武庫坊

日枝子

高夫

宵草

博史

義美

高明

あやめ

明水

正坊

一花

森生

忠男

螢

雄々

鉄治

帆雀

薫

保州

白光子

よし津

可住

高夫

日枝子

天

軸

春城武庫坊

日枝子

高夫

日枝子

養

う

渡部さと美選



敗戦の孤児養ったララ物資

養父母を背負い中国孤児は生き

養父母に無沙汰を詫げる花手桶

美意識を養う雨の日の画廊

水彩画描いて養う老いの日日

リハビリに鋭気養う万歩計

飽食の箸が養う皮下脂肪

路地裏の義理人情に養われ

国のため散った息子に養われ

耐えて行く心養う遍路道

両親を養うよりもベツト飼う

病とも養い合って共に生き

合理化の風が休養とれと言う

休養にならぬ観光スケジュール

冷やでよし英気養う紙コップ

良く光る星に英気を養われ

養蜂家花追い列島長い旅

親よりも養いやすいベツト飼う

真心があれば両親養える

親と子の絆養う語が欠ける

鎖の長さだけの自由で養われ

養った絆解けないように撫る

養育するのが石とは知らぬ真珠貝

養って来たとは知らぬアルミ鍋

個に戻る心養う旅に出る

育てても去る子へ過疎の鯉のぼり

花嫁が来たほど養子さわがれず

花の下 英気養う無礼講

浩然の気を養って山下りる

培養のトマトは知らぬ土の愛

養い親愛の拳で打つことも

女系三代養子を探す鬼がわら

刃こぼれの男養う赤い爪

忍耐の虫を養う宮仕え

養生に帰った里は忙し過ぎ

詩心を養った本を積み上げる

養って大往生をよしとせり

佳

外米でやがて養われるだろう

養父母を他人にしたがるのは他人

税金で養っていた悪い人

生き甲斐は扶養家族に縛られる

養殖の鯛にも固い骨の意地

養って貰う気ないが息子を頼る

妻と子の重さよ靴も擦り切れた

二十年養い親の顔に似る

軸 巣立たせてからを養う古机

樹本路児

久仁於

俊子

正子

富喜子

洋

兼治郎

正坊

有一朗

鉄治

シマ子

正敏

四郎

明水

典子

紀一

はるお

典子

正子

重人

公乃

はる子

久仁於

樹本路児

久仁於

樹本路児

樹本路児

樹本路児

樹本路児

初歩教室

題 — 生きる

吉岡美房

春真つ盛り、桜の満開の中で皆様の投句を拝見しています。花も鳥も山も川もみんなきらきらと輝いているようです。今回の「生きる」という題、季節の関係か本当に生き生きとした句をたくさん頂いたのは幸せでした。

さて、本欄の場合は、いつも作者の句意を出来る限り尊重しながら原句の勢いを殺さないよう心掛けて添削しておりますが、私自身まだまだ勉強中ですので、これで完璧というものではないと心得ております。そのため、一寸着想を変えるとよくなることも含めて、もつとよい句にするための余地があることを申し上げておきます。

それでは、添削句から発表します。

踏まれても強く生きてる第九条 あづま

(九条が気息奄々生き延びる)

振り返れば死線をくぐり抜け生きる 保夫

(戦中派幾度死線越えたやら)

動乱の中生き抜いた父の手記
(動乱の昭和を全部生きた父) 節子

他所にない生きる権利のある世界 美寿子

(難民のキャンプに生きて行く権利)

苦勞して生きた生家が捨てられず 美恵子

(苦勞して生きた時代の村が消え)

百までも生きてその後どう生きる 武春

(どこまでも生きる百歳応援歌)

百歳は百歳を意識して生き たもつ

(百歳を生きて百歳意識する)

瀬戸大橋身軽な技が生きている 直二

(職人の技で生きている瀬戸の橋)

大草原喰いつ喰われつ生きている 幸夫

(生きるため大草原にあるドラマ)

蚊一匹冬眠さめてペランダに 正子

(蚊一匹よくぞこの冬生きて来た)

弱くても蜥蜴生きのふ術を知り 一乗

(生きのびる度に尻尾を切る蜥蜴)

夜店から買って金魚が長く生き 春風

(長生きは夜店で買って来た金魚)

不況にもめげずに生きる土筆の子 幸雄

(不況にもめげず土筆が生きている)

捨て石が見事に生きるプロの腕 絢子

(脇役で見事に生きるプロの腕)

昆虫の生きる故郷過疎進み 方子

(過疎進み蝶もとんぼもよみがえる)

元気かい今年も逢えた戦友の会
(戦友と今年も生きて会えた会) 志華子

望まれて生き方替える娘の決意 君江

(嫁ぐ気になって生き方変えている)

医者通い病氣道楽生かされる 幸枝

(一病が友で氣楽に生きている)

一病を従え今を生きている 静子

(一病と連れ添い今を生かされる)

点滴と酸素に守られ天寿まで ふみ

(点滴と酸素にたより生かされる)

リハビリの散歩に生きるよろこびを ますみ

(生きているよろこび試歩の一步步つ)

透析の身なだめすかせて生きてゆく 幸子

(透析でなだめて生きている命)

生きているうちに見舞いの義理果す 春枝

(生きているうちに見舞い誘われる)

病み上り桜さくらに招かれる 晩子

(全快を待ってたさくら招かれる)

今からは死に甲斐のある生き方を 三重

(生きて来て悔いなき最後飾りたし)

生きたいとすがった友の手の記憶 辰男

(生きたいとすがった友の手の記憶)

生かされて友の訃報が身にしみる ふみ

(生かされて友の訃報が身にしみる)

葬式に生きるに辛い衣の女 きぬ

(美人故生きるに辛い喪の女)

今もなお亡き父胸に生きている 西和子

(胸底に今も生きている父と母)

生きざまが享年よりも永かった 隆

(亡父の齢はるかに生きて追い越せず)

まだ生きている構図はわたし眠らせぬ あき子

(もう少し生きている構図に夢がある)

逆風に挑んで生きた日もあった 栄

(逆風に耐えて女のひとり旅)

生き甲斐の趣味に命をかける日々 樹幸子

(生き甲斐の趣味で若さをとり戻す)

影法師生きている古さを笑うなよ 孝由

(生き方の古さを影は笑わない)

今日も暮れ生きている証の日記書く 方郎

(一日を生きた証の日記書く)

平凡に生きてますよと急ぎ足 黎之助

(平凡に生きて老後が気にかかり)

年の功経験だけを従えて あきら

(経験が一杯生きている年の功)

苦も楽も生きている証が古くなり 忠男

(生きて来た苦勞話が古くなり)

雑草で生きている道あり怖くない りつえ

(雑草に生き抜く道を教えられ)

日がのぼるああ生きていた今日も又 タミ

(生きている感謝へ今朝も陽が昇る)

生きてよし肩に一ひら花が散る とし子

(さくら咲きさくら散る中生かされる)

四世代生きて幸せ今日此処に 秀香

(四世代住む真ん中に生きる幸)

まだまだ生きている積りの靴を買い替える 彩子

(古希でなおまだまだ生きている靴を買う)

生きている生かされていたと今わかり 志重

(生かされていると段々わかる)

子育ての時代を生きている母強し 姫女

(子育てで夢中で生きた日が恋し)

生きている証いい事たまにあり ふさ子

(いい事がきつとあるから生きたる)

七十年生きていまだに悟れない 侑里

(悟れないままで七十年を生きて)

生きていることああ楽しとも苦しとも 高栄

(楽しさと苦しさ半ばして生きる)

飾らずに生きて見せる気楽さよ 君枝

(飾らずに生きて気楽な日々を持つ)

雑草も生きていますと言いたそう はる子

(雑草も生きている主張して萌える)

生き甲斐を見つけた頑張ること覚え よしみ

(生き甲斐を見つけた頑張ることにする)

一切の絆を断って生きて行く 美智子

(色々な絆が断てず生きている)

趣味に生きている余生は楽しまた死ぬぬ 敬

(趣味に生きて余生は楽しまた死ぬぬ)

生き抜いて行けば笑える日もあろう 義男

(笑う日もきつとあるから生きたる)

着想・表現ともに立派な句

生きて来たとおりにチビた父の靴 西和子

生きていてよかった花の下に立つ ひろ子

先生を見る目生きているランドセル みつこ

三面鏡女の意地を秘めて生き 義子

情もろく生きて六十路の初鏡 友照

生き延びて余命の彩を模索する ツネ

点滴に生きている権利を握られる 杏村

シベリアに生きて故山の土を踏み 修光

抑留をよく生き延びたこの五体 金吾

病む友に生きている勇気を教えられ 君枝

赤い羽根胸に傘寿も生きている テル

生きざまを見せて大樹の無言なり ひでの

自分史の続編見たく生きている はる子

手も足も自由に動く生きている 芳郎

生きていて夢も涙もたとある 円女

しがらみに呪文をかけて生きている 樹幸子

生きているのに理屈は要らぬ明日がある 敬

夫婦愛死線を越えてから判り 嘉子

私の句

一合の米さらさらと生かされる

過去未来無限の中の点に生き

◇

題「水着」――6月15日締切(8月号発表)

宛先 〒583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房



原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。二百字詰
原稿用紙に清記をお願いします。編集部

川柳クラブわたの花 片上 英一報

土壇場になると男の子父につく
色褪せた服で味方に馳せ参じ
忠実な味方の犬に餌をやる
味方かと本音洩らせば背を向かれ
玉入れの孫に味方の赤が勝ち
母さんの味方で急に強くなり
弟も味方についた反抗期
終生を味方と信じ合う夫婦
味方だけの暗号ばかりは聞いてない
声色で味方に合図する野鳥
一人暮らしを味方に友と競い合い
味方やと思った人に裏切られ
権力で味方をつくる不法者
味方よと言えど言っほど疑われ
祖父に似る不器用な子に味方する
痴話げんか母の味方は子供達
娘のうしろ孫は味方の合図する

シマ子 美津留 隆 幸枝 春友 曉子 千枝子 君江 道子 俊子 トシエ 泰成 節子 龍 みき子

夫まで美人の嫁の味方する
瀬戸際でお前が味方してくれた
お守りを味方にひとり暮らしなり
いつだっておまえの味方なのですよ
猫の子も通らぬ道に夜泣きそば
青若葉色あざやかに光呼ぶ
世界地図広げて日本指の下
合格を確と見つけて輝く目
夫より友と出かけて輝く目
輝ける未来を願う呱呱の声
合格へ輝く顔がとんでくる
ためるほど金が味方の人嫌い

岩美川柳会

羽津川公乃報

横槍に強い鎧を準備する
期待した人事またまた横すべり
横槍を研いで出番を待っている
横顔に自信溢れた長い首
横顔もそっくり親に生き写し
太陽を全身に浴び横になる
横丁の彼女が浮かぶ雨の夜
温い手がそっと横から触れてくる
横糸に織り込む罪を一つ持つ
金を出す話になると横を向く
横道にそれてやさしい人に会う
ベレー帽を横に被った文化人
婆ちゃんの横で小さい掌を合わす
母さんの横にくつろぐ顔がある
横つ面叩いてくれる父がある

一雄 剛治 花子 英一 初子 弘直 明子 ますみ しのぶ 正子 一風 鬼遊 善幸 單車 帆雀 公乃 芳江 孝由 希久代 睦子 忠良 美恵子 八千代 喜与志 美代子 みさ江 きみ子

旨そうな話が横にきて座る
人間に戻る聖書を横に置く
さびし気な顔で横向く沈丁花

サークル檸檬

小林 一夫報

葉ざくらの静けさ待つ里の人
桜たよりに合わして姉妹京の味
さくら咲き高校野球準決勝
溺れたし花と柳の真ん中に
花の下飾る言葉は色あせる
夕桜亡母の琴の音聞いてます
老いるとも人一倍のさくらなり
朧夜のさくらへ潮は満ちてくる
桜咲く夢のつづきのように咲く
古民家へ都会の靴の新しき
菜の花や古い写真の美しき
いつだれが決めたかサクラ国の花
魂で咲き魂で散るさくら

堺川柳会

河内 月子報

神がつくった運命の川を流される
カードには近寄りにくい歳となり
東大で習う上手な罪つくり
つくりつけの家具が引越したいと言っ
鑑灯すなにか動いたおもちゃ箱
好カードには惜し気無いプレミアム
肩書に寄り添う暗い影がある
雛飾る幸せ春の日の中に
感動の見せ場をつくる失受け鴨

はるお 大漁 螢 雅子 智恵子 慶子 喜美子 あずき みつ子 いわゑ 千代 智子 一夫 正坊 薫風 寿美 与呂志 妻子 美子 度 二南 金三郎 一三三 狸村

三代の榮華見てきた内裏離
梅月夜一会を胸にポストまで
バスデーカードが届き思い出す

真砂
春蘭
小雪

トネルの底は未だに見ていない
ステキをカードで奢る心地良き
励ましのつくり話が生きてくる

楓
文

生も死も郵便局を経由する
離あられわけてくれたの男の子
つくり話を孫がまじめに追っかける

半銭
凡子

欲がらみ暗いふかみに落とされる
カード破産家族会議を開かねば
どつどつとも見破る妻にシャッポぬぐ

東雲
千乃子

自由時間が好きで私をつくります
クレジットカードに潜む地獄絵図
長居して困らせている老いのうつ

美代子
満州

仮名文字の母の便りを温く抱く
開けゴマ呪文がわりのカード鍵
知らぬ間にカードがひとり歩きする

志華子
菜々

自愛ばかり浮彫りにする闇の中
選別をされる運命の離解る
梅も桃も咲いた暗がり抜け出そう

庸佑
天笑

久世川柳クラブ

志重
甫正

お月さま地球の喧嘩見てなげく
停年のない節くれた妻の指
味噌汁に露のとう浮き春匂う

山人
伊久栄

明い灯忍の一字が秘めてあり
さなやかな夜明けを祈る子の受験
船頭の声いろいろに子は迷い

美恵子

志重
甫正

久世川柳クラブ

志重
甫正

お月さま地球の喧嘩見てなげく
停年のない節くれた妻の指
味噌汁に露のとう浮き春匂う

山人
伊久栄

明い灯忍の一字が秘めてあり
さなやかな夜明けを祈る子の受験
船頭の声いろいろに子は迷い

美恵子

デパートの流行色につい迷い
単身か家かと迷う日もあった
檜山の径に迷うている羊

秀香
吟平
恒心

久し振り返えば互いに白と禿
逢う事がこんなに私を力づけ
日溜まりの土筆の土手で亡母と逢う

半仙
すみれ

大安吉日鯛と海老とが膳で逢い
寒空になまけるのにも金がいり

邦人
賛平

川柳塔おつばこ吟社 木村 明人報

迷観子
白柳子

三十年無事故の証 返納します
古傷をソツと包んでくれた亡母
生かさされて一期一会の花にあり

ひかり
明人

露天風呂混浴かいなど旅に出る
握手した温もり胸に握りしめ
忘れたい過去が私をはなさない

ふみ
マツエ

気の早い蝶啓蟄を待たず舞い
テレビ見ているやら眠っているのやら
温もりが残る握手の寒い駅

放任
かおり

穏やかにたてダンダン老けてくる
春風に親の膝けり娘は果立つ
孫達へ心に残る贈り物

吟笑
くみ子

母の手の温み忘れず手に残り
不況風酒もタバコも飛んでゆく
奈生ちゃんが話しかけそな顔してる

いさむ
よしみ

早春諸ウグイスの声まだまだだ
母という優しいヒビキにほろほろと
言うとおりの風になるらし風の音

チカエ
迷貫

大学を出ても常識今一つ

伽名子
文仙

大学を出ても常識今一つ

伽名子
文仙

大学を出ても常識今一つ

伽名子
文仙

気温変化春の温もりピンク色

東大阪川柳会

森下

いつからか雪は詩人を敵にする
胎動を抱きしめ雪の日が暮れる
旅尽きて雪の宿屋の野天風呂

天声人語に水仙が咲いている
土くさい話題に飢えているコラム
反骨が紙面に滲み出るコラム

的を射るコラムに朝の軽い靴
土曜日は妻も一緒にまむし酒
初紋りすめば杜氏の旅支度

托鉢の酒にしみじみ山頭火
結局は話題女に戻る酒

恭昌
章久

猪太郎
太一

湖風
文秋

作二郎
愛論

元紀
美幸

愛論
湖風

文秋
作二郎

美幸
元紀

愛論
湖風

湖風
文秋

作二郎
愛論

元紀
美幸

愛論
湖風

湖風
文秋

作二郎
愛論

元紀
美幸

愛論
湖風

湖風
文秋

作二郎
愛論

元紀
美幸

愛論
湖風

佳句地十選 (5月号から)

黒田真砂

竹割った気性がいつも損をする
外出の時だけ動く腕時計
株は値下り退職金は血のしずく

父の樹の下から強い芽が育つ
妻病んで空白ばかりある日記
車座の外で反旗の風起こす

金屏風裏でうごめく鬼がいる
泣けるだけ泣いて女は強くなる
生きのびて十指に余る恩を受け

野仏のほほえみに修羅遠くする

久美子
三千子

久美子
三千子

久美子
三千子

久美子
三千子

久美子
三千子

久美子
三千子

久美子
三千子

命拾ひ祖母は日参かかさない
寺の庭拾う落ち葉に尼の詩
不景氣な噂を拾う美容院
夢ならば覺めよ亡母の骨拾う
周困氣にしながら拾えば空財布
まっ白な産着に包み呱呱の声
酒池肉林休肝日など考えず

南大阪川柳會

金井

文秋報

笑い袋を常にこころのまん中に
口もとに恋を感じている微笑
生きて行く姿で干される作業服
いっぺん抜いてみたいと思つ日本刀
春色の口もと光る娘たち
内幕を繕う影が瘦せている
人の世の常と悟りを入れてくる
新入社社鑄塑に入れられる
内幕を子供得意氣に喋り
手を抜くこと許さない座りグコ
内幕を聞いて世話好きはとけず
口もとの笑みは化粧の乗り具合
常識の誤差も規則はみとめない
抜くときのとときめき勉強やめられず
体裁を作つてもついで常が出る
当選のダルマ口もとほころびる
ふだん着の折目に入柄うかがわれ
歯をみんな抜かれ言葉が噛み合わぬ
内幕を覗けばよく似た台所
北へ飛ぶ姿で並ぶ渡り鳥

頂留子 喜風 美子 晋吾 柳宏子 孤舟 高尚 楓楽 萬的 雀踊子 智子 直子 寿美 冬葉 悟郎 柳宏子 恒明 千里 柳伸 頂留子 度 文秋 憲太郎 勝美 凡子 秋子 文子

傘寿なお姿くすさぬ舞扇
み仏の姿に和む古都の四季
政界の内幕鼻を突く匂

口もとを引き締め決意漲らす
札束を前に口もとついゆるみ
常着でも昔をしのぶ品の良さ
のしつて内幕さらす離婚劇
内幕を知つて居るから言いにくい
常日頃強氣一つの父に愚痴
内幕は知らぬが花の舞台裏

川柳後楽吟社

從野

健一報

大銀杏昔語りをはじめよう
ふれあいで生きたる弾みがつく余生
感情の激しい僕に丸い月
子や孫を叱るに俺もとばかり
指切りの指を見つめるうつろな目
逆らわず女房ゆつくりネジを捲く
花畑蜜蜂ダンスを踊り出し
胃を取つた事も忘れて花に酔い
少年の素直な心に独楽がまう
船に手を出さぬ誇りで生きている
玄関にメモしてありしバラ一輪
犬さんに引いてもらつて坂登る
美術館ゆつくり見て来た惜春譜
変な癖わが血を受けて育つ子等
半分は権利があると妻の愚痴
満月に生きたる希望の掌を合わせ
父のしわ冬眠はない汗を売る

シメ子 トミ子 公一 庸佑 文江 シマ子 新造 智久 章久 清水 草風 たけ志 拓治 柳五郎 義親 美智子 哲郎 浄美 桃風 道博 邦季 吟平 博友 金吾 佐加恵 玉水 正秀

真面目さが取柄頭を下げる役

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

照路

俵せな今を冷凍庫にしまつ
おばあちゃんと唄うと音程狂いだす
満ちた日は雨音さえも楽しくて
大切に胸にしまった笛の音
音の鳴る方に大きな唄があり
樹の命耳を澄ますと音となる
かすかな音が物議をかます我が家だ
こぼれ種風に送られ根をひろげ
人送る駅のなだれの片想い
彼女の頃から送る癖がつき
届かない母には祈りだけ送る
苛立ちを有めて送る今朝の雪
とてもやさしい音でした母だった
贈り物の中に母さん走り書き
送り仮名スミレの花が咲きだした
母の愛どっさり運ぶ送り状
天国のお花畑に老い送る
送り出す手紙に不安溜め込んで
身を削る思いで送る冬の象
仁王のように送つてくれている
じつくりと花野を歩く足洗う
影法師の足があんがい遅しい

川柳岩出

小倉

アサ報

金びょうぶ裏でささやく金竹小
大安のホームで舵を持つ二人

忠雄 アサ

乗換の駅で迷いの出たおんな

銀河へと夢だく宇宙ステーション

終着駅愛のドラマはなおつづく

ローカルの駅で自慢の田舎そば

よくやった球児迎える小さい駅

母の掌がまぶたに残るくくの橋

紙かぶとを送る絆の子がひとり

発表会せりふ忘れた幼稚園

発表の帰りに予備校申し込む

発表紙手にするまでは落ち着かず

合格の知らせ家族がしゃべりだす

衝撃の発表いのちがまた一つ

総理府の言う豊かさに程遠く

桜散るとウナ電が来る春の鬱

生き抜いた母の髪です風に散る

悩みを散らす酒はひとり飲みでゆく

散るよりも落ちる椿のいさぎよし

野仏の頬をかすめて散る桜

一線を引いて互いに技みがく

一線に並んだ友の息づかい

一線を守って男まだひとり

一線をひいた女が着る鎧

横一線だんだん不安になってくる

一線の上に立ち退きしない家

第一線引いて爪切る余裕でき

城北川柳会

吐田 公一報

狡いこと出来ない人の明るい目
ガリ勉の孫にも来てたチヨコレート

満津子
政子

国公

洋

夕花

春堂

とみを

欣之

作一郎

春子

かつみ

覚然坊

朝子

年人

宏子

三男

一風

勝美

美幸

和子

弘直

正好

雀踊子

頂留子

隆

美津留

デュエットで憂さ晴らしての不況風

早春の陽ざしを受けて小さな芽

世の中の酸いも甘いも古稀の顔

初孫の産声に見た甘い顔

着ぶくれのザボンへ厳し春の雪

嫁からの電話で近所の火事を知り

人相に狡さをカバールされている

相撲出来る体勢いつも保つてく

辛酸をなめた男の肝つ玉

三世代すこやかにして雛飾る

公平な相撲は土俵の中でする

修羅幾つ越えても高い雲の峰

風雪に耐えて春よぶ梅の花

ああ歴史昨日の悪も今日は善

好き嫌い無くしてくれた芋の蔓

春の乱都ホテルのバスタオル

酸い甘い知ってそれから裏も読め

春浅き五百羅漢に母を見る

投げられたタオル男の涙見る

色恋の話補聴器かけながら

混浴へ女の度胸はタオルだけ

澄んだ瞳に映してならぬ世の狡さ

川柳ささやま社

平野百合子報

幸せな友会う度に若返り

会う時の気持ち絵になれ恋をする

相性が良いと思った二、三年

道問えば土地の匂のするお方

痛いことあつさり言つて仲がよい

千世子

行子

秀夫

久留美

佐津乃

ふみ

あい子

典子

倫子

登美子

昭子

白峰

寿美礼

頂留子

春蘭

史風

達子

八重子

柳影

ただし

静子

公一

純子

とよ子

恵美

貞子

つや子

戦没の遺骨迎えた駅枯れる

身を守る口があつさり同意する

春風が案内をする甲子園

あつさり和本音が言える老夫婦

回転の早い頭で赤を着る

ねじ巻いて頭も自由化叫びたい

古里の春へあつさり意地を捨て

しきたりヘジイの頭借りになる

父の背に真直ぐ行けと書いてある

赤頭巾なぜか哀しい稚児地藏

夫婦同伴妻に着て行く服がない

意中の娘案内したいリンゴ村

岸和田川柳会

田中

文時報

忍ぶこと教える母の座り胼胝

昭和一桁忍ぶことだけ教えられ

時の人サラリと書いたサイン慣れ

タレントのサインの色紙飾る宿

頑なに筋をとおして浮き上がる

筋書きの通りにゆかぬ子がひとり

内紛を食いものにする怖い筋

一筋の道を歩いてきたなんて

血筋から言えば相続主張でき

四つに組む趣味に余生が忙しい

忙しさの汗光らせるたこやき屋

忙しいうわさ絡んでいる人事

忙しい素振りが客を逃がさない

忙しい人たまには昼寝する

ゆきお

靖子

とみ子

市三

和子

ヒサ子

富美

文平

芳郎

テル

可住

百合子

文時報

柳宏子

富志子

甘平

さよ子

通彦

ひで

文時

ゲン吉

白光子

浪速子

狸村

翠子

二南

朝一

赤レンガ昔の倉庫博物館

円高で倉庫に つまる輸出品

ヌーボーと倉庫の ようなマンションで

妻の愚痴みかんの筋をとりながら

運河の鉄錆びて倉庫は閉めたまま

川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

札束をつかみ男の樹を枯らす

花冷えに愛の波紋が重くなる

文机に涙の過去が埋めてある

通帳も夫も元気で居て欲しい

花冷えのその真ん中に居て孤独

めでたさの春へ通帳瘦せて行く

父ちゃんの汗が通帳太らせる

机上では楽しいブラン湧いてくる

少年の机に悔いの傷残る

清貧を共に歩んできた机

通帳の歯ざりしり預金目減りする

花冷えの軒で夢見る種袋

週休二日役所の机欠伸する

長命に付き合い切れぬ預金帳

不況風通帳タンスで寝ておれぬ

断崖でつかんだ鬼の手が温い

残高がどんどんふえる夢を見る

面影が僕をつかんで放さない

色褪せた愛の通帳もてあます

絵に描いた餅で終った机上論

飢餓の子がしかとつかんでいる食器

花冷えに姿勢正して酌み交わす

東雲

昭二

勝晴

一の弥

萬的

信秋

寿子

稚代

恵美

千尋子

紀久子

登志代

信子

紀美女

英子

栄美子

裕美

三三代

好笑

三枝子

結実

鬼遊

射月芳

忠

高夫

保州

和成

吊革をつかみ仕事の貌になる

上役の机叩いている覚悟

通帳より金塊うんと積んである

少年の恥じた通いの酒二合

子のために通帳はたく馬鹿になる

本物をつかんだ事に気付かない

川柳塔唐津支部 久保 正敏報

何となく下五が足りぬ酒の味

浮世絵をひらいてみた春の宵

都落ち公達椎葉の秘境入り

走り抜く自信ビストルよく聞え

合鍵をどこか落した夜の不安

おいでおいでと枝垂れ桜が軽く揺れ

あの方にきつと天罰下るだろ

屋外に鉢を移して春うらら

放たれた矢鴨も皆と北帰行

許されて飲む熱燗によく眠り

メニューとも言えぬ手料理老いの膳

忘れっぽくなって古希の坂登る

咲き誇る花の行方の吹き溜り

花咲けば無情の嵐待っている

愛してたと思つて見ている春の雨

ブラボーの声に華やぐフラダンス

人は皆人に逢いたく生きている

はたる川柳同好会 井上 直次報

今年また燕が戻る恩に似て

卒業式わが師の恩は歌うだけ

三男

武雄

豊太

愿

吞天

克子

久仁於

實

朴竜

四郎

旭恒

虹汀

高明

幸夫

タミ

義美

ちよ

治幸

ふさ子

青琴

紀一

喜久亭

正敏

方郎

薫風

その中で恩師の靴が粗末過ぎ

アタ名から面影浮ぶ恩師の名

ロシアとは恩讐の彼方とは行かず

親の思たそがれになり思い出す

恩讐の彼方で青春点滅し

盲導犬ただ一匹の恩で生き

クラス会酒の肴になる恩師

線香のかすかな匂 父母の恩

花巡り一期一会の顔並ぶ

咲き切れれば風の誘いにある桜

花吹雪を院の桜も聞いている

病床に桜の小枝の見舞客

銃口へ背く檻にさくら咲く

妻と娘の何れ劣らぬ梅桜

京都塔の会

松川

杜的報

居るはずの妻が電話に出て来ない

平和の鐘が丘をすっぽり包みこむ

夕映えの丘に埋めてきた手紙

異国の丘で亡兄も見てたろ西雲

丘越えて行った富山の葉売り

辛夷咲く教会までの丘の道

友情を温めている丘の墓地

嫁ぐ日が迫り無口な父の背な

夜明け前途切れ途切れで古時計

本番に弱い受験がもどかしい

ライバルに迫る階段高すぎる

大物の財にマルサの手が迫る

宣司

直次

吉太郎

恭子

眞郎

明光

純次

博史

馬洗

英子

敞子

昭子

しずえ

幸子

一笛

諷云児

武庫坊

薫

キク子

紫香

萬的

芳子

栄

寿人

求芽

百合子

修水

やんわりと相手に迫るイヤリング
風船を信じおじさん雲に消え
一寸気があるので無茶を言うてみる
無茶言うて夫の愛をたしかめる
無茶な値でもったいつける骨董屋
素晴らしい丘で背伸びがしたくなる
うさぎ追いつく過去を知ってる丘も消え
腹探る無茶と見抜いてする腹芸
弟の無茶へ兄貴が叱られる
不夜城の都会に無茶が詰めてある
口が災い一言居士を父に持ち
中座した椅子へ他人が来て座り
花といっぱいお喋りしよう春の旅
地球の上の日本の隅に老いふたり
首曲げたお地蔵様には首曲げて
満開の梅林匂のしない変な夢

川柳塔みちのく

小寺

花菱報

女 英子 正坊 白溪子 福子 真柳 飛鳥 巨詩 しげお だだし 笑女 達子 年代 杜的 水客 一光 五楽庵 實 黙人 花峯 隆樹 ツネ 光子 祥子 雅城 つとむ

タイムレコーダー遅刻の記録ごまかせず
衣替えしばし鏡に問うてみる
糖尿と知らずに蟻が攻めてくる
綻びの出るのがこわい癖がある
甘かった詰めが次点の涙のむ
新年度会社にも欲しい衣替え
満員のバス素通りで乗り遅れ
衣替え慌てる春の寒暖差
片減りの靴は父さんのオリジナル
コーヒーマスターのブラック甘い会話好き
お隣にきた書留を知っている
早春はやませの雪が告げにくる

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

花匠 善匠 一花 正徳 井蛙 堅二 ふじ子 一路 生恵子 和香子 敏夫 紫香 弘治 石舟 定人 幸代 フクヨ 歌子 鹿太 尚利 勇次郎 竹萌 千鳥 功

川柳高知

川竹

松風報

勘定の細かい祖母が小銭溜め
小銭から愛が膨らむ募金箱
平和だな湯舟の父の進軍歌
矢印を進む男はたかが知れ
進歩した医学を笑う菌がいる
良妻も悪女も巧い妻の芸
キラキラと光る瞳にある自信
つい本音出して親友遠ざかり
絵はがきへ短い幸が書いてある
短足は父親ゆずりうらむまい
詫び方の中に人間性がある
嫁が来る村は総出の祝い酒
悠久の家運を配る祝い餅
動く児が静かになれば何かある
元氣よく動いていますハケ月

打吹川柳会

奥谷

弘朗報

快風 佳風 春枝 さち 千恵子 三郎 菊野 京子 圭風 朱坊 幸風 梅朗 野草 勝見 光枝 良二 孝恵 みほの 寿満湖 小生 ひさ子 玲子 玲子 秀峰 信子

信楽の狸と肚をさぐり合ひ
人妻の横がわたしの指定席
ライバルの後ろ姿も悩んでる
はばたきもできぬゲージで鶏を飼う
内緒の話が着ぶくれしてもどる
傷つた兵士の眠る城を掘り
幾山河越えた喜寿のクラス会
神様にもらった命捨てられぬ
鮮やかな女の城はわたまれる
罪抱いて白になれよと雪積もる
梅干しの壺食卓の座が決まり
恵まれてさんげ文字を忘れかけ
親近って実家の道は遠くなり
大学に行つて麻雀つよくなり
一人一人救う見事な嘘をつく

西宮北口川柳会

丸山よし津報

引越しを嫌がる祖父の生返事
引越しに自分の錆は捨てていく
神様が緑を足した絵の具皿
脇役にバセリの緑徹しきる
春のうつ緑の風が肩を押す
断崖に立つとき人が見えてくる
やめなはれ腹を立てたら負けだつせ
立ち話ゆつくりしてと座るポチ
花の下に立つていのちを考へる
巣立つ子へ後ろ姿も見せておく
凝り性が直らず卵立てている
腹の立つ話冷凍庫に仕舞う

とみお
螢

喜与志

邦俊

節子

幸子

明治

喬水

雄々

妻

柳風

仙岳

松盛

八太郎

弘朗

正義子

国子

能子

佳秋

鹿太

キク子

てる

絹子

透太

しげお

武庫坊

御破算にしてなお残る恋の傷
ためし算幸せの数一つ増え
釣銭が足らぬ時だけ申し出る
計算が狂い闇から抜けられぬ
計算が勝つので恋が実らない
計算があふれる春の音符の群れ
あなたらしい計算出来て先に逝き
輪の中の計算上手にみな頼る
引き合われ計算ばかり母の指
打算には遠くひとり夕桜
百叩き途中で数を間違える
計算のない汗光るボランテア
父親は井勘定しかししい
喉元を過ぎたか忘れられている
一枚のはがきと旅をふくらます
学園都市越して来るのを待つ市長
仲直り豆がふくら煮えてくる
無縁幕の前で見つけたつくしんぼ

川柳塔まつえ吟社

恒松

衣裳展選ぶ女の小半日

選ばずに刻印もれをつかまされ
試着室夫の欠伸が通じない

お出掛けの楽しみが増す靴選ぶ
選ばれて勇んでみても猿芝居

選ばれてひと呼吸する自動ドア
表には立たぬ味方に背を押され

兵法どおり味方から先ずだます
骨拾う味方はかりの顔が寄り

町紅報

房子

友子

多賀子

邦代

登志子

米子

静恵

鶴丸

妻子

澄子
哲子
宣子
英子
ひろ子
哲夫
文
富喜子
たず子
みつ子
鬼遊
正坊
紫香
房子
いわゑ
道胤
風云児
萬的
胸どんと叩き味方の証みせ
味方にも本音明かさぬ深い読み
味方顔して真相を聞きたがる
百人の恋には百の物語
だんだんときれいな顔にさせる恋
恋しまししょうかとばからぬ笑い声
返信を信じて花の切手貼る
花の春恋の賛歌のあちこちに
恋人に長い電話をかけている
みぞれ降るまだ遠い花吹雪
フィナーレ檜舞台に花吹雪
いたずらな風に吹雪となる桜
野仏の衣にたまる花吹雪
花吹雪受けて別れの時過ぎる
勇退を惜しむ宴へ花吹雪
お花畑の中に極楽あるという
極楽でバツタリ逢った恋仇
極楽があるから今日が耐えられる
極楽と思えば見えてくる浮世
極楽を夢みるはのはの丸い皺
極楽を少し覗いて峠越す

川柳塔とつとり

武田

スランプへ顔捨ててから立ち直り

お妃決まり日本の顔が一つ増え

老いを尚しくとく生きる顔がある

顔が効く人を主役の座に据える

裏方に徹して悔いのない顔だ
億の金流してみたいワリシンに

帆雀報

多可志

孝由

揚芝

輪多朗

明美

軒太楼
茂美
一葉
ちかし
秀子
早苗
祥庵
清子
雀踊子
静江
長三
桂志
清志
与根一
みえ
太泡
文子
寿美子
芳枝
町紅

退職後流されてみる浮世ゆく
古里の歌が流れる桜土手

流れて行ったシベリアの苦が懐かしい
外に出ず涙を内に流して

浮き沈み流れるような旅である
花びらの流れる川を汚せない

砂丘越えはすむ素足が春を踏む
靴下は素足の文化葬られ

湯上りの素足が燃える雪の宿
憧れも素足で駆けていく渚

素足になり人の情けが透き通る
夕暮れの母に戻って足袋を脱ぐ

女です素足を風にさらさない
芽が出ない私やっぱり蛙の子

井の中の蛙に変わり者がいた
挑戦の形を蛙から学ぶ

河鹿鳴く無名歌人が月を詠む
蛙跳び止めて気楽な途をゆく

やせ蛙手の鳴る方へついでゆく
暖かい地球へ蛙寝ておれず

富柳会

池

森子報

合理化の社は注目の的となる

その後は女の方がよく喋り

クリントンその後日本を何とする

早春の色は何色ピンク色

夫婦喧嘩その後の結果気にかかり

補聴器で梅に驚知りました

注目の桜一輪狂い咲く

行男

一枝

侑里

のりゆき

しげる

一京

喬水

粗粒

俊路

鬼桜

黙光

螢

艶子

友夫

山人

圭一郎

帆雀

公弘

静生

由多香

早春へ一つ入門決意する

注目もあつめにこやか雅子さま

当てたことないがやっぱり夢を買う

早春あの娘だんだん美しい

注目の上司の椅子は堅過ぎる

駆け足で来た早春の花粉症

回り道やっぱり好きな人が居る

春すこし土が動いた気配する

駆け引きが其の後も続く永田町

その後から魔女になつて妻の紅

早春の風に殺気が消えている

やっぱり女曳きするものが多すぎる

倉吉川柳会

渡辺

独歩報

花の下孫が屋台に気をとられ

糸口をつかんでからのものがたり

待ちばうけ花の下から欠伸する

花の下には底なしの沼がある

花の下家族が囲むにぎやめし

招待の返事に弾む妻のペン

この春もいのち頂く花の下

糸口を残して祖母は目をつむる

ひとりの酒万葉の花の下に酌む

一本の糸口からみつく絆

汚染した地球平気で回つて

ひと月も先の旅行に弾む妻

西行と同じ想いの花に佇つ

冗談が糸口となり結ばれた

密談に弾みをつける酒が要る

昭水

(伊) 勇

智久

文次

庄次

透太

美代子

維久子

花梢

美房

森子

康子

秋女

かつみ

とみお

御前

瑞枝

千代

独歩

和枝

ゆり子

秋人

千秋

荒介

螢

喜美子

汚染した川が私の裏にある

お向いさん海はゴミ箱ではないぞ

花見酒また血圧が弾みだす

弾んでる人とそうではない人がいる

糸口が見つかるまでは黙つて

川柳ねやがわ

高田

博泉報

本当はうれしい嘘もあるのです

ぬしのように漬物桶が土間に居る

妻の留守六帖半分あいて

故里のこんな所に造成地

土壇場で妻のパワーを見せられる

一坪の庭をなごます母の鉢

梅が咲き桜はまだかばけが咲き

爪を噛む事を忘れた反抗期

信じてた性善説が揺ぎだす

漬け物がとても美味しい回復期

庭のない私は春の鉢を買い

申告が済めば用ない五つ玉

あり余るパワーがあつて職が無い

糠漬けが決め手になって玉の輿

垣根が一寸のぞいた私生活

頑丈な妻の鎖で今日も無事

漬け物石の丸みは女の優しさだ

ねばり抜くパワー静かにたくわえる

爪を切るとき良心が甦る

信楽の狸踊れぬせまい庭

碁がたきが庭からごめんと日曜日

どんな花咲かせ定年からの庭

正雄

完司

よしえ

加代子

美由紀

欣史子

シマ子

弘直

庸佑

一芳

勇太郎

たもつ

恵子

一鬼

一途

てまり

英明

時弘

波留吉

藍子

速水

良三

勝一

薫風

とし子

頂留子

度

マニキュアの無い母の手の頼もしき
なりふりも構わぬ母に励まされ

虹を見てパウが湧いてきた迷路

私の中のわたしを許せない

なんとかなると言って下さいいさま

久し振りに包丁のいる夕ご飯

知らぬ間に将棋倒しの列の中

のばすだけのばし小指の爪と生き

川柳藤井寺 高田美代子報

いびきまでささやきと聞くハネムーン

二十一世紀ささやく森が消えてゆく

ささやきへポート漕ぐ手が邪魔になる

挫折した友へささやく打開策

うっとり釣竿光る春の川

うっとり東宮御所のお難さま

うっとり見とれて妻に抓られる

うっとり眺めただけの総紋り

閉じてなお源氏絵巻に酔いしれる

いろいろ事情あろうが呑んでゆけ

いろいろなことがありました丸い背な

裏の裏いろいろあつて永田町

いろいろと見ました大きな夢ばかり

余生なおいろいろあつて炎えている

いろいろな蝶がとまつた薬指

いろいろとあつて危険な賭をする

いろいろの欲を十指がみんな持ち

いろいろな音を持つてゐる母の鈴

いろいろと象を触つてきたらしい

前垂れの下からそつと煮豆くれ
春彼岸押されて詣る一心寺

我ながらチャンチャラおかし風邪をひく

額縁の亡妻は老いずに七回忌

肩書に下げる頭と気がつかず

亡父と夢をゆつくり語る彼岸の日

ボクの辞書に出ていなかった「ホメゴロシ」

人情も丸いポストも消えた街

またの日に会える気がするすれ違い

尼崎尾浜川柳会 前田いわお報

恵まれて趣味と友増えボケられぬ

根気よく受験期辞書と徹夜する

寂しさをかくせず話し掛けてくる

良い方へ伸ばして欲しいその根気

登校の前 見せにくるランドセル

ポケットに女のエゴを溜めている

会釈する顔が増えてく万歩計

転がして春を編んでる毛糸玉

根気よく羽根を立ててる雄孔雀

さようならは青信号になってから

言訳はさておき妥協などしない

真っ白な画布へ好みの色を塗る

恋をして好みがかわるハイヒール

よう来たとい句碑が私に笑いかけ

公園の日溜りの前だ笠智衆

アベックも句碑のいたは遠慮する

雪柳あわわ遠い日の画像

花人にそつと句帳をのぞかれる

飛行雲公園の空かけ抜ける
吟行に合せてくれた桜花

川柳大阪 高須賀金太報

義歯にあつ自分好みの鍋料理

首切りと言わずスマート肩たたき

年金をはたいて孫のひな祭り

戦争は知らぬが軍事評論家

一握りの夢は捨てずに持っている

一盛りのリングの自負を買つてくる

公園の桜で辛抱する年金

職安の桜喜ぶ気にさせず

目の高さ変えると子供しやべりだす

守備位置をすこし変えてた野手の勘

青い眼の横綱国技塗り変える

欠勤の電話は風邪の咳も入れ

風邪引きで課長の席が空いている

梅が散る頃にきつちり風邪を引く

流行の風邪にも乗らず莫迦で居る

黙るのが苦痛みたいによしやべる

さりげなく苦勞話を聞かす父

苦の種と仲良しになる歳を生き

苦しみの中から見えてきた灯り

苦い汁飲んで一皮むけました

わかあゆ川柳会 松本はるみ報

躍りたい気持土筆が伸びてきた

春風に手の鳴るほうへ躍り出す

躍っても音がしません猫の足

紫香

いわお

亮太

一歩

徹舟

しげお

我勝

希久志

司

比呂志

鉄心

本蔭棒

柳弘

重人

青道

笑風

洛醉

まつお

美津留

与呂志

雅果

金太

かつ子

聖子

好栄

四捨五入まじめ人間四捨にされ
しりごみがマイク持ったら放さない
娘の電話余韻を胸に抱いて寝る
躍る人傷つく人やさくら咲く
乗り切つてしりがみついたら春でした
見直してやろうよ子にも何かある
テレビショッピング付録が豪華で気に入らぬ
久し振りに躍る心が生きていた
テレビ界それは違つぞ悪ふざけ
さんげ録あれは躍つた足跡か
しりごみの分だけ遅い今の位置
躍らねば堰の高さが越えられぬ

むらくも川柳会

藤井

明朗報

健康を進む科学がおびやかす
盃が過ぎて大言吐いた悔い
大波小波百までくぐり来たいのち
若い日の妻に娘が似る恐さ
盃の底に沈んでいた野心
おめでたい盃だからこぼすまい
ロシアから日本を削る波が寄せ
健康の過信についた赤信号
返盃の底に本音を匂わせる
残花残影涙の本音だつてある
マドロスヘランブの似合う港街
医療費はただで使わぬ保険証
健康だ大きな虹は望まない
よく似てる親は見分けのつく双子
亡母に似た後ろ姿が気にかかる

芳枝 ちよえ 英子 はるみ 民子 歳栄 智重子 鈴江 洞然 博利 清泉 白汀 正朗 芳子 秀子 一葉 義男 代仕男 青湖 きみえ 多賀子 祥庵 房子 清子 嘉寿子 林蔵 仲子

不況浪過疎の町まで容赦なく
健康で鏡に向う朝の顔
ふり向くと波はうしろへ逃げていた
人生の荒浪母の灯が照らす
デパートいく仲良くぬらす赤い傘
健康で踏み出す朝の軽い靴
健康がほしくて減塩がまんする
波風を立てない位置にいる安堵
夢のせて波が運んだ桜貝
健康で社会福祉の庭に生く
一石を投じ津波にする恐さ
童謡の千鳥は泡から生れ出る
健康が溢れて少女花盛り
艶のある話も健康なればこそ
仲良しの子等再会を誓う春

うみなり川柳会

森田

熊生報

久しぶり子育て終えたクラス会
上役が居るとも知らず油売る
植えかえの時期を忘れて枯れかかり
電話だと泣けてくるので手紙書く
届くなら亡妻に手紙を出したいが
久しぶり医師が認めたワンカップ
迂闊には話せないから胃が痛む
いい予感くれるきれいな花切手
靴下の穴に気づいている客間
迂闊にも涙が滲む目を閉じる
母と娘の内緒は長い手紙書く
迂闊にも右脳に錆がついてきた

島子 昭子 延子 美恵女 喜美 鶏生 峰雪 ゆき子 翠晶 定子 れいじ 愛子 朝子 草丘 明朗 佳子 正和 富美湖 みずえ 正光 あづま 芳子 蛙泡 蜚 雅女 とし江

好きな人ベツト句で嘆きわける
迂闊にも手錠のかかる箸を割り
久しぶり本音の涙かします
うっかりのふりで話の角まとも
古里は雪崩の音がする手紙
恋しくて候の文祖母と老い
もつベツト飼わぬ気である植木鉢

岸和田川柳会

田中

文時報

サービスのちりめんじゃこのてんこ盛り
今日の雨天のサービスかもしれぬ
追いかけてサービスすると連れ戻す
長袖がなければ寒い冷房車
サービスのチラシにつられ無駄遣い
家庭サービスする日曜の遊園地
宮沢さんのサービス笑顔だけやった
サービスでくれた薬が役に立ち
サービスを甘くみていた落し穴
カラフルな袈裟は和尚のサービスか
家庭でもセルフサービスして欲しい
魂を揺さぶる亡母の鈴が鳴る
愛着があつて土鈴のみやげ買つ
暗がりて鍵穴さがす鈴の音
小さい鈴淋しい鍵つ子なぐさめる
忌憚なく優しい愛の鈴を振る
来ましたと鈴で知らせる神まいり
せっかくの好球必打未だ出ない
迷惑とせっかくの好意無駄にされ
帰省子に残したメロン腐りかけ

華止 一止 雄人 草人 静生 葉士人 熊生 春香 かりん 朝一 満州 京 通彦 丹吉 さよ子 月子 二南 翠子 けい子 磯子 富志子 真柳 狸村 甚一 昭二 慧梢

はずれたらおどけて風と遊ぼうよ
 賭けに出て胸の鼓動を感じ取る
 彼岸会の席でぱったり合う縁
 花の下帽子で歩く一年生
 耳垢にも右と左の差を見つけ
 柏手はお養錢なく控え目に
 台所春野菜たち舞踊会
 時々は悪女になれる濃いルージュ
 郷土びな独りの部屋にまだ飾り
 スタンプのさくらを押した春の駅
 自画像の老斑消して春を待つ
 ジャンジャン町昔の俺が歩いてる
 恋人の部屋で鳴らしたオルゴール
 おもてなし花が助ける春の客

川柳化粧櫓

植村客遊子報

懷中に辞表持つている強気
 一言が重荷になった夜の長さ
 不器用な亡夫愛してたと言わず逝き
 鉛筆は丸いが悪に立ち向かう
 パフ叩き女自信をとり戻し
 お祝いの催促らしいギフト券
 村の寄付顔役が来てすぐ決まり
 今の子は寒いさむいとコタツ守
 句の味教えてくれる露のとう
 薬局の先生も同じ薬を飲んでる
 全力で貴女守ると言われたい
 出会いこそ奇しき人生石左
 両面が幸せそつに赤つなる

哲子 尚利 行隆 まさお てる 一笛 義子 澄子 正子 石舟 武庫坊 佳秋 紫香 君子 岳詩 朱玉 サワ子 礎石 葉香 三青 悲子 是る女 嘉 美代 早苗 茂章 春蘭

鬼やらい福豆年を食へ切れず
 幻想の世界に渡る雪の朝
 開基敵手頃だと言われ腹を立て
 音立てて走る落ち葉や墓洗う
 一日をやくざ芝居と薬風呂
 スプーン手に話上手を持てあまし

高槻川柳サークル卯の花

川島諷云児報

ためらいの残る重たい靴を履く
 ためらって二の足ばかり踏んでる
 華燭の灯父のためらい痕をみる
 ためらわず課長の畏へ箸を割る
 自分史のところでにありがとう
 冷めた目で自分見ている天邪鬼
 なおらない自分のくせの迷い箸
 自分史に幾度打ったか句読点
 自分への答えを出した春の靴
 影法師自分をすこし疑おう
 逆風をかわしてからが本物だ
 末席の反対論は本物だ
 七転び八起き今度は本物だ
 いじらしい子役の芸に泣きに行く
 ライバルが役者一枚上でした
 花道で役者冥利の芸見せる
 銭湯へどかどかと来る旅役者
 初めから勝負に出ないのが役者
 寝返りを打って役者の顔になる
 死に顔を演じきりたいのも役者
 うす味に慣れて百歳目指します

姫女 はる子 一典 遊峰 治夢 客遊子 英一 瀧小 静江 ベ女 森生 英子 春風 ひかり スミ子 伸幸 佳秋 武庫坊 かおり 庸佑 二南 紫香 しげお 太茂津 薫 稲子

お世辞だと分かっていたけどまだまされる
 トキメキはないがやっぱり髭は剃る
 裏街に見切りをつけた犬と猫
 強いおんなになろううふう風の道
 詩情湧く谷はひとりの旅がよい
 遠ざかる母へ涙が追いかける

豊中もくせい川柳会

田中

正坊報

散り敷いた桜が風と遊んでる
 城のある町からうまい桜餅
 遮断機が上がりときれるもの想い
 秘め事もぼろりと吐かず聞き上手
 細筆を妻は上手に走らせる
 くやしいが上手にだまされた涙
 酒がまわると上手な嘘もすぐばれる
 ホラ貝は吹けぬ社長の一入言
 ご機嫌の悪さ替へ忘知っている
 お彼岸が済んでも風邪を引いている
 バブル消え金の力が目立つ日々
 幕引きの時考えているトッパ
 二番手の足音聞いている夜更け
 ゴールイン トッパ初めて空仰ぐ
 トッパ会谈顔で笑ってさぐり合
 いすげ替えるためにトッパの首がある
 やすらかな夢を見ている北枕
 北の風心変りを責めるのか
 ビルの谷間に北向き地蔵おわす
 杉良の視線わたしにばかり向く
 どんぐりが拍手喝采視線浴び

彰一 明人 節子 恵美子 白漢子 諷云児 正坊 田英子 博史 落児 登代子 一笛 ベ女 武庫坊 明光 白漢子 しげお 吉太郎 石舟 薫 慶子 萬的 正坊 とく子 つえ子 紫香 ただし 悟郎

■各地句会だより

久世川柳クラブ

二 宗 吟 平

久世川柳クラブは、岡山県真庭郡久世町の公民館が昭和五十年から文化活動の一環として開設した「春陽大学」という老人大学の一部門としてスタートしたもので、私がお世話することになってから足かけ十九年にもなり、柳紙（句報）はこの三月で二〇九号まで発行しております。

春陽大学は全員で約三百名ですが、このうち川柳クラブには常に四十名くらいが参加しており、柳紙は毎月八十部ほど発行し、会員以外の方にも配布しています。

定例会は毎月一回、第三水曜日前後に開催し、兼題二題、雑詠三句と勉強吟一句を出題、いずれも無記名とし、私が毎月、異なった番号をつくって各投句者に伝え、作者名は分からないようにしております。雑詠は、川柳塔社参与の藤村メ女さんと私たちのクラブ

の吉田賛平氏の共選で、それぞれ十句を抜いていただいています。

兼題は、クラブの樋口邦人・長尾恒心両氏に選をお願いし、一人一句は抜くこととし、勉強吟は賛平氏に添削指導をお願いし、例会当日は、この勉強吟によって研修し、雑詠の採点と兼題入選句を発表しています。

クラブの行事としては、毎年一回、日帰り研修旅行を実施しております。掲載の写真は弓削町の「川柳の小径」を見学し、長谷川紫光先生のお話を聞いた時のものです。また、別の写真は久世駅が無人駅となったため、岸本水府の句碑を掃除し、しめ縄を張って一同拝礼した時のもので、前列右から三人目が私です。

また、柳紙第五十号を記念し、町のお滝様



路郎句碑前で



水府句碑前で

に川柳額を掲げました。「順番を得心して煙草の輪 半仙」の句をはじめ、四十七名のもです。さらに記念合同句集「輪」を刊行し、四十一名が各十句を掲載しており、

川柳で余生楽しむ輪をひろげ 吟 平
で結んでおります。

このほか、昭和五十九年には町の地域福祉センターに、「手を引いた孫が手を引く交差点 つゆ草」など、総勢六十三名がそれぞれの句を掲出いたしました。私たちのクラブがここまでやって来られたのは、公民館はじめ皆様方の協力があったからだと感謝しております。

路郎先生が沢山の作品の中で、ご自身一番気に入っていると仰言っていた

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

は、昭和4年8月号の掲載であったことは以前にも述べたが(当時は畳一でふと表記)、同じ号に発表の次の句、

何事も忘れようとて蠅たたく

も路郎の心情の深く表出された句と受け取れる。八月十日夕、四宮神社社務所で大正四年の夏、須磨浦海岸で溺死した藤村青明の忌が川柳雑誌神戸支部主催で営まれて、神戸の梶元紋太・鈴木九葉・大山一狂(後の竹二・三条東洋鬼(後の東洋樹)らの顔も揃い、故人を偲んだ。編集後記に、「十日に神戸支部主催で青明忌を修した。例によって多数の参加者があった。私も出かけた。本社からはひろし君が出掛けていた。紋太君が「神戸と青明」という話をしてくれた。自分も「青明の事ども」という話をした。この日に私の近業である「川柳漫談」が世に出た。青明忌に私の著が出るというのも何かの因縁があるよう

な気がした。名古屋へ出張するという山雨楼君が出席していたなどうれしかった。」と路郎は書いている。

ここに出てくる麻生路郎著『川柳漫談』は私の手元にあるが、奥付には昭和四年八月一日発行とあり、発行所は弘文社で定価一円五十銭。週刊朝日や大阪日日新聞に掲載された随筆集で、川柳をふんだんに取り入れたもの。その一章を紹介したい。

指 切

「柳樽」の初篇の中に指切を詠んだ句が三句あるが、三句とも佳い句である。

指の無い尼を笑へば笑ふのみ

というのがその一つである。

戸外はこがらしが吹きすさんでいる。比丘尼と二人火桶を圍んで、いろんな物語に耽っているうちに、ふと尼さんの指が一本短いことを知った。淨い生活、寂しい生活とのみ思っていたこの尼さんの過去にも華やかな夢があったことを知った。彼は微笑をふくんで尼さんの顔を見た。尼さんの頬には常ならぬ紅

がさしのぼった。

けれども尼さんは、その過ぎ去った経緯については談そうとはしないで、眼で寂しく笑ったばかりである。彼の頭には指まで切った心中立したこの美しい尼さんのローマンスが渦を巻いた。吉原を出て尼の生活に入るまでの波瀾重疊は尼さんのみが知る神秘としてのこされるであらう。

ゆびを切るも実は苦肉のはかりごと

指を切るからは九品の浄土まで

が他の二つである。何れも表現の巧みなこと後人の範とするに足るであらう。

遊女を傾城とよんだところから、実は苦肉のはかりごとというような言葉が、ひとしお興味を唆るのであらうと思う。

「妾はあなたより外には決して情人はもたない」と、もたれかかっただけでは男の心をほんとに捉えることが出来ないで、色と欲との二た道を満足させるためには苦肉の策として、指を切ってまで情人への歎心を買うことを諷したのである。勿論そうした遊女のなかには、欲の一ト筋で突きすすんだもの、早く苦界を遁れ出たいための一策として指切を拵んだ遊女もあったであらう。お軽が売られて行くとき、母親が「髪は切っても、必ず指など切ったもんなや。」といましめるのも

勘平という人があったからであらう。

「指を切るからは九品の浄土まで」からは上品な句振りを学ばなければならない。一本切るから九本だというような解釈は狂句的な観方で、この句をそういう目で観ては全く台なしである。

先年、照葉が情人乙宗さんのため指を切つて一躍天下に名妓？としての嬌名をさせたのも、これ等先輩の古智に学んだだけである。この照葉が宗右衛門町に出ていた頃は、遊二郎の養女だった。指を切つてハンカチに包んでいた照葉は、尼になろうともせず、最初の情人とも添わず、一人の男から他の男へ移つて行つた。昨年道頓堀でテルハ酒場（バー）を開いていたが、それも一時の夢にすぎなかった。

こうして昔も今も指を切るが、指を切つて情人に心中立をすることは、いつの頃からにはじまつたものであるのか、今詳しいことを知るよしもないが、徳川時代の産物であることだけはこれ等の句によつてもわからう。

全体指を切るのは赤誠を示すための意志表示で、必ずしも遊女の専売ではない。大阪へ始めて貯蓄銀行を創設した外山修造も指を切つた一人で、これは女を口説くための手段ではなく、東都遊学を両親がどつしてもゆるし

てくれぬので、一夜ひそかに小指を切り血判の書置を遺して越後の一寒村、小貴村をあとにしたのであつた。

この外、こともなどが固い約束を誓う時、指切というのを行つが、これは別に血を見るわけではない。

少し長過ぎる引用ではあるが、古川柳の的確な鑑賞と、句にからませた現代の事実を興味深く展開させて一気に読ませる。他に「臍の緒」「蛙」「君も僕も死ぬ話」「鼠」「女の三十」等々、表題からも漫談的雰囲気が見える。「ト昔前のお大阪見物」も面白く、

泳いでるように人形は這入る也

と文楽での写実の妙を見せられる。

路郎先生の8月以後その年後半の句、

みな呑んでるぞビールが散るぞ 夏

蚊帳の中で泳いで見せるお父さん

子等の浴衣のつんつるてんになれなれ

食うべくもないのに被てる絹の羽織

乳の出る機械に母はなっている

秋さらり銀の襖のものおもい

この句掲載は10月号で、編集後記に、

「秋が来た。句の秋が来た。思索の秋が来た。川柳詩人よ。大きく呼吸せよ。」とある。

思索をせよ、さすれば深い句が出来るであらう。大きく呼吸せよ、さすれば大らかな句

が生まれるだらう、と叱咤されているように感じられる。

嘘をまらめて書齋けうとし

その日ぐらしも軒に雀がこぼるよ

A²のB²の娘の子

肺であることなせ隠したりするんです

泣きごとは止せ止せどうせ十二月

これらは雑詠であるが、句会の課題吟は、

人妻の轡を外すその早さ

證文は要らぬしかりやりたまえ

戯れについても淋し鐘の巾

障子さえ聞きつらい程叱つて居

鼻の偉大さ山脈を思わされ

淋しさは父の大きな鼻とねる

こうして路郎は『川柳雑誌』七歳の新春、

昭和五年を迎えるのである。

尼崎市文芸祭 川柳募集

募集作品 雑誌1人2句

応募期間 5月6日～6月14日

規定 未発表作品、応募資格は不問

所定応募葉書または官製葉書

応募先 尼崎市東七松町1丁目23-1

尼崎市文化室 尼崎市文芸祭係

五月七日(金)午後五時半
メンズファッションセンター

川柳をやりはじめた二十七年前、初出席した「自安寺」での本社句会の披露を聞き、すばらしい雅号の連続にほれぼれた記憶がある。最近の柳界では、本名を使用している人が多いが、特に女性の場合同名が多く、聞きとりにくい。間違いのものになりやすいし、フルネームは呼名のリズムも狂ってしまう。

自分が講師をしているカルチャーでは、希望する受講者に雅号をつけて上げている。字画や占いは一切考慮に入れず、その人の持つ雰囲気、出会った季節、ストーリー性などをミックスしてつけ、喜んでもらっている。自分自身、雅号をつけた時、人生が変わった気がした。少なくとも人生に新しいものを見つけて行こうというきっかけにはなるだろうから、雅号について一考してほしい。

司會―天笑・東雲（受付―たず子・房子）
（記録―天笑・月子）（清記―楓楽）

中年の眞つ只中で夢を織る
 中年のロマンつちのこ追いかける
 中年の杵をすり抜け翺んでみる
 花の中年 磨いています今日も留守
 中年のレール過労死まで伸びる
 おばはんは男混浴追ひ出され
 中年の男がもう中てぬ均等法
 まだ中年もうち中年で同い歳
 変化球だけで中年勝負する
 中年を過ぎて男の握る石
 中年を騙す化粧が凝っている
 美しい嘘が上手になる中年
 中年の疲れがたまる定期券
 中年の腕に妻子がぶら下がる
 中年の恋の恐さが身にしみる
 中年の目で遠いとこ見始める
 中年のおだてに弱い鼻の下
 中年が明日を覗いた都落ち
 中年へ苦しソーソー社と家と

洋 吐 柳 満 柳 壽 千 親 楓 千 狸 笛 柳 弥 寿 み 寿
来 宏 津 影 美 シ 歩 路 楽 秀 村 生 宏 生 子 子 子
薰 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子 子

中年を家内背負うて丸木橋
 中年の鬼は情けに飢えている
 中年を過ぎると分かる物の味
 加速度をつけて中年坂駆け
 中年の野心が揺れるすき間風
 風向きがやっとわかって来た中年
 中年へヒタミンCを買うてくる
 中年の恋 消化不良の遠花火
 中年の夜遊びへ砂崩れだす
 杉さまを観るオバチャマの目が燃える

豊太
 諷云児
 房子
 房子
 志洋
 三男
 しげお
 千秀
 幸
 鬼遊

兼題「はやばや」 岩佐 丹吉選	誘惑に乗って見ようかまだ四十 中年の顔に責任持たされる 中年の坂 神様にためされる ああ中年 小石ひとつに蹴躓く 中年よ首は毎日洗うべし 中年の七ツ道具にある仮面 中年を写す鏡があせり出す 人	中年の靴に弱気の虫が住む 地 中年ばんざいの枇杷もさくらんぼも熟れる 天 中年がみんな抱いてる不発弾 軸 それからの中年 酒の量が増え たず子 正坊	萬の親 親 冬 葉 楓 樂 保 州 美代子 保 州 美代子 薰
--------------------	---	--	---

はやばやと遺書入れてある貸金庫 重人

早ばやと水着をつけた娘が通る

はやばやと呑んで食ったら寝てしまい

はやばやと蚊が飛んで来る陽気

はやばやとスイカが父の忌を告げる

はやばやと次が待ってる回り椅子

はやばやと見切りをつけた転職誌

はやばやと子供他人の素振りする

はやばやと母さん産着さけて来る

負け戦はやばや帰る仕度する

はやばやと婚約通知出した悔い

はやばやと遺産を当てにされている

はやばやと肩書捨てて野に下る

ぎりぎりに来てはやばやと帰る人

はやばやと賞味期限に迫られる

はやばやと沖縄炎えて海びらき

知り合っただけではやばや借りにくる

はやばやと自分の墓を建てて居る

はやばやと葬儀委員長決めておく

タイガース負けてはやばや店じまい

はやばやと妻に白旗出して寝る

同窓会 一人はやばや寝込んでる

内示より前にはやばや飛ぶ噂

はやばやと次の候補が踊り出す

新幹線に乗ればはやばや飲んでる

はやばやと成田離婚と言う知らせ

水泳も英語も習う三歳児

はやばやと遺産分けて大を飼う

はやばやと歪みとガタのPKO

はやばやと周りで話題になる遺産

螢 敏

吸江

新正子

章久

希久子

悦郎

稚代

美代子

達子

保州

愛論

道胤

薫

笛生

勝晴

しげお

武庫坊

透太

佳秋

章子

諷云児

悟郎

天笑

稚代

親路

岳人

弥生

ベビーベッドまだ早いのに買ってくれ

佳

はやばやと金魚を買って夏にする

引越しへはやばやお喋りやってくる

はやばやと市長代理が消えた椅子

はやばやと保釈 秘書まだ拘置中

はやばやと白旗あげて丸く生き

一点へはやばやと来た蟻の列

初当選はやばやワイロ届けられ

はやばやと少女水着を考える

死刑執行はやばや印を押はった

兼題「比較」 江口

比較もうはじまっているランドセル

一目見て良い方握る主婦の勘

比較され伸びてゆく人妻える人

ことごとく比較をされる姉妹

湯上りをリエのヌードと比較され

あのひとと比較するから胃が痛む

どうしてと死んだ家内と比較する

嫁と娘の比較はすまい木ノ芽あえ

比較するたびにフアイトの出る男

猪口一杯で酔う人一升で酔わぬひと

大根の十円の差に遠回り

比較なら高倉健としてほしい

月子

智子

萬的

雀踊子

千秀

三男

凡子

天笑

美幸

ダン吉

度選

透太

道胤

満州

諷云児

志洋

凡子

紫香

柳伸

勝美

たす子

雀踊子

一步出ると女はすべて比べあう

戒名もお布施の高で院がつき

生き抜いて運の比較はもうしない

比較的楽な相手と見た不覚

うちの娘を石田ひかりと較べても

派手な服あれで私と同一年

いろいろに迷ったはての安い肉

しあわせ度 比べる目盛りありません

比較してみんかて勝負ついている

ハイテクも比較できない二セの札

整形の鼻とは比較せぬように

酒煙草 比較してみて酒をやめ

見比べる癖が身に付く小商い

わたくしを知っているから比べない

うまいこと比較して買う市場かご

逆境の背なが比較の鞭に耐え

下を見ることを知ってる妻の背な

里の親と比較するからもつれだす

先妻と比較されてる味加減

佳

貧乏性 何でも比較してしまふ

弟とくらべられてはたまらない

飢餓の子も飽食の子も病んでいる

これが皆おない年とはクラス会

叱らずに隣の嫁をほめている

人

亀の父 兎の母を見て育ち

地

武庫坊

親路

美幸

柳宏子

勝晴

正雄

鬼遊

希久子

文秋

隆

しげお

萬的

千秀

智子

狸村

寿子

吐来

シマ子

稚代

しげお

美代子

保州

みつ子

親路

千秀

保州

天

又生児 比較してみる鼻ほくら

軸

くらべるとおにぎりがなくなることも

兼題「攻める」

榎本吐来選

弱点を知っているから攻められぬ

攻撃がボタン一つと言う恐さ

ボルボトに攻められているベレー帽

強敵もきつとアキレス腱はある

へば将棋 駒より口で攻めてくる

朝帰りじわじわ攻める河内弁

攻防の無言が続く嫁姑

遅刻して猪口三杯が攻めてくる

自画像を攻めるピストル買うておく

痛いとこ少しはずした母の攻め

攻めるにも逃げ道一つおいてやり

もう誰も攻めてはこない遅さくら

攻めようか待つかドリンクぐつと干す

学資が攻める桜の咲いた子が一人

口笛を吹いて男が攻めて来る

ニセ札の攻めに参った両替機

母攻めた言葉で今日は攻められる

さりげなく急所を攻めるイヤリング

心から攻める気のない妻の顔

じんわりと急所を攻める妻の口

やんわりと殺し文句に攻められる

その後は女涙で攻めてくる

やんわりと急所を攻めている笑顔

岡美智子

度

美代子

達子

鬼遊

親路

透太

志洋

愛論

白溪子

幸

ダン吉

トメ子

千歩

一風

悦郎

鬼遊

洋

緑良

欣史子

狸村

悟郎

透太

女

外で債鬼 内で女房に攻められる

攻撃のチャンス狙っている寡黙

もう一度攻めると本音明かすかも

いくらでも成り歩が攻めて来る怖さ

逃げ道を一つ残して攻めてゆく

カタカナに攻められている老いの日々

持ち駒が攻めの勝算持つている

弱いなあ泣いて母さん攻めてくる

攻める妻 繰す手土産朝帰り

無位無冠どこからなりと攻めなはれ

空っぽの頭を攻めて何とする

満身創痍 正攻法で生きてきて

相槌を打ったことから攻められる

外堀から攻める菓子折ぶらさげて

不倫ひとつできない癖にと攻める

地

札束で攻めると黒が白くなる

落ちるまで時間惜しめぬ煙草の輪

攻めの一手で座った椅子がきこえない

軸

価値観もセンスも鈍い妻という

切れ味は鈍いがとても親しい

鈍いのは幸せすぎるせいだろう

ある迷い鈍い夫でたすかった

勝晴

千秀

太茂津

紫香

シマ子

雀踊子

ダン吉

柳弘

楓楽

寿子

楓楽

美代子

たず子

螢

吸江

柳影

吐来

天

螢

典子

天笑

螢

洋

典子

天笑

天笑

鈍い妻になって夫を掌に乗せる

良寛の鈍さで明日を貯える

反応の鈍さにサインうろたえる

初夏の風 鈍い男と差し向かい

バラの棘 鈍い男をかばうなり

生涯を鈍い刀で父生きたる

鈍い痛みで今日が始まる発車ベル

鈍い男で片思い

鈍刀で鑄迫り合いは避けている

鈍いので気楽に生きた半世紀

銭を読む指は鈍さを忘れさせ

鈍い音して魂が堕ちていく

鈍感と言われ案外貯めている

妻の勘 鈍うて男救われる

癪癪の神経までが鈍くなり

鈍感に見えても深い傷となる

鈍感な嫁で厭味が通じない

鈍いとは言わずおっとりしてなさる

鈍い人へ愛の火加減セツとする

鈍いから強い風にも耐えられる

鈍いのか天才なのかとほけてる

鈍感な男が横に来て座り

目配せがとんと通じぬお父さん

みな笑つてから笑つとくジョーク

鈍感な男 風向き気にしない

合鍵を何のサインかわからない

鈍感な振りをしておく護身術

吐来

美幸

重人

月人

岳人

幸

文

利武

千秀

満州

緑良

文子

吸江

勝美

佳秋

文子

諷云児

智子

寿子

典子

いわゑ

女

正坊

正坊

諷云児

鬼遊

保州

— 103 —

柳界展望

編集部

★全日本川柳協会は、新年度の常任幹事の選出を行つたが、近畿2府4県からは次の19氏が選ばれた。

波部白洋・梶川雄次郎・柏原幻四郎・西田柳宏子・田中正坊・北畑金治・川島

諷云児・小松原爽介・庄司淡泉・黒川紫香・原田北涯

野村太茂津・池下まこし・玉野可川人・片岡つとむ

なお、本社関係ではこのほか小林由多香・恒松町紅

波多野五楽庵の3氏が選出され、法定の理事である西

尾栗・橋高薫風両氏は除外されている。

★全日本川柳協会はこのほど川柳人バッジを作った。

川柳の「川」と「せ」を表

すデザインで、純銀製金張り。特ネジ・ピン止め・タイタックの三種のタイプがあり、価格はいずれも千四百円（送料二百円）。同協会ではこの意匠を会章として旗・腕章にも使用するこ

ととしている。



★第13回ときせん賞が次のとおり決定した。本社同人の三宅つと子・田中透太両氏は佳作に選ばれた。

〈ときせん賞〉

お互いに少し他人の顔が好き

磯野エイ子

〈準ときせん賞〉

花の無い部屋で重ね着ばかりする 齋木 敏子

水を呑む敵の背中は撃ちにくい 小川 斐山

今はもう私をだます化粧する 長井 紀子

★平成4年度「あい」柳壇の最優秀句は次のとおり。

真心で話せばわかる黒黄 白 砂田 静佳

★平成4年度の白石朝太郎賞は板橋柳子氏（東海市）に決定した。

★川柳はつかりの年度賞が次のとおり決定した。

騙されてばかり許してばかり風 熊谷 岳朗

★川柳こなゆきの平成4年度冬眠子賞は近藤一車さん（札幌市）に決定した。

★松江番傘川柳社の第11回マツパン大賞が次のとおり決定、本社誌友の大原雅女

さんは準大賞となった。

父ちゃんと男同士になる 湯舟 広田 一步

二千年連作がきく米づく 昌子 萬吉

夜汽車には男の泣ける場所がある 杉原 具人

★札幌川柳社の平成4年度各賞が決定した。あかしや賞は熊谷美智子（札幌市）

ばぶら賞は板野美子（堺市）

幌都賞は藤木晴好（札幌市）

の3氏と何れも女性で、功

労賞は池永龍生氏（広島町）に授与された。

★平成4年「路」年間賞が決まり、本社同人の千葉風樹氏が優秀賞に選ばれた。

〈最高賞〉

裏返すと銃のかたちになる秋刀魚 瀬々倉卓治

〈優秀賞〉

槍一筋の男です 過労死 保田 二郎

テトラポットがある人間になれそうだ 千葉風樹

★越智一水氏（理事・今治市）は4月14日から30日まで今治郵便局ゆうゆうー

むでトラヨ夫人と共に「川柳と和紙ちぎり絵夫婦作品

展」を開き、川柳に水墨画を添えた色紙・短冊約二十点を出品、好評であった。

★第65回奈良県川柳大会が4月18日、西大寺本坊で150名が参加して開かれたが、本社同人の宮口笛生氏（常任理事）が最優秀賞を獲得した。



★川柳「路」吟社主宰関水華選の川柳作品の募集が行われている。未発表の作品をはがき1枚に3句以内を書いて毎月未まで左記へ。

秀作には粗品が贈られる。

〒113 東京都台東区寿2-1-13 日本エルシーエー

医療情報部・趣味の川柳係

— 104 —

★全日本川柳協会会長・前参議院議員仲川たけし(幸男)氏は、4月29日に発表された春の叙勲で勲二等瑞宝章を受章した。

★川柳都大路社はこのほど平成4年度の群像賞を決定した。同人の部は上島みゑ子、準賞に中井みきお、誌友の部は鍋島十歩、準賞に門谷たず子の各氏が受賞。★'93ふあうすと川柳大会が4月25日、神戸市立婦人会館で開かれたが、本社同人の林荒介氏(米子市)は二つの課題で秀句賞を受賞。

★第16回阪神文芸祭は7月18日午後1時から西宮市立夙川公民館で開かれる。当日は先に募集した川柳などの入選句の発表があり、人形浄瑠璃因協会常務理事の田結莊哲治氏が「暮らしの歳時記」と題して講演する★高齢者のための螢池教養教室が4月から11月まで豊

中市立螢池公民館で開かれるが、9月16・30両日、橘高薫風本社理事長が「川柳を楽しむ」と題して講演。

★柳都川柳社創立45周年祝賀川柳大会が7月25日午前10時から新潟市上所2-11-33のハミングプラザで開かれる。会費3000円で「大野風柳の世界」と題して寺尾俊平氏が講演する。宿題と選者次のおり(各題1人2句・投句拝辞)▽波・孟(当日選者発表)▽矢▽尾藤三柳▽霧▽桑野晶子▽友▽藤沢岳豊▽首▽時実新子▽石▽東野大八▽鍵▽河口弘▽席題▽大野風柳

★番傘川柳本社は創立85年記念全国川柳大会を11月14日午前10時から奈良ロイヤルホテルで開く。宿題は、食べる・ことは・ドラマ・日本・虫・人間で、橘高薫風本社理事長が「虫」の選を担当、事前投句は「明日」

となっており、各題2句。会費は4000円(軽食・川柳入門呈)、懇親パーティーは申込制で8000円

▽出版△

■土居ひでの川柳句集「母娘草」(B6判94頁・選暦記念出版) 橘高薫風・小林妻子序文

■岩出川柳会発足五周年記念句集「まごころ」(A5判80頁) 会員20名と退会者6名の句を取録、岩出川柳会と世の中の動き・会員の一言を添えている。

■「朝日なになに柳壇」第8集「(A4判68頁・朝日新聞社刊) 平成2年から同4年までの3年間にわたって朝日新聞大阪版に週一回、連載された「朝日なになに柳壇」の全入選句を取録。

▽同人消息△

■小西雄々氏(本社参予・鳥取県)は春の叙勲で鉄道業務功勞として勲六等瑞宝

章を受章した。

■井上孟司氏(本社同人井上照子さんの夫、大阪薫英女子短大特任教授・前吹田市教育長) 4月18日、心不全のため死去、65歳。告別式は20日、吹田市内の大雄院で行われ、本社から高杉鬼遊氏らが参列した。

▽訂正△

■4月号P18下段13行目「植田英詩」↓「横田英詩」
■5月号P25上段7行目「榊井路児」↓「榊本路児」
P39表題「大空のこころ」(28)↓「大空のこころ」(29)

▼計報▲

新同人紹介

中野 櫻子
— 薫風・金治・静雄推薦 —

古市 三千代
— 薫風・静雄推薦 —

万句合漫步

田中 薫

宝暦七年（一七五七）八月、江戸浅草新堀端龍宝寺門前の名主、川柳柄井八右衛門が、前句付点者として立机したとき、元禄期上方から江戸に流入していた前句付は、既に相当な興隆をみていたと考えられ、前句付点者も江戸にかなりいたと思われる。

当時江戸には、組連と称する取次が、各町と言わないまでも、各所に点在しており、投句者はすべてこの取次を通じて、点者の評を待ったのであって、投句をどの点者に委ねるかは、取次の裁量が大きく働いたであらう。そのような状況で、後発の川柳への集句が寥寥としていたのは当然で、宝暦七年八月二十五日開きの第一回目の寄句高、わずかに二〇七員と記録される。

以後、川柳評は、

宝暦八年十一月十五日開キ 五三〇〇

九年十一月二十五日開キ 六一四〇

宝暦十年十月五日開キ 八一〇五

十一年十月二十五日開キ 六六七二

十二年十月五日開キ 八五五六

となり、宝暦十二年十月十五日開キに至って一〇四九〇句と、文字とおりの万句合となった。そうして、このころから川柳点は、その集句数において、同時代の点者の頂点に立つことになる。川柳点万句合は、毎年八月（七月のこともある）から十一月までの五十五・二十五日に開かれており、年間十二回の川柳評には、毎年、十萬句を超える集句があったと思われる。川柳は、その死の前年に当る寛政元年（一七八九）までの三十三年間、万句合を興行した。集句数の総計は、未発見のもの、の推計を含めて、実に三百萬句に達する。さて、右のように柄井川柳が同時代の点者を凌駕した因はどこにあるのか。勝番句に与えられる賞品も、他の万句合と大差がない。無論、川柳点に対する信頼度は充分評判になったであらうが、勝句率が二・八三%と安定していたこと、当初の入花料が他の十六文に比べて十二文と格安であったことは見逃せない。それに川柳点の公平が、年を経るに従って人気を高めたというのが妥当なところであらう。

そこで、万句合の興行によって川柳がどの

くらいの収入を得たかと言うと、生涯の寄句高三百萬として計算すると、合計一万九千二百兩、賞品、経費に五〇%控除、三十三年間の平均年収三百兩弱となる。白米にして、宝暦元年（一七五〇）の物価で二百四十石、あまり適切ではないが、米の価格から現在の貨幣価値に直して千四百万円強である。これが柄井八右衛門川柳が万句合で得た年間収入であったと考えられる。金儲けとは縁のない今日の川柳界からは隔世の感がある。

また、川柳評万句合における各取次の得た勝番句の集計を追うと、下町一に対して、山の手二の割合で分布しているという。

山の手にも商家の住まいや町家も混在していたであらうし、浪人や下級武士、それに僧侶なども下町の住人であったろうから、一概には言えないにしても、川柳点万句合への投句者の多くが、当時の知識層であったのは、まぎれもないことである。そうだとすると、柳多留の中の私の好きな句の一つである

死に切つて嬉しそふなる顔二つ

などは、ひよつとしたら、封建社会の締めつけに、自分の生き死にさえ自由にならない下級武士の、武家社会へのアンチテーゼであったのかも知れないと空想してみるのも、また一興といふべきか。

6 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(火)午後1時から 摺む・調子・偉い・欲	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	4日(金)午後1時から 惜しい・口・湿気・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
八尾市民 川 柳 会	10日(木)午後6時から 好き・螢・威力・雨季	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
川 柳 塔 まつえ	12日(土)午後1時半から 肩 書・ひとり・青 空	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	13日(日)午後1時から 突 然・独 身・泥	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	14日(月)午後1時から ピンク・歩く・社会・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
高槻川柳 サークル 卯 の 花	17日(木) 正午から 足・流れる・少年・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
富 柳 会	17日(木)午後1時から 雫・余 り・狂 う	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南 海 川 柳 会	18日(金)午後6時から 売店・親心・爆発・苦情	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
南 大 阪 川 柳 会	19日(土)午後6時から 便利・目星・えらい・連中	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
川 柳 ねやがわ	20日(日) 正午から 雨・地図・バランス・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	21日(月)午後1時から 日・四角・憎い・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
岸 和 田 川 柳 会	24日(木)午後6時から サイクル・硯・せかせる・新兵	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	25日(金)午後1時から 円・招 く・人 柄	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
東大阪市 川 柳 同 好 会	26日(土)午後6時から 探す・根・べんちゃら・道	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 川 柳 会	27日(日)午後1時から 喫茶店・先輩・テレビ・(留守)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編集後記

★朝、新聞を読む。一面の大見出しをチラリ、ついできょうの天気と気温を見た後、目は社会面下段の死亡記事へ。私たちの年輩に共通したパターンらしい。月に何回か、知人あるいは関心を持つ知名人の訃報に出会う。一瞬、その人の思い出が走馬灯のように脳裏をよぎる。このところ、このようなことが多くなった。

★最近、気が付いたことだが、友人・知人に同年輩の者が多いのはあたりまえとして新聞に掲載されるほどの名士で私よりもずっと年上と思い込んでいたのが、同年であつたり、あるいはいくつも違っていない。それだけ私が年をとったということになる。戦時下に学生時代を送り、常命は二十

歳と思い定め、事実、学友の四分の一がそのとおりになった私たちの世代にとつて、七十歳というのは異例の長寿としていいだろう。

★ここ一、二年、「古希」を詠み込んだ句ばかり作つて人に笑われたので、もういい加減にするが、最近、ある新聞の投書を読んで心を打たれた。「私は今の老年のこの人生を、とにかく楽しく美しいものと思つてゐる。なぜだろう」と問ひかけ、「普通の場合、生があるから死があると考えられているが、今の私は、その逆に死があるから生があると考へているのではあるまいか」としている。

★(無職 73歳) 正に我が人生の戦友で、この発想の転換に学ばねばならないと思つた。一九九三年ももう半ば、これからの一日一日を大切に生きたい。(正)

○「死んでいる私 今まで忘れてた」これは同人の寺井東雲氏の句である。抱腹と絶倒させられる氏の宴会での芸と、その昔、特攻隊員の研修設備のほかに、戦没学徒記念館がある。太平洋戦争中、戦場や軍需工場で逝つた、二十万人の学生の霊をなぐさめるための建物に死神と向ひ合う、修羅場の日々だったことは、想像に難くないというのに……

○淡路島南淡町の小高い大日に戦死したとして、展示してあるそうだ。本人の遺品と対面して、前出の句ができたわけである。財団法人の調査不足ですませられない問題で、これはまさしく「やらせ」ではないか。

○川柳の世界では、ときどき「やらせ」を楽しませてもらつてゐる。題をにらんで「さて、今日はジゴロになろうか、悪女になつてみようか」なーんて……(ふ)

ひとこと

教科書と文学作品

山本周五郎の作品が高校の国語教科書に登場したのは、今から二十年前の昭和四十八年であつた。『小説日本婦道記』の中の「葎の蔭」で、しかも全文掲載された。いわゆる大衆文学は、教科書に取り上げないのが不文律だったらしいが、その後、周五郎作品は中学校の教科書にも掲載されている。私は周五郎ファンの一人だが、彼の作品は大衆的な文学ではあるが、大衆小説だとは思っていない。言うなればビルドゥングスロマン(教養小説)であると理解している。それなら教科書に掲載しても一向に恥ずかしくはない。

「川柳を教科書に」という全日本川柳協会のスローガンには賛成だが、この運動を進めるにあつては、そのあたりの事情も参考にしたい。 島江 一夫

作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫 選
銀河系 (3句) 河内 天 選
茴香の花 (3句) 小出 智 選
「ソース」 山口 美穂 選
「這う」 石原 淑子 選
「のどか」 北原 勝美 選
初歩教室「水着」 (3句) 吉岡美房担当

8月号発表 (6月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

9月号

課題吟 「味噌」「願う」「ひらたい」

初歩教室「ガラス」

本社6月句会

日時 6月7日(月) 午後5時半
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-1 電話06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
兼題 「ぶらぶら」
「吸う」
「毎」
「日」
「字」
「朱」
席題 1題 当日発表 各題2句以内
投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと
柳箋(4cm×19cm) 1葉に1句を書き、

本社7月句会 7日(水)

兼題 「ゆっくり」「振る」「風景」
「高い」「帆」

夜市川柳募集

第1回「葉」 新家 完司 選
ハガキに3句 6月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題 「欲」 森中恵美子 選
ハガキに3句 6月10日締切
投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 6月27日(日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題 「自転車」 森中恵美子 選
ハガキに3句 6月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

発行所

川柳塔社

電話(06)691-6914番

振替口座大阪813336八番

定価 六百元(送料51円)

半年分 三千八百円(送料共)

一年分 七千五百円(同)

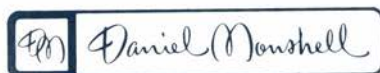
平成五年六月一日発行

編集兼 西尾 敏 社

印刷所 藤原 童心 社

大阪市阿倍野区三好町二〇一六

ウエムラ第2ビル202号室



泣いて笑って……
夜を通り過ぎたら
また陽がのぼっていた
男のロマン

オーエスケーの
紳士服

株式会社 **オーエスケー**

〒540 大阪市中央区南新町1-4-7
(06) 941-8018

■ 自分史・句集自費出版

■ 小・中・高・大学の教科書

■ 各種本の製作・出版

いろいろな

本

製作専門!

◇ 句集・詩集・自費出版等のご相談に応じます。

- 部数の少ない本も取り扱っています。

書籍・図書・印刷・電算

ミヤケ プランニング

MIYAKE
planning

〒557 大阪市西成区千本南1-12-8

電話 06-659-5514

FAX 06-652-2928

図書出版・ジェイパブリッシュ

電話 06-658-8741